山田大輔は主人公ではない

ときときと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
山田大輔は主人公ではない

【Ｎコード】
Ｎ８４０９Ｕ

【作者名】
ときときと

【あらすじ】
第一章あらすじ。山田大輔は何かと『事件』に巻き込まれやすいが、ポジションはいつも脇役だった。そして今回は、妖怪とか幽霊とか出てくるみたいです。特別な力など何も無い少年は、基本何の役にも立たないけれど、今日も脇役として頑張ります。初作品です。習作として皆様のご意見やご指摘をお待ちしております。読んでくれた方の暇つぶしに少しでも貢献できたら幸いです。第一章完結しました。第二章魔法少女編開始しました。

プロローグ

一つ例え話をしてみよう。
荒唐無稽な話かもしれないが、できることなら想像してほしい。
幼き頃から、何かと厄介事に巻き込まれてきた少年が居たとする。
それに少年の意思はほとんど関係なく、まるで一種の才能のようにそれらへと引き寄せられてしまうのだ。
これだけを聞くと、まるで何かの『物語』の主人公だと思われるかもしれないが、あくまで少年は巻き込まれるだけである。
その少年には特別な力は何もなく、それら厄介事の数々を解決に導くこともできずに、ただ毎回巻き込まれてきただけなのだ。
そんな少年を客観的に見ることができる人が居たとしたら、人は少年を何と表現するだろうか？
脇役ですね、わかります。
まぁ、ぶっちゃけ少年とは俺のことだ。
意味もなく例え話とかしてすまん。偶に、発作のごとく愚痴りたくなるときがあるのだ。
だからまぁ、少し付き合ってくれ。
俺の名前は山田大輔（やまだだいすけ）。ごく普通の高校二年生だ。
見た目はこれといって特徴の無い黒髪黒目中肉中背で、もう「特徴がないのが特徴でよくね？」って感じの一般人である。
だが見た目以外なら、特徴と言えるモノがあったりする。
先にも話したが、実は数多くの主人公と言われる方々持っている、俗に言うところの『厄介事に巻き込まれやすい』という素晴らしい性質ともよぶべき才能が俺にはあるのだ。
俺はこの才能で、今も昔もいろいろな『事件』に巻き込まれてきた。
これだけ聞くと「なんだ、たんなる主人公体質じゃねーか」「はっ、それでどんな異能者ですかあなたは？」「でっ、ヒロインは可

愛いの？」「俺と代わってください」などという声が聞こえてきそうだが、まぁ待て。もう少し俺の話を聞いてくれ。
確かに、まるで主人公のような才能だが、残念すぎることに俺には何の力もないのだ。
超常的な忍術も使えなければ、死神になれるほどの霊力もない。ましてや、俺の父親は魔族なんてことは絶対にあり得ない。
だから危険な『事件』に巻き込まれたら、生き残ることに必死だった。
主人公ポジションの方々に助けられた回数など、両手では足りないほどである。
見事なまでに、俺は脇役だったのだ。
だが何も、俺は脇役が好きなわけではない。
そりゃぁ、できることなら俺だって主人公ポジションに立ちたい。決して脇役を馬鹿にするわけではないが、俺だって男の子だもの。
『物語』の中心に立ってみたいと思ったことは何度もある。
かっこよくヒロイン助ける自分の妄想しながら、主人公目指して頑張っていた時期もあるのだ。
何か異能に目覚めないか異能者に聞いてみたし、魔術なんかも勉強した。
それに事件を自分で解決しようと、奮闘したこともある。
それらすべて意味が無かった。俺には才能がなかったのだ。
そんな俺に止めを刺したのが、友人に巻き込まれ異世界に召喚された『事件』だ。
異世界のやたら厳かな教会みたいな所で、神父みたいなおっさんに職業適性みたいな事をされて、その結果を知って俺は悟った。
友人は案の定、勇者でした。可愛いシスターさんみたいなのから、白銀の綺麗な剣と鎧をプレゼントされてました。
俺は――踊り子でした。町一番の踊り子から、エロ可愛い衣装をプレゼントされました。
仲間達が一生懸命モンスターと戦っている中、俺は必死に踊って

ましたけど何か？
戦闘中、仲間の魔導師の目線が冷たすぎて死にたくなりましたけど何か？
もうね、誰でも悟るよね。悟りすぎて　生きていくのも辛くなったけど。
俺は主人公ではない。
だから、俺は自分の才能を恨んだ。だって脇役でしかない人生なんか最悪だろう？　しかも巻き込まれるたびに、大抵命の危険すらあるのだから。
結果、拗ねました。
部屋に引きこもり、信じられる友達はパソコンだけになった。ネットゲームでは英雄になれたし。
まぁそれも長くは続かず、いろいろあって社会復帰を果たした俺は考えを変えた。
もう脇役でもいいや、と。
開き直ったとも言える。
だって、よく考えてみると、主人公とか命が幾つあっても足りないレベルだし。恋愛モノですら血みどろの三角関係とかあるのだ。
もう主人公とか危険が危ない。
むしろ脇役万歳である。
関わってしまったら無視できない性格なので、巻き込まれたら端でコソコソ裏でゴソゴソとライトの当たらない場所で俺は頑張っているから、事件解決については主人公ポジションの皆さん頑張ってください。俺は基本役に立たないので。
なんせ、俺こと山田大輔は主人公ではないのだから。
まぁ、一番はいいのは『事件』に巻き込まれないことなんだけど、それは無理だろうな、と諦めている。
実際今も、何らかに巻き込まれているし。
「まただよ」
ため息と共に呟き、俺は学校の廊下を全力疾走していた。

背中に人を抱え、背後から迫る異形との鬼ごっこである。物理的にも、精神的にも辛いものがあった。

しかし脇役でしかない俺には、そのうち主人公が助けに来てくれると信じて逃げ続けるしかないのだ。

「あぁ……今回は幽霊か妖怪関係かなぁ」

こんな事ばっかなのだ。愚痴りたくなる俺の気持ちも、少しは理解してもらえると思う。

マジ誰かこの才能どうにかして。

プロローグ（後書き）

初めまして。
初投稿となりますので、至らぬ点ばかりだと思います。皆様にご指摘いただければ幸いです。

其の一

事は一時間ほど前に遡る。

夏休み前の期末試験を控えた、連休前の金曜日。

夕飯を食べ風呂に入り、さて試験勉強するか、と通学鞄を開けた俺は、そこに勉強道具がないことに愕然とした。

それなりの進学校で、それなりに真面目な俺だが、それでも毎日教科書を持ち帰るほど勤勉ではない。

つまり、いつもの癖で教科書類を置いてきてしまったのだ。

これはマズイ、と急いで学校に向かう。

幸い俺は、徒歩通学ですむほど学校と近い位置に住んでいる。これが電車通学とかなら、さすがに俺も向かわなかっただろう。

そんなわけで十分ほどで学校到着。まだ先生が残っていたようで、すんなり入れた。

そして、二階の教室のドアを開け、再び俺は愕然とすることとなる。

暗くてそれが何かはわからないが、窓際の俺の机に何かが刺さっていたのだ。

驚きのあまり、途中で買った缶ジュースを落としそうになりながらも、ふらふらと自身の机に歩み寄る。

そうして見えたのは、よくわからない落書きをされ、よくわからない尖ったモノを中心に刺された俺の机だった。

「……嘘……だろ」

まさかの虐めである。

ドラマや小説などの虐めで、机に罵詈雑言を書かれたり、花瓶に挿された菊の花を置かれるなどは見たことがあるが、ここまで斬新な虐めは過去あっただろうか？　いや、ないだろう。

だが、いくら発想が斬新だろうと、俺の心に感動は生まれない。

机に描かれた魔法陣らしきものと、机の中心に聳え立つ昔見た独（どっこ）

鈷みたいなものが俺の心に齎すのは悲しみだけだった。
オカルト研究部にも、黒魔術信仰部にも恨みを買った覚えはないが、そんなことを考えたところで目の前の虐めという事実は消えない。
俺は電気をつけ、零れそうになる涙を堪えながら独鈷もどきを抜こうと引っ張る。
「……抜けねぇ」
予想以上に深々と刺さっているようだ。いったい俺はどれほど嫌われているのだろうか。
さらに追い討ちをかけるように、独鈷もどきを抜こうとガタガタやっていたせいで机の上に缶ジュースの中身が零れてしまった。
登下校で毎日買っているほど好きな『デロドロインドジュース』が机全体に広がり、散々な様相を呈する。
ついでに俺の瞳からも涙が零れた。
何かもう悲しみとか絶望とかが溢れかえりそうになり、その場に座り込みそうになった瞬間、
「えっ？」
机に描かれた魔法陣もどきが光った。
それに驚く間も無く、続き独鈷もどきを中心にその光が教室を、さらには恐らく学校全体をも包む。
一瞬光に目を瞑るが、すぐに光自体は収まった。
目を開ける。
電気をつけたはずなのに薄暗い。
――何かかが変容していた。
「この空気は……」
覚えがある。
肌が粟立つような、空間が歪んだような感覚。
昔、初めて夜の学校を訪れた時と同じだ。
あの時と、人外のモノと初めて対峙したあの夜と、同じ。
幽霊を見て泣きながら逃げ出し、最後には同伴者の女の子に抱き

つき助けを求めた、あの夜と同じだ。
懐かしい記憶である。
そんな思い出も、今では立派に俺の黒歴史。
「……」
俺は現状と思い出に打ちひしがれ、その場に完全に座り込んだ。
「これは虐めなのか？　それとも何かに巻き込まれたのか？」
恐らく後者だろう。というより、こんな手の込んだ事が虐めとか認めたくない。
そうだとするのなら、座り込んでいる場合ではなかった。
もしかしたら、視えないだけですぐ後ろに幽霊が居るかもしれないのだから。
何もできずに、ただ泣いていたあの時の俺とは違う。
俺は震える足に喝を入れ立ち上がる。
そして、ウエストポーチから『大輔秘密道具その三』を取り出した。
それは符。幾何学模様と呪文が所狭しと描かれた、力ある呪符。
人は成長するものだ。
そう、俺は恥ずかしさのあまり悶え苦しむ思い出をバネに成長したのだ。
あれから経験を重ね高校二年生となった俺は、この特別な符によって常に魔を視ることができるようになった。
この符がとても便利な代物で、なんと頬の辺りに貼ると一般人の鑑である俺でも、幽霊や妖怪が視えるようになる、目からウロコなチートアイテムなのだ。
この符に俺の逃げ足があれば、たいていの脅威からは逃げることができる。
そう、逃げることができるのだ。
……。
さて、お解かり頂けたであろうか。
はい、その通り。

あれから俺自身は何も成長していない。今でも幽霊や妖怪は怖い。だって俺脇役だもん。異能とかないもん。
さらに言うなら、俺は視えるよりも視えない方が怖いので、頬にぺたりと。
「……」
「……」
符を貼ったとたん、目の前に幼女が現れました。
何を言っているかわからないと思うが、俺もまったく理解できないので問題ない。
「……」
「……」
幼女は俺の椅子に座り、此方を凝視している。
俺も負けじと凝視する。
肩口で切りそろえられた髪に幽霊のように白い肌。服装は現代日本では浮くであろう赤い着物。
文句なしに可愛い。
持ち帰っていいだろうか？
「大さんは変態だなぁ」
「それほどでもない」
「……」
「……」
今のやり取りに、いろいろツッコミどころがあった気がするが、この子が可愛いからどうでもよかった。
「えーと、俺は山田大輔。君は？」
「大さん、私は綺鬼（きき）だよ」
「そうか、綺鬼ちゃんっていうのか。いい名前だね。ところで、どうして綺鬼ちゃんはこんな所に居るのかな？」
「大さん、大さん。変なのが来るよ」
「えっ？　どうゆう意――」
俺の言葉が終わらないうちに、教室のドアが開かれる音が響いた。

驚き、慌てて振り返る。
「うぁっ！」
そして、ソレを視てしまい、恐怖に息を呑んだ。
視界に映るは異形。
下腹部から下が欠損し、両腕を使い起つ女。
切断面から垂れるのは腸か背骨か。薄暗くてよくわからない。いや、わかりたくない。
ソレは、通称テケテケと呼ばれる妖怪だった。
「ギァァ！」
「くそっ！」
テケテケが叫び声を上げ此方に向かってくるのと、俺が綺鬼を抱き上げテケテケが居るのとは逆のドアに向け走り出すのは同時だった。
そのまま教室を出て、廊下を駆ける。
とりあえず、勢いで綺鬼も抱えてきてしまったが、まったく後悔していない。
符を貼って視えだしたことから、明らかに人外だけど気にしない。
可愛いは正義って名言だよね。

其の一（後書き）

誤字や脱字などがありましたら知らせてください。
こうしたほうがいい、などの改善点がありましたらお教え願います。

其の一　2

こうして、テケテケとの鬼ごっこが始まった訳である。
何の力もない俺は、今も脅威を退治することもできずに、全力全開で絶賛逃走中だ。
逃走開始直後と変わったことといえば、走り辛かったので抱っこからおんぶに変わったくらいである。
「うおぉぉぉぉ！」
雄叫びを上げながら、廊下の突き当たりで急カーブ。
そのまま息もつかずに階段を駆け上った。
依然、背後からはテケテケテケテケと軽快な足音？　が響いてくる。
「なんでテケテケがいるんだよ？」
恐怖を紛らわすために意味もない愚痴をこぼし、走りながらちらっと後ろを振り向いた。
テケテケさんは両手を使い、一段飛ばしで階段を上っています。
すごいね。器用だね。俺にはとてもできないよ。
一瞬現実逃避しそうになるが、気を取り直し急いで廊下を駆ける。
鬼ごっこ開始から今まで、廊下を走る、階段を上り下りする、の繰り返しだ。
そんなことしていないでさっさと外に逃げればいいのに、と思うかもしれないがもちろん俺も最初は外に逃げようとした。
だが、こういう展開のお決まり通り学校からは出れなかったのだ。脱出系のデフォである。
窓は開かないし、昇降口に限っては存在ごとなくなっているという徹底振り。
どなたか知らないが、この企画にだいぶ力を入れていることが伺える。
その上、地下何階まであるんですか？　って言いたくなるほど階

段を下り続けることもできた。今は、何か下り続けるのも地獄とかに続いていそうで怖くなり、上り続けている。
「くっそぉ！　そもそも何で俺は追われてんだよ！」
噂では、テケテケに捕まると足を切断されるそうだ。是が非でも勘弁してもらいたい。
これが、ちゃんと下半身もあって背も低くて幼くて愛くるしい子なら、むしろ俺が追いかけるのに。
突き当たりに差し掛かり、繰り返し階段を上り、またまた廊下を駆ける。『廊下を走ってはいけない』という貼り紙が見えたが知ったこっちゃない。
その貼り紙を通り過ぎたとき、ずっと俺におぶさっていた幼女が声を上げた。
「大さん、大さん。走っちゃだめらしいよ」
「いやいやいや！　走っちゃいけないのはわかるけど、今はそれどころじゃないでしょ！」
肩越しに声の主を見る。
肩口で切りそろえられた髪に幽霊のように白い肌。服装は現代日本では浮くであろう赤い着物。
名は綺鬼（きき）。
――恐らくは、常識の外にある怪物。人ではない存在にして、人の形を取る魔。
今更だけど、此方に悪意がない様で何よりである。
まぁそれは置いておくとして、いきなり何を言い出すかこの幼女は。
校則を守るために死を選ぶなど、校長先生でもありえない。
「大さんは悪い子だなぁ」
「悪い子でいいよ生きられるなら！　それより綺鬼ちゃん、そろそろ降りて自分で走ってくれないかな？　お兄さん綺鬼ちゃん背負って走るの辛くなってきちゃった！」
「やー」

「うそーん？」
にべも無く俺の願いを一蹴し、ぎゅっと首に手を回してくる。
おかしい。
この子は、綺鬼は人外の存在のはずだ。符を張るまで視えていなかったのだから、間違いないだろう。
なら、後ろの化け物を倒せないとしても、一人で逃げることくらいはできるのではなかろうか？
もしそうでないなら、つい先ほど考えた俺の綺鬼を表す言葉が痛すぎる。
「大さん、大さん。追いつかれちゃうよ」
「唸れ俺の大腿筋！」
だからと言って、ほっぽり出すわけにもいかない。
いくら人外だからと言っても、この子には戦う力がないのかもしれないし、戦えない理由があるのかもしれないのだから。
それに、先ほどの『やー』が可愛かったので、もうそこらへんはどうでもよかった。
なんかまだまだ頑張れる気がしてきたので全力で廊下を走りぬけ、
「そいやっ！」
階段を無視し、いっきに一階の踊り場まで跳ぶ。着地成功。
「だけど足が予想以上に痛い！」
我慢だ俺、我慢だ。男の子だろう。まだ頑張れるはずだ。
自身を鼓舞し、綺鬼を背負い直してまた廊下を駆ける。
さて、これからどうするか。
現状、考えられる選択肢は多くない。
俺が選べる札は――脱出が無理となると脅威を撃退するか、逃げ続けこういった事の専門家との遭遇を待つ、の二枚である。
俺一人なら頑張って立ち向かったかもしれないが（あくまでも、かもである。一パーセントくらい）綺鬼がいる。俺は綺鬼の安全も考え、行動しなくてはならない。
とりあえず、適当に走り回っていれば撒けるかも、と淡い希望を

抱いていたが無理だったみたいだ。手だけのくせして、存外テケテケさんはアスリートである。
そうなってくると、このまま走り続け助けを待つのが無難かもしれない。
逃げるしか手がないというのはなんとも情けないが、脇役で一般人の俺にできることなど高が知れているのだ。
下手なことして、状況を悪化させることだけは避けたい。
だが、このままただ無作為に走り回るというのも微妙だ。
もしかしたら、専門家の方々がもう来ているかもしれない。此方から何かわかりやすいアクションを起こし、なんとか向こうに気づいてもらえないだろうか？
僅かに逡巡するが、俺の灰色の脳みそでは何も浮かばなかったので綺鬼に聞いてみる。
「なぁ綺鬼ちゃん。何か人外の力みたいなので助け呼べない？」
「やー」
「……」
その返事は、できないから嫌なのだろうか。
それとも、できるけど俺なんかのために何もしたくないという意味なのだろうか。
どちらにしても、頬ずりしてくる綺鬼が可愛いすぎるのでどうでもよかった。
仕様が無い。
疲れが増す上、俺の声を聞き別のものも寄ってきそうで不安だが、ためしに大声で叫んでみよう。
走りながら一度大きく息を吸い込んで、どうかこの声が件の人らに届きますようにと願いを込め、俺は大声を上げた。
「誰かー！　誰か助けてくれー！」
「ギァァ！」
「お前じゃねーよ！」
まさかの後ろからの返事に、ついツッコミをいれてしまう。俺の

声と願いが届く範囲の狭さに泣きそうだ。
後ろを振り向くと、依然テケテケが追走中。なんとも清々しいほど笑顔である。
おぞましい姿形なのに、その童顔がとても愛らしいのがまたむかつく。
「くそぅ！　可愛いなあいつ！」
「大さん、大さん。それは変態すぎるよ」
抑揚はないが、どこか呆れたような声が背中越しに返ってくる。
しまった。どうやら思ったことが口を出ていたようだ。その部分だけ聞かれたのでは、まるで俺が下半身のない可愛い女の子が好きな度し難い変態みたいではないか。弁解しなくてはならない。
「違うよ綺鬼ちゃん！　俺が可愛いくてどうにかしたいのと思っているのは、後ろの化け物じゃなくて綺鬼ちゃんだよ！」
「大さん、それは限りなくアウトだよ」
弁解したつもりが、さらに自分を追い込んでしまった。なんというセルフＳＭ。
最近の世の中は、俺には少し生き辛い。
そんなことを考えていると、今一度階段に差し掛かる。
その階段を上り、繰り返し先ほどの貼り紙を横目に廊下を駆けた。
すると、また綺鬼が注意してきた。
「大さん、大さん。廊下は走っちゃだめだよ」
「もうね！　ずっと走ってるから今更だよ！」
本当に、もうだいぶ走り続けている。さすがに疲れてきた。
なんか先ほどから、廊下が異様に長い気がする。確実に何かが悪化していた。
「大さんはすごい悪い子だなぁ」
「生き……残るため……さ！」
喋るのも少し辛くなってきた。限界が近いかもしれない。
今でも接戦なのだ。少しでもスピードを落とせばすぐに追いつかれてしまうだろう。

追いつかれたら、俺が追跡者テケテケを足止めし、綺鬼を逃がす時間を稼がなくてはならない。
その場合、俺はまず助からないだろう。だが、綺鬼の生存率は上がる。
これは覚悟を決めなくてはならない。俺は人外だろうと、決して幼女を見捨てはしないのだ。
後ろをチラ見する。
テケテケさんは相変わらず、いい笑顔と気味悪さである。
俺のスピードが増した。
これは覚悟を決めるのは無理かもしれない。
俺が秘かに悩んでいると、突然綺鬼が驚くべき行動に出た。
「大さん、大さん。そういえば悪い子にはお仕置きだって誰かが言っていたよ。えいっ」
「えっ？　綺鬼ちゃん？」
綺鬼はいきなり、俺の頬に貼られていた符を取ったのである。
これは酷い。
「ちょっ！　それはやばいって綺鬼ちゃん！　早く貼って！　もう一度貼って！」
「大さん、悪い子にはお仕置きだよ」
これはお仕置きってレベルではない。こんな事がお仕置きとして許されるのなら、世の中に性癖がMの人がいなくなるだろう。
――だが、何故だろう。今の俺は少しドキドキしている……。
現実から目を背け、後ろを振り返る。
「やっぱり視えない！」
先ほどまで視えていたテケテケが視えない。ついでに綺鬼も視えない。
視えていた分だけ、視えなくなった恐怖は半端ではなかった。
どこからかテケテケテケテケという足音？　が聞こえ、俺の恐怖心は限界突破しそうだ。なぜ、音は聞こえるし。
よくわからないが、どうせ先ほどからわからないことばかりだ起

きているので気にしないことにした。
それに、今はそれどころではない。
「綺鬼ちゃん！　本当にやばいって！　お願いだから返して！」
「やー」
「可愛いから許す！」
いや、許しちゃダメだろ俺。そしてノリツッコミしている場合でもない。
「綺鬼ちゃんお願い！」
「大さんは仕様が無い人だなぁ」
そう言って綺鬼は符を貼ってくれた。
――両目を塞ぐように。
「ありえん！」
魔が視えないどころか、何も見えないというこの現実。キョンシーだって、もう少し色々見えやすいだろう。
「しかもはがそうとしているのにはがれない！　どういうこと？」
「大さん、大さん。この符は呪われました」
「この短時間に？」
それは君の呪いと解釈してもよろしいだろうか？
本当にはがれないんだけど。何これ、怖い。
「うわっ！」
俺は目が見えないまま少し走ったが、後ろから軽い衝撃をうけて転んでしまった。
すぐに体を起こすが、背中に綺鬼がいない。どこかに転がっていってしまったのだろうか？
此方からは探せないので（何も見えない）俺は綺鬼を呼んだ。
「綺鬼ちゃーん！　どこだー！　大丈夫へぶしっ！」
が、突如横合いから顔面に衝撃が奔り、後方に大きく吹っ飛ばされてしまう。
数回転がり止った。
男子高校生を吹っ飛ばすとは、すごい威力だ。今の衝撃は恐らく

テケテケだろう。さすがに綺鬼ではないと信じている。いや、信じたい。
その衝撃が原因か、顔に貼られていた、いつのまにか呪われていた符がはがれた。
見ると完全に破れている。そして燃え出した。
燃えるのは仕様か、それとも呪いの影響か。始めて見る符の結末のため判断できない。
わかることは、もう使い物にならないという事だけだ。
視覚を確保することはできたが、その結果依然魔が視えないという致命的な状況は改善されていない。
枚数に限りがあるため、紛失を恐れ常に一枚ずつしか持ち歩いていないことが裏目に出てしまった。
その上、今の衝撃で脳が揺さぶられ世界が揺れている。だめだ、脚にもきている。もう走れそうにない。
絶体絶命だ。
なんとか体を起こし、綺鬼を探す……視えん。
いったいあの幼女は何だったのだろうか？　敵か味方かもわからない。
まぁ、敵七で味方三くらいの割合だが。
なかなか疑問は尽きないが、こうなっては本当に覚悟を決めなくてはならない。どうせもう走って逃げられないのだから、敵を倒すしか選択肢は残っていないのだ。
「いいぜ……覚悟をきめてやるよ！　テケテケッ！　俺が相手になるぶしっ！」
まさかのキメ台詞中の攻撃。
あらゆる悪役が空気を読んで攻撃してこないこの瞬間に、まさか攻撃されることとなるとは。さすがの俺も予測できなかった。
すごい衝撃に、またもや後方へ転がって行く。俺は転がりながら現実の厳しさに泣いた。
「がっ！」

壁にぶつかり回転が止まる。
顔が熱い。衝撃を受けたところの感覚が無い。体中が軋んでいる。
――それでも倒れているわけにはいかない。
何とか面を上げるが、ふらつく。視界がぼやけてしまい、平衡感覚も狂っていた。
立て、立ち上がれ。このままでは絶対に死ぬぞ。いいのかお前はそれで？　まだ死ねないだろう？　足掻ききっていないだろう？
自身を奮い立たせるが、意思に反して俺は立ち上がれない。
それどころか顔を上げていることもできなくなり、完全に倒れてしまった。
指一本動かせない。
「……くそが」
意識が飛ぶ寸前、俺のぼやけた視界に巫女服が映った気がした。

其の二

俺の名前は山田大輔。ごく普通の高校二年生だ。
これといって特徴の無い黒髪黒目中肉中背で、これといって秀でたもののない一般人だ。または脇役やモブキャラともいう。
金曜の夜、よくわからない事に巻き込まれた後の週明けの月曜日。
俺は普通の高校生らしく、屋上で友人と昼飯を食べていた。
現在俺が無事なことからも分かるとおり、あの後俺は専門家の方々に助けられた。
病院のベットで目覚めた俺は、事情説明もないまま黒服の方々に幾つかの詰問をされ、そして『この事は他言無用だよ（オブラート）』と言われ帰宅した。
質問タイムの場（優しい表現）に居た巫女服の女の子が、恐らく俺を助けてくれた子だろう。気絶する前、ちらりと見た気がする。
お礼を言いたかったが、彼女の隣に居た右手と両目に包帯を巻いた男が気になってしまい、言う機会を逃してしまった。
あの男……間違いなく邪気眼を持つ者だ。
なるべくお近づきになりたくないお人だったのでやむを得まい。機会があったらその時に言おう。ついでに、綺鬼の事も聞きたいものだ。
まぁ、できることなら二度と関わりたくないが。
さて、何時までも過去のことを考えていても仕方がない。俺にはどうしようもない事なのだから。
それよりも、今を生きている事を満喫すべきだ。
見ろ、このどこまでも続く夏の青い空に屋上というシチュエーション。
「どんより曇り空でござった」
「いきなりどうしたの大輔？」
「いや、台風来たら期末どうなんのかなって」

「延期だと思うよ」
生産性のない思考をやめて、空を見上げていた視線を下ろす。
視界に入ってきたのは、わざわざ俺の独り言に返してくれた友人の浅井武（あさいたける）だ。相変わらず爽やかなイケメンである。
この武というイケメン。何を隠そう、以前俺と共に異世界を救った勇者様なのだ。
ごめん、嘘ついた。俺は役に立っていません。踊っていただけです。足腰が鍛えられました。
武は未だに、時々あの世界に行っている。あの世界の魔術を習得した武は、自由に行き来できるのだ。
よく武には、一緒に行こう、と誘われるが俺は恥ずかしくて行けない。
あの世界での出来事は、俺の忘れたい記憶トップスリーに余裕でランクインしている。
武はチヤホヤされているのだろうけど、俺はきっと笑いのネタにされるだけだろうから行きたくないのだ。皆会いたがっていると武は言うが、絶対酒の肴が欲しいだけである。
さて、そんなイケメン勇者様の武だが、男の俺が見てもかっこいいと思ってしまうのだから、もちろん女の子にモテモテだ。
こいつの周りはしょっちゅう女の子だらけである。この世界でも、異世界だとしてもそれは変わらない。今、二人で昼飯を食べていられていることが奇跡に近いのだ。例えは悪いかもしれないがゴキブリホイホイのようなもの……本当に例えが悪い上、的を射てもいないな。
正直、嫉妬のあまり何度『爆発しろ！』と思ったかわからないほどである。
そんな武だが、意外なことに今まで誰とも付き合ったことが無いらしい。武は嘘をつかないので、事実だろう。
それは何故か。
明快なこと。武が恐ろしいほど鈍感だからだ。主人公のテンプレ

である。
いったい俺が、どれだけ迷惑してきたことか。こいつの鈍さは危険すぎる。
どれほどか、過去の例を挙げてみると「あ、あのぉ。浅井君って好きな子とかいますか？」「好きな人？　僕は大輔のことが好きだよ」「えっ？　なっ、大輔ってあれですか！　いつも浅井君の周りにいる金魚の糞みたいなヤツですか？」「今現在も俺こと大輔君はいるんだが……」「大輔とは長い付き合いなんだ」「えっ！　それってBえっきゃぁー！」「ちょっと待て！　絶対誤解してるよな？」「なんだったんだろう今の子？」なんて感じだ。
未だに誤解している方々がいるのが誠に遺憾である。誰だ、同人誌出したの。
そんなことを考えていたら、武がぐいっと顔を近づけてきた。
「それより、怪我の理由話してよ。教室じゃ話しにくいって言うから昼休みまで待ったんだよ」
意味が分からないほどに顔が近い。半端なく近い。こんな所を誰かに見られたら、また変な噂が増えてしまう。
「喧嘩？　それとも何か事件？　もう大丈夫なの？」
「……今から話すから少し離れろ」
このままでは、ファーストキスがまさかの武という恐ろしい事態になりそうな距離だったので、俺は武を無理やり離す。
武は素直にもとの位置に座ったが、依然心配そうな視線は俺の頬の傷へと向けられていた。
優しい奴だ。
だから俺は、こいつの親友でいられる。
この傷は、昨日テケテケにやられた傷。教室では話しにくい非日常の証。
話してはいけない。武を巻き込んではいけない。
何より、口止めしてきた黒服の兄ちゃんが怖いでござる。
だから――

「実はな……」
俺は神妙な顔をして、朝から必死ででっち上げた物語を語った。
「……昨日の夜、階段から落ちたんだ」
必死で考えた結果がこれだよ。
「階段から落ちた？」
「その通り。皮が引ん剥けたぜ」
そう言って頬のガーゼを触れる。触れると、まだ少し痛かった。
「ホントに？」
武が探るように此方を見てくる。
「本当と書いてマジだ。驚くほど身体中が痛い」
事実、未だに身体中が痛い。派手に転がりまくったせいだ。
今の俺なら、ボウリング球がどれほど過酷な運命を背負っていたのか理解できる気がする。
「……そうなんだ。それにしても気をつけないとだめだよ。階段から落ちて死んじゃうこともあるんだから」
「あぁ、これからは一段ごとにバナナの皮がないか、ちゃんと確認して降りることにする」
「……大輔はバナナの皮で転んだの？」
「教室じゃ話しづらいだろ？」
「確かにね」
そう言って武は苦笑した。
――辛い。
自分を心配して聞いてくれているのに、それに嘘で答えるのは辛い。
そんな相手に対してつく嘘は、そのまま自身の心を抉る。
相手を思ってのことだが、それでも俺は武に対して嘘をつきたくない。
だが、これは仕様の無いことだと割り切るしかないのだ。
この『事件』が、まだ終わっていない可能性もある。その場合、俺の才能が発揮されてしまうかもしれない。

友人を危険に巻き込むことを許容するなど、俺にはできない。
武は、俺の親友なのだから。
と、俺が自分の思考の恥ずかしさに気づき悶え始める寸前に、屋上の扉が開き一人の女子生徒が出てきた。
見ると、この学校の制服を着ているが、小さくて中学生にしか見えない、アホ毛が何とも可愛らしい少女だった。もちろん見た目もとんでもなく可愛い。いや、やばいほど可愛い。
俺はそのロリータの鑑とも言うべき少女のことをよく知っている。
彼女は二年生の松本萌（まつもともえ）。
その愛くるしい外見から、非公式ファンクラブ『ロリロリ萌ちゃん萌え萌え』という組織があるほどだ。ちなみに会長は俺だ。
だが悔やまれることに、萌は『浅井武ファンクラブ』の一人だった。
その事実を知ったとき、俺は涙が枯れるほど泣き叫び神を恨んだ。世界が滅びればいいとさえ思った。
「武さんいたー！」
武を見つけた萌は、此方に駆け寄ってきた。走り方が焦るほど可愛い。
そして、そのまま武にダイブした。
「武さーん！」
「わっ！」
飛び込んできた萌を、武は危なげなく抱きしめる。ふわって感じだ。
「危ないよ松本さん」
「えへへっ」
萌の行動を、苦笑しながら嗜める武。
武の注意も気にしなく、可愛らしく笑う萌。
萌の笑顔に鼻血が出そうになるのを堪える俺。
微笑ましい光景に変態が一人混じっているが、そんなことに気づかず武が萌に聞く。

「どうしたの松本さん？　僕に何か用事？」
「ううん。ご飯食べ終わったから、武さんに会いにきたのぉ」
舌足らずにそう答え、武の膝の上に座る。
俺はだんだん、その光景を眺める心情が『萌ちゃん可愛い』から『おのれ武』にシフトしてきた。親友？　なにそれ？　おいしいの？
だが『ロリロリ萌ちゃん萌え萌え』の鉄の掟その三『萌ちゃんの幸せは我々の幸せ』に従い、俺は血涙を流しながらその光景を眺めるだけに留まる。
俺が血涙を拭いもせず見ていると、萌が甘えるような視線で武を見た。
「武さん。萌と二人でいっぱいお話しよぉ」
「二人は無理だよ。僕は大輔とご飯を食べているんだから。大輔も僕とご飯食べたいはずだし。ねっ、大輔？」
「まぁな」
武といれば、もれなく萌もついてくる。
俺の返答を聞いて武がうれしそうに笑う。
「やっぱり僕と大輔は以心伝心だね」
知らんがな。
「むぅ」
萌が武の否定に頬を膨らませ、此方を睨んでくる。
まったく怖くない、むしろ可愛い。俺の鼻息が荒くなるだけだ。
そんな俺に、萌は武のときとは違う、まったく甘えのない声で言う。
「大輔さんどっか行って」
「そんな邪険にしないでよ。萌ちゃんは驚くほど俺のタイプなんだから」
「死ねよロリコン（残念でしたぁ。萌は武さんが大好きだもん）」
「萌ちゃん。本音と副音声が逆になってるよ」
腹黒さが武にばれるちゃうぞ。
それにしてもロリコンの何がいけないというのだろうか？　俺達

は何故こうも排斥されなくてはならないのだろう。
わからない。俺には理解できない。
だから俺はいつも『ロリロリ萌ちゃん萌え萌え』の会議で、同志にこの言葉を送っている。
『自分に正直に生きろ』
まぁ、自分に正直に生きると、俺達は確実に鉄格子の中だが気にしては負けだ。
その後は、三人で雑談して昼休みは終わった。
雑談といっても武は俺と萌と話し、俺は武と、萌は武としか話していない。萌は一言も俺と口を利いてくれなかった。
それでも、萌の素敵な笑顔を撮影（盗撮）できたので、俺の心は満たされていた。

其の二　2

昼休みの後、武は異世界へと行ってしまった。
どうせまたお姫様や魔導師が武に会いたいがために、何かと理由をつけて呼び出したのだろう。
俺も誘われたが、テスト前を理由に断った。
そろそろ、頭痛、腹痛、腰痛のローテーションがきつくなっていたので、断りやすい理由があって助かった。
それに、これらの言い訳は武を心配させるので何とも言えない気分になるのだ。
頭痛で頭が痛い、と断ったときは本気で心配されてしまった。武は優しすぎる。
そんな武のために、俺はもくもくと武の分もノートを取るのだった。
そして放課後、俺は一人で普段と違う道を歩いていた。
普段の帰り道と違う理由は、市の中央図書館に行くためである。
目的はテスト勉強。
自宅は俺を惑わす誘惑が多すぎるし、学校の図書館はテスト前とあって人が多すぎる。
そんな訳で図書館に向かって歩いていると、住宅街には似つかわしくない人物が目に入ってきた。
その人物は、住宅街にある何の変哲もない一軒家を眺めている。
服装は白い小袖に緋袴で、長い艶やかな黒髪を絵元結で束ねていた。わかりやすく言うと巫女さんだ。
俺と同い年くらいだろう。白雪のように白くきれいな肌に優しそうな瞳。そして巫女服の上からでもわかる自己主張の激しい一部。スタイル抜群の歴然とした美少女である。
そんな艶めかしい巫女さんは、とても見覚えがあった。
――おのれ、我が才能。

俺が軽く現実逃避をしながら突っ立て居ると、巫女さんも此方に気がついたようだ。
「あなたは、確かこの前の……山田大輔だったかしら？」
「……どうも、金曜日以来だな」
そう、この巫女さんは俺が運び込まれた病院に居た少女だった。
果たして『事件』が終わっていなかったのか、それとも偶然会えただけなのか。
こんな所で会うのはさすがに予想外すぎるが、今はあの時のお礼を言えるじゃんラッキー程度に考えておこう。
「あの時は礼もせずに悪かった。金曜の夜、助けてくれたのは君だろう？　あの時は助かった、有難う。そして、できることなら名前を教えてくれないか？」
「……」
「……」
「……」
無視ですか。そうですか。
こっちは誠心誠意頭まで下げたというのに。
もう名前とか巫女さんでいいや。
面を上げると、ものすごい怪訝な顔で俺を見る巫女さん。
そんなふうに見られる謂れ無いが、俺もそんな服で閑静な住宅街に居るあなたを、怪訝な顔で見ているのでおあいこですね。そんな目立つ服で居たら、最近話題の連続殺人鬼に狙われちゃいますよ？
そのまま、何ともいえない空気で見詰め合う二人。
不当な見詰め合いを、先に崩したのは巫女さんだった。
「結界は――ある。あなた、人払いの結界をどうやって抜けたの？」
「無知な俺にもわかるように専門用語抜きの三行でお願いします」
「……」
「……」
会った瞬間から沈黙が多すぎる。

女の子と歓談する機会などなかった俺には、どうすれば場を盛り上げることができるのかわからなかった。
何か話題はなかろうか？　と足りない脳細胞をフルスロットで回転させたところ、そういえば綺鬼の事を聞こうと思っていたんだ、と思い出すのに成功する。
俺の脳細胞も捨てたもんじゃない、と思いたかったがむしろ今まで忘れていた自分の脳細胞に絶望した。
「どうしたの？」
「いや、何でもない」
落ち込んでいたら、街中を巫女服で闊歩するような奴に不審者を見る目つきで見られたでござる。
死にたい。
「……まぁ、そんな事をどうでもいい。いや、よくないが今はどうでもいい。一つ聞きたいんだがいいか？」
「……」
無言は肯定と取らしていただく。
「あの夜、俺の近くに小さな女の子は居なかったか？　綺鬼ちゃんって名前の子なんだが、知っていたらその後どうしているか教えて欲しい」
「……」
俺の質問に、唇に手を当て考える巫女さん。その、眉を寄せ口をへの字にしている姿は、客観的にみれば可愛いと思う。
スタイルもいいし、普通の服装をすればモデルとしてやっていけそうだ。巫女服のままでも、秋葉ならやっていけるだろう。
主観で見れば凹凸派ではないのでナーコメントだが。
そんな事を考えていたら、巫女さんは何か納得のいったようなそぶりを見せ、
「そう、あなたは視える人だったのね」
「うん？」
「人払いの結界の欠点ね。味方と一般人を霊力の有無でしか区別

できない。そのために居るのに、倉橋家は何をしているのかしら？」
「……うん？」
よくわからないことを言い出した。勝手に納得しないで貰いたい。
俺にわかったのは、倉橋さんが怒られそうだな、ということだけだ。だから、俺にもわかるように言えと言っただろう。しかも、俺の質問を全力で無視するな。
何かもうどうでもよくなってきたので、お礼も言ったし図書館に向かうか、と考えていたところで巫女さんが懐から何かを取り出し、俺のほうに差し出してきた。
「はい」
「……」
この子は会話能力に致命的な欠陥があるのではなかろうか？　会話がドッチボールすぎる。
とりあえず差し出されたものを見てみる。
それは、厄落としに使う人型に模られた紙に似ていた。初詣などで購入するあれである。
そしてそれは、巫女さんの手のひらの上でかさかさと動いていた。
「……なんぞこれ？」
「あなたの言っていた子鬼よ。綺鬼だったかしら？」
俺の知っている綺鬼とは似ても似つかないのだが、俺の記憶違いだろうか？
だとしたら俺は、自主的に病院に行きたいと思う。黄色い救急車はどうすれば呼べますか？
「悪いが理解できない。俺の知っている綺鬼ちゃんは、決してこんな二次元の存在じゃなかったはずだ」
「当たり前じゃない、これは式神の式札だもの。仮契約の状態だから簡易札だけど」
「なるほど、わからん」
こいつと俺の常識に溝がありすぎて会話ができない。
「それにしても、この子鬼に随分好かれているみたいね」

「はー」
気の抜けた、返事ともいえないものを返す。
俺が会話を放棄したとしても、誰も責められまい。誰だって言語が違ったら、会話自体苦痛となるだろう？
もはや鼻をほじりだしそうな様子の俺を気にとめることもなく、巫女さんは続けた。
「あなたと会ってから、ずっと動き続けているわ」
「ひー」
「私の言うことなんか、聞くそぶりも見せないのに」
「ふー」
「あなたの言うことは聞きそうね」
「へー」
「あの夜も、体を張ってあなたの事をずっと守っていたみたいだし」
「ほー……えっ？」
何か聞き捨てならない言葉があった気がする。
「今なんて？」
「えっ、だからあの夜、この子鬼があなたの事を守っていたみたいだって……」
「マジで？」
「何で私が嘘をつくのよ。常識的に考えて、この事で私があなたを騙す理由が無いわ」
確かに。
だが何故だろう。こいつに常識を語られるとものすごくイライラする。
まるで全裸で歩いている変態に『ロリコンとかマジないわー。変態すぎる』と言われた気分だ。
まぁ巫女さんの常識云々については、今は置いておこう。
今気になるのは、果たして俺は綺鬼に守られていただろうか？
についてだ。

残念ながら、そんな事実は俺の記憶に無い。あの子はずっと俺におぶさっていただけだ。
自惚れもいいとこかもしれないが、途中まで綺鬼を守っていたのは俺だと思う。
なら、俺の気づかないところで、何か能力でも使っていたのだろうか？
もし綺鬼に何か能力があるのなら、俺の予想では『嫌がらせ』だ。味方に絶大な威力を誇る。
「綺鬼ちゃんには、何か特別な能力でもあったのか？」
「さぁ、私にはわからないわ。この子鬼、私とはまともに口を利かないし。でも、新生したばかりで戦い方も理解していないみたいだから、能力があったとしても使えていないでしょうね」
「そうだったのか」
新生とは、生まれたばかりという事だ。戦えないちゃんとした理由があったのである。
だったら、さすがに能力『嫌がらせ』は失礼だった。綺鬼の奇行は、子供の悪戯みたいなものだったのだろう。
そうだとしても、できることならＴＰＯは弁えて欲しかった。
「そんな状態でも、おそらくあなたを守りきったのだから、中々見上げたものね」
「どういうことだ？」
前後で話が繋がっていない。
生まれたばかりで戦えない綺鬼が、どうやって俺を守っていたというのか。
これだから、会話をする常識も無い奴は――
「あなたはずっと子鬼に守られてたいたのよ。いくら霊力があるといっても、あの濃さの澱みの中では耐えられないわ。異界にはなっていなかったけれど、境界には入っていたし」
うん？
「獣の本能、というやつかしらね？　あの夜会ったときの様子か

ら、濃すぎる澱みからは自分の身体を結界代わりにして守ってたみたいよ。それでも、視界から異界に飲まれなかったのが不思議だけど……何か心当たりはあるかしら？」

……視界？

「あぁ……符……か」

あの時の目隠し。確かにその前、俺は軽く眩暈のようなものを覚えていた。

「あるみたいね。なら、この子鬼に感謝することね。私も、一般人に犠牲者が出なかったことについては、この子鬼に感謝しているわ」

「……そうだな」

なんかもう土下座して謝りたい。いや、死にたい。

こいつの言った内容をすべて理解できたわけではないが、守られていたっぽいことはよくわかった。なにが『自惚れもいいとこかもしれないが、途中まで綺鬼を守っていたのは俺だと思う。』だよ。自惚れも甚だしいわ。

俺の心は、今にも罪悪感で押しつぶされそうだ。

今すぐに綺鬼に礼を言いたい。失礼なことを考えていたのを謝りたい。抱きしめて頬ずりし――これはダメだ。自重しろ俺の欲望。

「今、綺鬼ちゃんに会えるか？」

「無理、というより嫌。この子鬼、私の言うことを聞かないもの。式札の状態でも声は聞こえているはずだから、何か言いたいならそれで我慢なさい」

「あぁ、有難う」

そう言って、手渡された式札というものを受け取る。

俺が受け取ると、それは先ほどよりも大きく動き出した。不謹慎かもしれないが、だいぶ気味が悪い。

「綺鬼ちゃん聞こえる？　あの夜は本当に有難う。綺鬼ちゃんのおかげで俺は生きてるよ」

俺がそう言うと、より一層式札が大きく動いた。そして、より一

層気味が悪くなった。
これは、喜んでくれたと解釈してもいいのだろうか？
「喜んでいるみたいね」
「あっ」
巫女さんが俺の手から式札を取り、それを懐にしまってしまう。
喜んでくれているなら、もう少し何か言いたかったのだが、仕様が無い。
元々綺鬼にお礼を言えたのも、この巫女さんのおかげなのだから文句は無かった。
「さて、予想以上に話し込んでしまったわね。――うん、倉橋家も準備は終わっているみたいだし、私はそろそろ行くわ」
「そうか。なら、改めて例を言わせてくれ。綺鬼ちゃんのことも含めて、有難う」
「気にすることないわよ。あの夜は仕事、今日はたまたまなのだから」
巫女さんは軽く肩をすくめ、最初眺めていた一軒家の門をくぐろうとし、そこで一度振り向いてとても真剣な表情で俺を見た。
「一応警告しておくわ。わかっているとは思うけど、この家は今とても危険な状態なの。間違っても入ってきてはだめよ。私でも、他人を守る余裕はないわ」
「了解した」
今の言葉は俺でもさすがに理解できた。
しいて言う事があるとするなら、危険だということが言われなければまったくわかっていなかったことくらいだろうか。
そういえば先ほど、この巫女さんは俺に霊力があるみたいな事を言っていた気がする。なぜそのような勘違いが発生してしまったのだろうか？
面倒そうだが、どうやら仕事の時間が押しているようなので、訂正はまたの機会があったらにしておく。
「それでは、さようなら」

「じゃあな。気をつけてくれ」
「えぇ、有難う」
ほんの僅かな時間小さく手を振り合って、背を向けた巫女さんは門をくぐる。
巫女さんを背中を見て、ふと思ったことがそのまま口をついて出た。
「それと、綺鬼ちゃんのこともできたら守ってあげてくれ」
何と無しに言った言葉である。巫女さんの仕事を理解していない俺には、先の巫女さんが言った危険という言葉に対して思ったことなので、決して深い意味があったわけではない。
ただ俺は、危険なのかー、綺鬼ちゃん怪我しないといいなー、くらいにしか考えていなかった。
だから、こんな過剰な反応を返されるとはカケラも思っていなかったわけである。
「――わけがないでしょう」
「えっ？」
「守るわけがないでしょう！」
「……」
突然大声を上げて、此方を憎しみ篭った視線で睨んでくる巫女さん。
あまりの剣幕に俺はビビッて声すらでません。美人さんが怒ると怖いってのは聞いたことあるけど、美少女でも充分怖いね。
「私は魔を滅する者！　すべての魔を無に還す存在！　魔を守るなんて論外！　魔に守られるのも良しとはしない！　だから私は今まで式神なんかに頼らずずっと自身の腕だけを磨いてきたの！　この子鬼だって晴真が言ったから仕様が無く式しただけだもの！　いつか！　いつか絶対！　私はすべての魔を滅する！　あんな事したんだ！　式も許さない！」
巫女さんは髪を振り乱し、まるで自分に言い聞かせるように、また戒めるようにそう吐き捨てた。

言いたいことは言い切ったようだが、肩で息しつつもまだ視線は厳しいままだ。
俺はビビリすぎて首振り人形のように、ただただ頷いて肯定を示していた。
そうだね。魔は悪い奴だもんね。倒さないとダメだよね。でもその事を俺に言っても意味が無いよ。
情けないとか言わないでくれ。正直ちびりそうなほど怖いのだから。
そんな俺を見て、巫女さんは言いすぎたと感じたのか、表情を顰めすぐにまた背を向ける。
「……ごめんなさい」
そしてとても小さな、聞こえるか聞こえないかくらいの声で呟やき、ドアを開け家の中へと入っていった。

其の二　3（前書き）

中途半端で分かりにくい始まり方ですみません。

其の二　3

残されるは、それを複雑な表情で見送る俺と、静けさを取り戻した住宅街。

あの様子、何やら彼女のトラウマらしきところに触れてしまったようだ。

俺には知る由も無いが、主人公やヒロインのテンプレよろしく、過去に何かあったのだろう。綺鬼を否定していたことから、妖怪との間に何かあったのかもしれない。

仕事柄いろいろありそうだが、あれほど取り乱していたのだ。よほど辛く、悲しいことがあったと予想はできる。

そして、そのような心中穏やかではない精神的に不安定な状態で、危険な場所に行ってしまった。

彼女自身が言った、他人を守る余裕がないとされる場所に。

――綺鬼を連れて。

「まずったな……」

彼女が落ち着くまで引き止めるべきだった。それができぬのなら、せめて綺鬼の札だけでも預かりたかった。

あのような精神状態を見せられて、とてもじゃないが心配せずに待つことなど不可能だ。

俺では、彼女の苦悩など理解できない。ましてや、悩みを解消してやることなどできるはずがない。

それは、もっと彼女に近しい人間の役目だ。

それこそ、主人公ポジションにいるような奴の出番だろう。

だが、だからといって――

「あぁ、くそっ。ビビリの俺じゃ、覚悟を決めるだけでも時間が掛かる」

もう、引き返せない。このまま、何もせずにこの場を離れるなどできない。

知ってしまったのだ。
何も知らない振りして、見て見ぬ振り等、もうできるはずがない。
綺鬼も巫女さんも、俺の命の恩人なのだから。
いつかまた会うとき、今日この事が原因でどちらかが死んでいるなど耐えられない。
もう二度と二人に会えないなど悲しすぎる。
何もしないで後悔するなど、二度とごめんだ。
だったら、自分の無茶無謀を後悔しながら死んでいく方がまだいい。
「よしっ」
両頬を叩き、覚悟を決め歩を進める。
はっきり言って、俺では何の役にも立たない可能性が高い。というより十中八九、俺は役に立たないだろう。
俺には特別な力など何もないのだから。
引きこもり経験者を舐めてはいけない。テケテケのときがいい例だ。
現実で俺にできることなんて高が知れている。俺が強いのはネットゲームの中だけだ。
そのかわり、やるべきことはわかりやすい。
挑発。逃げる。盾。
戦う、というコマンドは無い。一般人を嘗めてもらっては困る。
だから俺は、やれることをやるだけだ。
門をすぎ、ドアの前に立つ。『高橋』という表札が目に入った。
ここから先は、一般人では何もできない異界かもしれない。何の能力もない脇役では、死ぬことになるかもしれない。
それでもでも――
「だからどうした」
そんなのは関係ない。
自分が死ぬかもしれないと言って、目の前の誰かを見捨てることなど俺には出来ない。

故に俺は、時として自分から事件に巻き込まれる。
ドアの前に立つ。
符を頬に貼り、同時に緊張を高める。
何が起こるかわからない。もしかしたらドアを開けた瞬間デッドエンドかもしれない。
彼女らがいる世界は、そういう世界なのだから。
呼吸を落ち着ける。高めた緊張を適度に静める。自分の胸に手を置き自身の心拍を感じ、落ち着くのを待ってからどんな状況にも対処できるように身構えた。
そしてドアノブに手を掛け、ゆっくりと引く。
引いたのだが――
「――あれ？」
ドアが開かない。
もう一度ドアノブを回し引いてみるが動かない。
苦肉の策として押してみたり、横にずらしてみたが結果は変わらなかった。
どんな状況にも対処できるように身構えたのに、いきなり対処できないとかかっこわるい。
つまりこれは、あれだ。
「あいつ鍵を閉めやがった！」
巫女さんはさっぱりした性格で少し大雑把かなぁと思っていいたが、中々に用心深いのかもしれない。
数瞬前まで心の中でかっこいい厨二を決めていただけに、出鼻をくじかれてとても恥ずかしい気分だ。
まったく、鍵とはやってくれる。此方の動きを阻害するには単純かつ、効率的な方法だ。
だが巫女さんよ、嘗めて貰っては困る。
俺だって、今まで何もせずただ『事件』に巻き込まれてきたわけではないのだ。
「つまり、このような事もあろうかと、というわけさ」

俺は不適に笑い、ウエストポーチから『大輔秘密道具その六』を取り出した。
それはフックのような形をした鉄製の細い金具。
それを鍵穴に差し込む。
がちゃがちゃとドアノブと格闘すること数分、歯車の噛み合う音が聞こえた。
ドアノブを回し引くと、ドアは難なく開く。
「ふっ、脇役とは得てしてこういった仕様もない技術を持っているものなのだ」
本当に仕様もない技術だった。
その上どう見ても、どの角度から見ても犯罪である。
俺は「元は開いてたんだ。だから大丈夫だ」と自分に言い聞かせて、急いでドアの中に身を滑り込ませた。
家の中はひんやりとしていて、夏にしては肌寒い。
ぴん、と張り詰めた空気が辺りを支配している。
おそらくリビングに続くであろう廊下と、二回へと続く階段。
そのどちらも闇に飲まれ、その向こうがどうなっているのかまったく見通せなかった。
家の中は寒いはずなのに、額に汗が噴出す。嫌な予感しかしない。
これは、この感じは学校の時と同じ。
――この家はおかしい。
闇と静寂に支配されているこの家は、もう人の住める場所ではないように感じられる。
玄関に視線を落とすと、巫女さんのと思われる草履があった。ご丁寧にも靴を脱いでお邪魔したらしい。
どんなときも礼儀を忘れない。なんとも巫女らしかった。
俺はそれを微笑ましく思いながら、土足で上がる。
悪いとは思っているが、これにはちゃんとした理由があるのだ。
突然の事態に遭遇したとき靴下ではすべって動けない可能性があるのと、戦闘になった場合靴のほうが蹴りの威力が上がるからだ。

まぁ俺なんかで戦闘になるとは思えないが、備え過ぎても損はないだろう。
携帯のカメラモードを起動し、ライトで先を照らす。それでも二メートル先くらいまでしか見えなかった。
とりあえず巫女さんと合流するために、おそらくリビングであると思われるに方へと歩を進める。何か調査するにしても、いきなり二階からってことはないだろう。
巫女さんと合流した後のことを考えてみる。
合流したら、まずは怒られそうだ。駄目と言われたのに、堂々と入ってきているのだから当然である。
きっと巫女さんは、俺のことを迷惑だと、邪魔だと思うだろう。
それでも俺は巫女さんの元へ向かう。綺鬼を迎えに行く。
二人のことが心配だから。
危険に遭遇し戦闘になったら、邪魔になるようなら逃よう。逃げられそうになかったら自分から死を選ぼう。
死ぬ覚悟はできている……と思う。
ここは是非とも『アイツのためならこの命などいらない』などとかっこよく決めたいところだが、正直なところわからない。俺は脇役の一般人でしかないのだから。
いくら人の死を人より多く見てきたからといっても、所詮は俺も守られる側だ。しかも社会の底辺経験者である根性なしだ。
でも、命を懸けるくらいの覚悟をしなければ、自分のせいで誰かが犠牲になってしまうかもしれない。
俺を守るために、誰かが死んでしまうかもしれないのだ。
そう。だから俺はもう二度と――
「さて、いいかげん現実を見るか」
いけない方向へと行きそうになった思考を、言葉にすることで現実に戻す。と、いうより戻さないとやばい。
「どういうことだ？」
玄関から今まで、あれだけ思考する時間があった。

なのに未だリビングは見えてこない。
どんだけこの家は廊下が長いんだよ、と。いつのまに俺はヴェルサイユ宮殿クラスの家に迷い込んだのだろうか。
視界は暗闇に閉ざされているためほとんどなく、そのためどれほど歩いたか確証はないが、それでも一般家庭における廊下の長さはとうに越えているだろう。
外から見たこの家は周りの家より少し大きかったが、だからといってこんなに廊下が長いわけがない。
何かが起きている。だが、俺ではその『ナニ』かがわからなかった。
まぁ、過去の経験から現実では到底考えられない超常的なことは、大抵魔法か魔術のせいと言っておけば間違いないのだが。
「どうしたものか？」
このまま進むか、それともいったん戻るか。
心情的には、もう怖すぎて家に帰りたい。角と羽と尻尾がトレードマークの小悪魔な俺が、巫女さんとか綺鬼とかどうでもいいと囁いている。
……。
天使まだ？
そんなことを考えながら、来た道はどうなっているか確かめようと振り向いた。
その瞬間。
ガタガタガタッ、と振り向いた先から恐ろしい音が響いた。

其の二　3（後書き）

そして連続で中途半端な終わり方ですみません。
うまく区切れるようになりたいです……。

其の二　4

「ひっ！」
恐怖から短い悲鳴を漏らす。股間も危なかった。
音が響く。何かわからないが『ナニ』かが暗闇の奥から此方に迫ってきていることだけはわかった。
――これはその『ナニ』かの足音。
「くそっ！」
恐怖に駆られすぐにもう一度振り向き、さらなる暗闇の奥へと逃げる。
これ以上奥へ進んではいけないと頭の中で警報が鳴り響いていたが、背後から迫る音にかき消された。
走る。ただ走る。
だがいくら走っても暗闇の奥には何も現れず、背後の足音は消えない。
テケテケのときとは違う。一人で希望の見えない、終わりのない恐怖に体力よりも先に精神がいかれてしまいそうだった。
いったい『ナニ』が俺を追ってきているのだろうか？　わからない。わかるのは俺の熱狂的なファンではないということだけだ。
わからないというのは怖さを助長する。
――振り向いて確かめたい。
それと同じくらい、確かめたら後悔する予感があった。
それでも俺はこのままでは精神が持たないと思い、背後を見た。見てしまった。
暗闇で先は見えない。だがそれは俺のすぐそばにいた。
「うっ、うわぁぁぁ！」
すぐ後ろに、すぐそばに、拉げて潰れて歪んだ醜い男の顔があった。キモい、主に顔がキモい。
男の飛び出た目玉が、神経でやっと繋がっている目玉が、此方を

見る。
その視線を受けて、心臓が狂ったように暴れた。
前を向き、もつれる足を無理やり動かし全力で逃げる。
暗闇の中、狂乱しそうな心を必死で保ち走る。
先ほどよりも足音が近くに聞こえる気がした。いつ恐怖で心が狂ってしまうかわからない。
すると前方に突然、茫、と扉が浮かび上がった。
俺はそれに飛びつき急いで扉を開け、中に入るなり扉を閉める。
足音が消えた。それ以前にドアが現れた瞬間に足音は消えていた気がした。
扉の中も変わらず暗闇。
とりあえず足音とキモい顔の恐怖から解放された俺は、扉を背に腰を下ろした。
ピチャっという音と共に、手にぬるりとした感触があった。それと鉄の錆びた臭いが鼻腔をつく。泣けるほど嫌な予感しかしない。
それらを意識した瞬間、暗闇が幕を引きその光景が視界に入ってきた。
そこは地獄だった。
あたりは血の海。俺が腰を下ろしている場所も例外ではない。
そして血の海には人間の部品が散らばっていた。
判別できるレベルでプラモデルのように分解された人間の身体。
これが地獄でなくて、何を地獄というか。
「あぁ……」
この光景はきつい。
今まで酷いものは色々見てきたが、それでもこの光景はダメだ。
思考が止まる。頭の中が真っ白になる。
何も考えられない。考えたくない。
俺が茫然自失で、ただ目の前の光景を眺めていると、散らばっていた人間の部品が動き出した。
目玉が浮かび此方を見てくる。手が昆虫じみた動きで迫る。腸が

蛇のように這いずりよってくる。
目が鼻が口が耳が首が胸が腕が手が足が脳が心臓が肺が腸が骨が。
俺を仲間に入れようとする。
――死ぬ。
このままでは死ぬ。
確実に俺は死ぬ。
「……駄目だ」
意識が覚醒する。
こんなところで死にたくないと、脳が体をたたき起こす。
何もせずに死ぬことだけは許さないと、精神が肉体を凌駕する。
「うおぉぉぉぉ！」
目の前に迫っていた目玉を殴り飛ばした。
足に絡まってきた腸を払い、いき良いよく立ち上がる。
手当たりしだい迫ってきた手を踏み潰し、扉を開こうとした。
が、そんな余裕はなかった。
払った腸が今度は手に絡みついてきて、強い力で引かれ扉から離された。
「このっ！」
払おうとするが、何重にも絡まっていてはずせない。
そうこうしている内に何本もの手が足を掴み、身動きができなくなってしまった。
「うわっ？」
そこに、色々なものがぶつかってきて倒されてしまう。血の海に倒れこみ、酷い血の臭いにむせ返った。
「くっ！」
仰向けに倒れた俺の周りを部品たちが押さえ込む。
それらはどこから持ってきたのか、刃物を持って俺を囲んだ。
すべての刃物に、赤い液体がべっとりとこびり付いている。刃が怪しく光っていた。
その刃物で俺を解体する気だろう。

「くそがぁぁぁ！」
俺は拘束を解こうと暴れるが、まったく解けない。そもそも拘束力が強く、ほとんど動けていない。
包丁が、鋸が、裁ちバサミが俺に迫る。
――考えろ。
この場を抜け出す方法を考えろ。考えなければ、待つのは死のみだ。
必死に思考を働かそうとするが、焦るばかりで何一つ考えられなかった。考えを纏めようととするが、纏めようと考えることすら儘ならない。
そして、裁ちバサミが首に添えられる。
汗が吹き出た。
目玉が此方を見ている。
俺の焦る顔を見ている。
裁ちバサミの刃が首に触れて痛みが奔り、首筋を血が伝うのを感じる。
俺の死を確信したのか、目玉の傍に浮いている口が笑った気がした。
だが、結局それを確かめることはできなかった。
裁ちバサミが俺の首に触れると同時に扉から強い光が迸り、扉を砕き飛んできた多数の紙が部品たちに当たってそれらを消滅させたからだ。
そして――
「大さん！」
綺鬼が怒りと焦りの混じった表情で駆け寄って来る。
「大さんから離れろ！」
怒声とともに、綺鬼の手が、着物の袖から先が、鋭利な刃物を思わせる鉤爪に変わった。
小さく愛らしい容姿に、醜く強大な鉤爪。双方がまったく釣り合っていない。

綺鬼は駆け寄ってきた勢いのまま、俺の周りにまだ残っていた部品たちをその鉤爪で切り裂いた。
一瞬にして俺の周りにいた部品たちが消滅する。
その鉤爪を見て俺は、綺鬼が人外の存在だとようやく認識することとなったのである。
だが、今はそんな事はどうでもいい。正直、今でなくてもどうでもいいが。
拘束を解かれた俺は、急いで起き上がり綺鬼に礼を言おうとした。
「綺鬼ちゃん！　助か――」
「大さん危ない！」
立ち上がった俺の頭を血の海に押し付ける綺鬼。その時、血を飲んでしまった。気持ち悪い。ついでに爪が少し刺さって痛いです。
「禁！」
同時に知らない声が聞こえ、俺は焦り声を上げる。
「ふぇふぇふぁん（綺鬼ちゃん）？」
またまた盛大に血を飲んでしまった。自分の体がとても心配だ。
顔を上げると俺庇うように座り込んでいた綺鬼と、その俺らの傍に以前出逢ってしまった邪気眼さんが巫女さんを肩に担いで立っていた。

其の二　5

「大丈夫そうだな」
「……えっ、あっ、あぁ大丈夫だ、です」
「うみゅっ」
邪気眼さんにいきなり話し掛けられてしまった。綺鬼抱きしめてしまったのはビビッったからであって、他意はない。
邪気眼さんは以前見たときに巻いていた右手の包帯を取っていた。その右手は、炎を思わせる赤々とした刺繍に覆われている。指に挟まれているのは先ほど部品たちを消滅させた紙、符の類だろう。
そして左肩に、荷物のように担がれている巫女さん。怪我をしているのか、それとも体調が悪いのかわからないが、顔色が良くない。
それでも俺を睨むように見ているのは、やはり勝手に入ってきてしまったことを怒っているからだろう。
俺は結局、足を引っ張ってしまった。
「聞きたいこともあるが、今は此処を出るぞ」
「……わかった」
邪気眼さんの言葉に頷き、立ち上がる。合わせて鉤爪から可愛らしい小さな手に戻った綺鬼がおぶさってきたが、先ほどの動きを見る限り綺鬼には自分で走ってもらいたかった。
そんな俺達をおそらく見ながら（目の包帯は取っていない）邪気眼さんは巫女さんに問う。
「晴美。大体この家のことわかったよな？」
「……大丈夫よ。後は必要な道具を揃えれば問題ないわ」
「まぁ、その程度は当たり前だがな。そこの二人、行くぞ」
そう言って走り出す邪気眼さん。邪気眼使いの筈なのに、何て頼りになる背中なんだ。
邪気眼さんが走り出したのに合わせ、俺も遅れずについて行く。
壊れた扉の先は普通の廊下で、玄関と外へのドアが見えた。心な

しか廊下が来たときよりも明るい。
これなら逃げ切れる、俺はそう思った。思ったが、すぐに違和感に気づく。
――いくら走ってもドアに近づいていない。
またヴェルサイユ宮殿状態である。いいかげん自重して欲しい。
確かに俺達はドアに向かって走っているが、一向に玄関には辿り着かない。
感覚はスポーツジムのランニングマシーンを使っている気分だ。この家ならスポーツジムに通う金銭を節約できるだろう。
そんなどうでもいいことを考えるくらい、俺には『ナニ』が起きているかわからなかったが邪気眼さん達は理解していたみたいだ。
「晴美！」
「……わかってるわよ、晴真。　――見つけたっ！」
邪気眼さんが立ち止まり、右手に符を持つ。
巫女さんも担がれた状態で両手に黒い針を取り出した。二人とも何か突破口を見つけたようだ。
ちなみに綺鬼は俺におぶさり、うとうとしている。この子の事が理解できそうに無い。
俺も立ち止まり、二人の様子を見た。
「破っ！」
「相剋金剋木急々如律令！」
二人は符と針を構え呪文を唱えると、それらをドアへ向かって投げた。ところで今のは何語だろうか？
何かすごそうな二人の符と針は真っ直ぐに飛んで行き、ドアの中心に突き刺さった。
それと同時に、
「ギァァァァァァァ！」
耳障りな叫び声が響く。
ドアが歪にうねり、一瞬男の顔を浮かび上がらせたかと思うと弾けた。

破片が飛び散り、まるで爆破された後のようにドアに大穴が開く。
砕けたドアの向こうに外の景色が見えた。それに伴い安心感がこみ上げてくる。
俺はそれを見て思わずガッツポーズをしてしまった。
「よっしゃぁ！」
「何やってんだ！　早く走れ！」
「あっ、すみません」
叱られた子供のようにしゅんとなって走り出す俺。いや、事実叱られた子供だった。
「行くぞ！」
「わかった！　て、うわっ！」
走り出そうとして突然転んでしまった。
なんぞや？　と焦りながら足元を見ると、足に床から生えた白い手が絡みついていた。
「怖っ！」
さらに床に着いた手にも絡みつかれてしまう。完全に身動きを封じられてしまった。
少し走り出していた邪気眼さんが急いで戻ろうとしてくれた瞬間、床から生えている白い手を大きな鉤爪が斬り裂く。
綺鬼だ。
「あ、ありがとう綺鬼ちゃん。」
「大さんは世話が焼けるなぁ」
「ははっ、何か綺鬼ちゃんには助けられてばかりだね」
情けない気持ちを仕舞いこみ、急いで邪気眼さんの元に駆け寄る。
やっぱり巫女さんの目線が怖かった。
そのまま邪気眼さんと共に、そろって廊下を走り抜ける。
玄関から外に飛び出し見事に着地を決める邪気眼さん。とても少女一人を抱えているとは思えない脅威の身体能力である。
そして玄関近くに転がっていた破片に足を取られ、見事に顔面から着地を決めた俺。幼女一人おぶっていたからといって、これはな

い。
綺鬼は俺の背に着地したので無事です。
俺達が家の外に出ると同時に、ドアは時間が巻き戻るように修復された。まるで最初から無傷であるかのように元に戻る。俺には理解できない光景であった。
だがよく考えるまでもなく、この家に入った瞬間から分からないことしかなかったので今さらである。
俺は考えても分からないことは、無理に考えないのだ。そうでもないと今までの人生で頭がパンクしている。
家の修繕費浮いていいなぁ、と呆然としながら見ていたら邪気眼さんの声が聞こえてきた。
「よかったな晴美、また偶然新たな被害が出なくて」
「……」
それは、当時者ではない俺でもわかる皮肉であった。
邪気眼さんの表情は包帯のせいでよくわからないが、巫女さんは悔しそうに、また悲しそうに表情を歪めている。
邪気眼さんは巫女さんを地面に降ろし、右手に包帯を巻きながら少し声色に優しさを込め続けた。
「いいか晴美。確かにお前は実力があるほうだ。独学でよくそこまで鍛えたと褒めてもいい。今まで式神に頼ることなく戦い続けてきたことも、素直に感心できる」
「……」
――だがな。
そう一区切りつけて、優しさを完全に消し、
「今回も、そして今までも、ただ運が良かっただけだ。いいか？
これからも同じように行くと思うなよ。『土御門』は式神使いだ。そしてお前は『月ノ宮』でも『光明衆』でもなく『土御門』だ。俺の言っていることが理解できないなら、何れお前を多くを救えずに、守るべき存在を巻き込んで朽ちるだろう。そうなるくらいなら、死ね。死ねないならこの『世界』から消えろ。もう一度言う。お前は

『土御門』で、其処の当主候補だ。それを忘れるな」
邪気眼さんが何を言っているのかまったく理解できなかったが、ただ巫女さんに何か大切なことを伝えようとしていることだけはわかった気がした。
俯いて震えている巫女さんを一瞥し、包帯を巻き終わった邪気眼さんが俺の方へと歩み寄ってくる。
俺の前で立ち止まると、訝しそうな表情をして此方を見てきたと思う。目が隠されていると予想以上に相手の心情が読みづらいと初めて知った。
「あんたは確か、この前も居たよな。今回も偶然巻き込まれた感じか？」
「……えぇと、巻き込まれたというか何というか……巫女さんと綺鬼ちゃんが心配で首を突っ込んだというか……とりあえずすみません」
敬語になってしまった。俺は自分より強そうな相手なら、どこまででも下手に出れる。
俺の言を聞いて、邪気眼さんは盛大にため息をついた。
「ようは単なるお人よしか。自業自得だが、また事情聴取もどきを受けてもらうぞ？　ついでに首を突っ込んだことをこってり絞られ後悔しろ。すぐに後始末の連中が来るから其処で待ってな」
「……はい、わかりました」
今一度、黒服兄ちゃんとのお話フラグが成立しました。本当に自業自得だからこそ泣きたい。怒られるの怖い。
「――来たか。倉橋め、何考えてやがんだか。早急に親父と一度話し合わねぇとな」
邪気眼さんがそう呟くと、何か法衣っぽい衣服を着た人達が四人、門の前に現れた。
巫女さんと邪気眼さんといい、この人らも含めてよくそんな格好で街中を歩けるものである。秋葉原でも目立つぞ。
「後の事はこいつらに従ってくれ。俺達はやる事があるんでな、

悪いが先に帰らせてもらう。帰るぞ子鬼」
「やー」
「……封」
「やーー」
背中で空気の抜けるような軽い音がしたと思うと、肩越しにひらひらと綺鬼の札が飛んで行き、邪気眼さんの手のひらに納まった。
それを無造作にポケットに入れた邪気眼さんは、今一度巫女さんの担ぎ、法衣の方々と僅かばかり話して、何処かへと行ってしまった。
彼らが帰っていった方角を見ながら、数瞬物思いにふける。
何やら重い事情があるようだが、俺にはどうすることもできない。そもそも彼らのことを俺は知らなすぎるのだから。名前すら知らないのだから。
綺鬼だってそうだ。一番近いようであるけど、実際は何も知らない。
何故俺を守ってくれたのかすら知らないのだ。
つまり、これ以上俺にできることはない。いや、初めからなかった。
今回も、俺は足を引っ張っただけである。
「少年よ。宜しいですかな？」
法衣を着たひょろいおっさんに声を掛けられ、思考というなの現実逃避を中断させられた。
さて、どうやら俺の得意技である現実逃避程度では逃げられないようだ。逃げられたことなどないけど。
それにしても、テスト勉強どうしようか。この前も事情聴取という名の拉致で一日潰れているのである。
空を仰ぎ見る。
まるで俺の心情を表しているかのごとく、今にも雨が降りそうな空模様だった。
期末テストやばいでござる。

幕間

「子鬼、仮初の契約だ。お前がこいつの傍に居る限り、戦う術を教えてやる」

蝋燭という小さな光源のみに照らされた畳張りの小さな部屋に、二人の男が向かい合って座っていた。

一人は三十代と思われる男性。黒の短髪に精悍な顔立ちをしている。

何か問題でも抱えているのか、座布団に正座で座り腕を組んで難しい顔をしていた。

もう一人は十代半ばほどの少年。男性と同じく黒の短髪で、目と右手に包帯を巻いている。

此方も座布団に座っているが、胡坐をかいており表情も包帯が巻かれているため窺えない。

重い空気に、じりじりと蝋燭の火に炙られるような沈黙の中、静かな部屋に少年が茶を啜る音だけが響く。

その静寂を破ったのは男性だった。

「ふむ、やはり何も心当たりは無いな。なぜ『倉橋』が今回の騒動に関係する？　この町を異界に堕としたところで『倉橋』に利があるようには思えない。晴真、お前の勘違いではないか？」

それに対し、少年――土御門晴真（つちみかどせいま）は肩をすくめ答える。

「だから言っただろう、何となくだって。勘違いなら勘違いでいいじゃねーか。だが勘違いじゃなかった場合、冗談じゃすまねぇ。親父はわかってんだろう？　『土御門』にとって『倉橋』は重要な存在だ」

晴真の答えに男性――土御門晴夜（つちみかどせいや）はさらに表情を硬くした。そんなことはわかっている、と憮然と返す。

「重要な存在だからこそ、疑えないのだ。我々『土御門』が戦闘

特化なら、彼ら『倉橋』は情報特化。『倉橋』を探るのに『土御門』の力を使ったところで気づかれるのは言うまでもない。確証もなしに動けないことはお前もわかっているだろう？　何も無かった場合、わざわざお互いの関係に不和を生じさせるだけだ。本家と分家で争ってどうする」

「んなことは俺だって考えてるさ。そんでもって考えた上で言ってんだよ。『土御門』が動けないことくらいわかってる。だから……俺が動く」

「お前が……か？」

晴夜が驚きに眉を上げ、晴真を見る。

それに対し晴真は、包帯の上からでも分かる皮肉めいた薄ら笑いを浮かべた。

「俺だから……だ。『土御門』と『倉橋』の両家から疎まれている俺だからこそ、堂々と怪しい行動ができる。どうせ誰も初めから俺の事なんか信用していないんだからな。今更相手の顔色なんか気にする必要ないだろう？　考えようによってはこれほど動きやすい条件はねぇ」

どこか自嘲も含まれている声色。今の境遇を理解し、受け入れている証。

それが理会出来てしまい、またそんな表情を息子にさせてしまう自分と周りが許せない故に、晴夜の表情がさらに険しくなる。

「すまない晴真。父上が死に当主となって、やっとお前を呼び戻すことができたというのに……強引に周囲の意見を押さえつけたせいで、より一層軋轢を大きくしてしまった」

頭を垂れる父親に少年は今一度肩をすくめる。

「気にするなとは言わなねーが、親父は気にしすぎだ。俺自身『土御門』に戻ることを了承したんだからムカつくけど文句はねーよ。それに奴らの反応は当たり前で間違っちゃいない。かつて勘当喰らった人間が、他家の力を有して自分らの敷地に戻ってきたんだからな。普通の奴なら、何か企んでんじゃないかって疑うわ」

「……すまない。結局私は何一つ、お前のためになることをしてやれた例が無い」
「はぁ……」
頭を下げ続ける晴夜を見て、晴真は大きなため息を吐く。
そして、このままでは話が進まないと思ったのか、強引に大きく話題を変えた。
「関係ないが――晴美（はるみ）がまた、少しだが式神に興味を持ち出したようだぞ」
「……うむ。私も聞いている」
晴夜も晴真の意図を汲んでか、顔を上げ頷いてみせる。
そして苦笑を浮かべ続けた。
「お前が子鬼を無理矢理持たせたおかげだ。お前以外では誰が言ってたとしても、式札に触ろうとすらしなかったというのに」
「罪悪感に付け込みまくってるから、あんま気分のいいもんではないがな。それに晴美が危ないとき、子鬼が助けたのがきっかけで、その後俺がボロクソに追い討ちを掛けたのが決めてだ。まぁ、あいつが単純だってのも大きな理由だろうがな」
「それも晴美の事を思ってこそだろう？　誰も責めはしまい」
「はっ、俺は別に気にしてねーっつーの。つーか、晴美も親父と同じで気にしすぎなんだよ。確かに俺はあいつが原因で両目と右手を失ったが、今はこうして何とかなってんだから、昔の事なんかどうでもいいじゃねーか。『土御門』にだって戻ってきたんだしよ」
「そうもいくまいて。自分のせいで、と今までずっと悔やみ続けていたのだ。そう簡単に割り切れるわけもあるまい」
まるで自身の事のように語る晴夜に、もう一度大きなため息を吐く晴真。
「はぁ、アホらし。もうどうでもいいや」
「ふむ……そういえば、件の子鬼が随分と気にしている人間が居ると聞いたのだが、今回の件と関係ないのか？　『倉橋』は今回の件とは無関係と結論していたがお前はどう考えている？」

「あぁ」晴真は思い出すように指を顎に当て、「ありゃぁ、マジで巻き込まれただけの一般人だと思うぜ。確かに『視鬼(しき)の符』を持ってたが、あれは今回のように巻き込まれた事が過去にもあったからしいしよ。しかも符を貰った相手の事を詳しくしらなかったし。持ってた符を奪ったから、もうほっといても問題ないだろ」

「子鬼に好かれる理由はなんだ？」

「あれは水子が親に付きまとうのと同じ理由だろ。子だって親を守ろうとする」

「ふむ、『倉橋』と同じ意見だな。それなのに『倉橋』を疑うというのも微妙なものだ」

「しつけーぞ親父。もう一度言うが、『倉橋』は俺が調べる。親父はいざって時のために、そのことを頭の片隅にでも入れとけ」

そう言って立ち上がる晴真。どうやら話は終わったようだ。

包帯が巻かれているにも係わらず、危なげない足取りで歩きふすまに手を掛ける。

「晴美の様子見に行くわ。どうせ無視されまくってる子鬼に構ってんだろうけど」

「すまんな、お前にばかり迷惑をかけて」

再び申し訳なさそうに言った晴夜に、ふすまに手を掛けたところで晴真は振り返った。

「それこそ気にすんな。兄は妹を守るもんだろうが」

そして部屋を出る寸前に「まぁ妹分だけど」と呟いた。

幕間（後書き）

会話練習のような、三人称練習のよう感じです。

No title 1

俺の名前は山田大輔。黒髪黒目中肉中背の高校二年生だ。俺自身は名前も見た目も特徴がないのが特徴だと思っている。

そんな俺は今、高校にいる。二年四組、自分の教室だ。

窓際の一番後ろというお昼寝には絶好のポジションである我が席から外を見ると、大粒の雨と強風が窓を壊そうとするかのように暴れまわっている。

あっ、窓の割れる音がした。どこの教室だろうか？

気にしたところで、ここからではわかるわけものく、俺は教室の中に視線を向けた。

視界に映るは俺のクラスメイト達。こんな台風の日にわざわざ高校に来た頭の沸いている奴が二人いた。

一人は俺の隣の席にいる男子学生。浅井武という名の完璧超人だ。雨で濡れた学ランを脱いでワイシャツ姿なっている。雨も滴るいい男とはこいつのために作られた言葉なのだろう。

もう一人は廊下側の一番後ろの席に座っている女子学生。名前はたしか工藤彩音（くどうあやね）だったはずだ。

昨日いきなり転校してきた謎の転校生で、濡れた制服がエロくさらにポニーテールが似合いすぎていてとても可愛らしい。

大型台風で今もサーカーゴールがグラウンドを横断していると言うのに、そんな中高校に来るとか二人とも変態すぎる。

そしてそんな二人をニヤニヤしながら見ている俺は、来る途中に何度も転んだせいで制服上下が泥だらけになったため、今はワイシャツにパンツ一枚という紳士過ぎる姿。

どう見ても俺が一番の変態です。本当にありがとうございました。

さて、なぜこんな姿で俺は台風の日に学校に来たのか。反省するため朝から今に至るまでをを振り返ってみることにした。

俺は今日もいつも通りの時間に起床した。そして妹の「おはよう

兄さん。今日は台風で休校だと思うよ」という言葉を聞き朝からテンションが上がった。
急いで携帯を見てみると、ちょうどフォレストリバー君（あだ名）こと森川君から着信がきたところだった。
電話に出ると「山田か？」「あぁ」「台風で休校だと。テストは延期だ」「わかった」「おう、それだけ。じゃあな」「また」ですぐに会話終了。俺としてはテンションアゲアゲだったので色々と話したかったが、フォレストリバー君はそうでもなかったようだ。
別にそのことで気分を害したりはしない。あまり話したこともなかったので納得できる。
というより話したのは連絡網が配られた日に携帯番号を交換したときだけだ。
ちなみにフォレストリバー君と呼んでいるのは俺だけで、それも心の中だけである。
そんな朝のひと時を経て、俺はテンションに任し高校へ行くことにした。
妹に見つからないようにコッソリと玄関に向かう。気分は潜入のプロフェッショナル蛇さん。テンションが上がる。誰だって雷や雪で何か訳もなく楽しくなったことがあるだろう？　朝の俺はまさにそれだった。
外に出ると雨風が想像以上にやばかった。
目の前を隣に住んでいる斉藤さん（七十三歳♂）の命より大切らしい盆栽の松子（五葉松）が飛んで行く。明日が斉藤さんの命日でないことを祈った。
一応傘を差してみるが、二秒で手から離れていった。
少しは耐久力が上がるかと思って新品を持ってきたのだが、まさかの瞬殺である。存在意義を全うできないまま死なせてしまうとは、あの傘には悪いことをしてしまった。
このままでは終われない。戦友の早すぎる死に俺は傘の分まで頑張ろうと心に決め、もうテンションが大変なことになった。

そこからはもう無茶苦茶だ。
目も開けられないほど雨風が強いのに、意味もなく「うおぉぉぉぉ！」とか雄たけびを上げながら走った。
まともに歩くのも難しいのだ。もちろんすぐに転んだ。だが「それでも……負けるわけにはいかないんだー！」とか叫びながら猶も走ろうとした。
その結果。
走ろうとするけどその都度転ぶを繰り返したため、学校に着く頃には制服は泥だらけになっていた。
昇降口でやっと雨風を凌げ、誰もいないのをいいことにその場で制服を脱いだ。
正直泥だらけで耐え難いほど気持ち悪かったのだ。
そして、どうせ学校には誰もいないだろうと考え、俺がその格好で教室に行くと二人がすでにいたわけである。
ワイシャツにパンツ一丁という変態が誕生した瞬間だ。
これが朝から今に至るまでの出来事である。
うん、反省はしているけど後悔はしていない。
俺は傘の分まで戦い抜いたのだから、これで傘も迷わず成仏できるだろう。
朝からの数時間で自分が救いようがない馬鹿だということを再認識した俺は、過去を思い出すために虚空を見ていた視線をもう一度武に移す。
武は「うーん。何か嫌な予感がしたんだけど、勘違いかな」何か考え事をしているようだ。頬杖をつきながらぼうっとしている。これだけで絵になるのだからイケメンは卑怯だ。
次に工藤を見る。
工藤は「うわぁ絞ったら上靴が濡れた。さすがはぼく、適当だよ」自分の世界に入っているようだ。スカートの裾を絞りながらぶつぶつ言っている。
どうやら二人とも自分の世界で時間を潰せるみたいだが、テンシ

ョンが上がってしまっている俺は誰かと遊びたかった。そして都合のいいことに、ちょうどトランプもある。ご都合主義万歳。
なので二人に声をかけた。転校生と友好を深めるにはちょうどいい機会だろう。
「なぁ武、工藤。何かやんねー？」
俺の声を聞き二人が此方を向く。
二人を一緒に視界におさめられるように俺は横を向いた。
「今さ、台風やばくて帰れねーだろ。何かして時間潰そーぜ。そこで俺の提案はトランプ」
そう言って数枚のトランプを顔の前まで上げ、左右にバッと広げてみせる俺。さながらマジシャンのようだ。服装はワイシャツにパンツ一丁だが。
トランプを見て、武が笑う。
「そうだね。今はとても帰れそうにないし時間潰しにはちょうどいいかな」
武はやる気満々のようだ。元々武が俺の誘いを断るとは思っていなかったが。
工藤は此方を見るだけど何の返事も返してはくれない。
俺はもう一度工藤を誘う。
「工藤もトランプやろうぜ」
「ぼくは……遠慮するよ」
返事は返してくれたが否定だった。さらに工藤は俺から視線をそらすように俯いてしまう。
それにしてもぼくっ子か。ポニーテールといいこの子は自分の魅力をよく理解している。
工藤の素晴らしさはわかったが、なぜトランプに加わってくれないかがわからなかった。
考えられる原因としては、やはり転校生の立場としては気まずいのだろうか？　それか此方が男二人なので警戒しているのかもしれない。片方は未だにワイパン（略称）だし。

武を伴い教室の中心辺りの席に移動する。席を四つ向かい合うようにくっ付けてトランプ場を作り上げた。その内の一つの席に座り笑顔で工藤を見る。
「ほら、工藤。席作ったから」
「だから……ぼくは……」
まだ渋るか。
なかなか強情である。此方がこれだけ友好的に接しているというのに。
そんなにクラスメイトを信用できないのだろうか？
確かに昨日あったばかりだが、これから仲良くやっていくには最初が肝心だと俺は思う。別に襲ったりしない。俺の守備範囲は十三歳までなのだから。
なんてことをのたまう俺は、しつこい様だがワイパンである。信用しろと言うほうが無理かもしれない。
俺がどうするか考えていると、そんな俺を見かねたのか武が工藤に声をかけた。
「工藤さんも一緒にやろう」
「……えっと」
明らかに動揺する工藤。俺のときと違い頬を赤く染め戸惑っている。
何この差。イケメンは絶滅すべきだと思う。
「工藤さん、こっちに来て座って。昨日会ったばかりだから仲良くなるきっかけにもなるしね」
「う、うん」
そんなにすぐにオーケーを出すなら俺の時点で了承してもらいたい。そう思うのは俺の我が侭だろうか？
工藤の返事を聞いて俺の隣に座ろうとする武。俺はそれを押しやる。
武は不満そうな顔をしながらも素直に俺の前の席に座った。
空気読め、俺の隣は工藤の席だ。

制服が濡れている今、この距離なら透けて下着が見えるかもしれないのだから。
武の言葉を受け工藤が立ち上がった。
それを見て俺はショットガンシャッフルを決めながら足で横の椅子を引く。
「工藤。座りな」
「……」
俺を無視して迷わず武の横に座る工藤。
一瞬汚らわしい物を見るような目で俺を見た気がする。気のせいだと信じたい。
それにしてもがっかりである。結局女は男の顔しか見てないのだ。少しは内面も気にしてほしい。
そんなことを考えている俺は雨で透けた下着を見ようとしたワイパン紳士である。外も内も腐っているのは言うまでもない。
「……ババ抜きでもやるか」
「僕はいいよ。工藤さんもいい？」
「うん、いいよ」
俺はうまく武にババがいくようにトランプを配り始めた。

No title 1（後書き）

今回はうまく区切れました。
よかったです。

No title 2

ババ抜きを数回やったところで俺は気になっていたことを聞いた。
「工藤は何で今日学校に来たんだ？　ちなみに俺は無駄にテンションが上がってしまったからだが」
「そういえばそうだね。工藤さんはどうして来たの？　僕は何となく大輔がいる気がしたから来たんだ」
此方を見て「これって以心伝心かな」と笑う武。知らんがな。
そんな武を見て工藤が笑いながら言った。
「ぼくは適当だよ。まだ連絡網を貰ってなかったから連絡がなかったんだ。だから来てみたの」
「あのクソじじい」
「それは酷いね」
それを聞いて俺も武も顔を顰める。
担任の長谷川（五十九歳♂）に殺意を覚えた。
あのもうろく爺、転校生にこの仕打ちは可哀想過ぎる。俺だったら初っ端から学校生活に絶望するだろう。
「いいよ。浅井くんがいたし、今トランプ楽しいからむしろ来てよかったよ」
そう言って武に微笑みかける工藤。
とても魅力的な笑顔だが、そんな笑顔を浮かべることのできる少女が自然に俺をスルーしているという現実に恐怖を禁じえない。工藤から『変態どっかいってよ』オーラが出ている気がする。
なぜ俺がこんな扱いを受けなければいけないのだろうか？　ワイパンがそんなにも気に食わないのだろうか？
とりあえずこのまま三人でいるのは、俺の存在意義的にきつかった。
この状態から脱出するためには人数を増やすしかない。
工藤は答えてくれなさそうだから武に聞いてみた。

「なぁ、ずっと三人ってのもあれだし他に誰かいないか探さないか？」
「他にって、別のクラスの子？」
「あぁ、もしかしたら俺達以外にも誰かいるかもしれないだろ」
「うーん、そうだね。大輔がそう言うなら探しに行ってみようか。工藤さんもいいよね？」
「うん、ぼくはいいよ」
その返事を聞き俺は立ち上がる。
「よし、それじゃぁ俺は二階と三階を探してくる。こんなに暗い中女の子を一人にするわけにはいかないから、武と工藤で一階を探してくれ」
「わかったよ」
頷き立ち上がる武。それにつられ工藤も立ち上がる。
二人を見て俺は一度やってみたかったことを試す。
「ではまたここで会おう、散！！」
掛け声と共に駆け出し教室を出る俺。後ろを向くと二人は歩きながら教室を出るところだった。
俺は走りながら泣いた。
――十分後。
自分たちのクラスに集合した俺達三人の他に、新たな人物が二人増えていた。
一人は俺が連れてきた男で、もう一人は武達が連れてきた小柄なおさげの女の子である。
新キャラの女の子もびしょ濡れで、大きな熊のぬいぐるみを抱えていた。
女の子を見たとき少し違和感を覚えたが、俺の隣にいる奴の違和感が大きすぎてすぐに気にならなくなった。
とりあえず自己紹介だろう、と思い俺は新キャラの女の子に声をかける。
「俺は二年の山田大輔、よらしくな。君の名前は？」

「えっ……その、あの」
「うん？」
「うっ……」
解せぬ。
女の子は要領を得ない返事ばかりで一向に名乗ってくれない。
またワイパンか？　ワイパンがそんなにも気に入らないか？　ここまでくると俺も意地でもワイパンを貫き通したくなってきた。
そんなことを考えていると、女の子も武達も俺ではなく俺が連れてきた男を見ていることに気がついた。
どうやら、この男が気になっているようだ。
ならこちらから自己紹介をするべきであろう。
俺は横に立っていたそいつを少し、前に出るように押し紹介した。
「こいつは中村健二（なかむらけんじ）だ。会ったばかりでまだよくわからないが、なかなかにシャイな奴みたいでな。あまり喋らないがトランプはやりたいらしい」
「こふー……こふー……中……村……です……こふー」
俺がそう紹介すると軽く頭を下げる中村。
シャイだが礼儀正しい奴である。こういう奴は好感が持てるものだ。
こちらは二人とも自己紹介が終わったが、女の子二人は未だに驚いたような怯えているような表情をしていた。武に至ってはいつでも動けるように臨戦態勢をとっている。
どうやら中村に対して警戒しているようだが、何故だろうか？
中村を見る。
身長は百七十センチ以上ある武よりも高く、百八十以上ありそうだ。
体は筋肉質でがっしりしている。
表情はホッケーマスクに隠れていてわからない。
持ち物はチェーンソーだけで他にはなさそうだ。
何か中村におかしいところがあるだろうか……うん、ありますね。

いいかげん現実を見よう。
こいつはどう見てもやばい。中村ってなんだよ？
正直なんで連れて来たか自分でも理解できなかった。きっとこれも台風による謎のテンションの力だろう。
でも連れて来てしまったもんは仕方がない。現実を受け入れよう。
どうやら武達もツッコむ余裕はなさそうだし、このまま何とかやり過ごすことにする。
それにいざとなったら武が何とかしてくれるだろう。勇者様はとても頼りになるのだ。
女の子の自己紹介もすませてさっさとトランプを始めることにする。
女の子は答えてくれそうにないから武に聞いた。
「でっ武、そっちの子の名前は？」
「えっ、あぁ一年の高橋恵（たかはしめぐみ）さんだよ」
武は俺の質問に絶対に答えてくれる本当にいい奴だ。
「そうか、高橋よろしくな。ジェイ……中村、こいつは浅井武で横のが工藤彩音だ」
「こふー……こふー……よろ……死……く」
工藤がすごい眼力で俺を見てくるが、無視して椅子に座りトランプを配り始める。
そんな俺を見て武は苦笑しながら俺の向かいに座った。さすが武。場数を踏んでいるだけあってこの程度では焦りもしないようだ。
武が座ったのを見て工藤も渋々といった感じに武の横に座る。
続いて高橋も武の横に近くの椅子を持ってきて座った。
なんかこの二人も結構落ち着いているように感じる。
普通は悲鳴上げて逃げそうなものだが、確か人間は男よりも女の方が実は胆力があると聞いたことがある。だが、それはこういった場面でも発揮されるものなのだろうか？
そんなことを考えていると、俺の横の椅子が引かれ中村が座った。
武は誰もが羨む両手に花状態なのに対し、こちらは誰もが忌避す

る片手に殺人鬼状態である。
世の中不公平にもほどがある。
トランプを配り終え、ババ抜きが開始された。
俺が中村の手札から一枚取る。絵柄は合わずに手札が増えただけだった。
続いて中村が俺の手札から一枚取る。それを手札と見比べてそのまま手札に入れた。
どうやら中村は合わなかったようだ。
それを見て俺は中村の手札に手を伸ばす。どれを取るか迷っている振りをして相手の表情からババがあるか探りを入れる。だが、中村の表情からは何も伺えない。ホッケーマスクずるい。
適当に一枚取るが、また合わなかった。
中村が俺の手札から一枚とっていく。手札と見比べ、合わさったようで二枚捨てた。
くそっ、やるな中村。だがまだ勝負は始まったばかりだ。
そこで横から楽しそうな声が聞こえた。
「あっ、また合ったよ！」
「羨ましいです。私はまだ一枚もあってません」
工藤と高橋が武を囲んで楽しそうに笑っている。
……あるぇ、何で二対三わかれてるの？　ババ抜きってこういうゲームだったっけ？
さすがに有り得ないだろう。
そもそもワンセットのトランプを二組にわけてババ抜きしているのが斬新過ぎる。下手したら一生終わらないゲームになっちゃうよこれ。
何かものすごく自然に、中村が俺の手札から取っていくので気づくのに遅れたが、そっちも無視してほうって置かないで欲しい。おかげで俺は、中村と向き合い続けないといけなくなってしまったではないか。
お前らは先ほどから笑顔だけど、中村はクスリともしていない。

中村はババ抜き始まってから「こふー」しか言ってないのだ。
あれ？　でもこれ「わふー」みたいな口癖だと思えば可愛いかも？
こんな感じでかなりツッコミどころがあるが、始まりからしてツッコミどころしかなかったのと武が此方を油断無く見てくれているのでこのまま続けることにした。
しばらくババ抜きをやっていると（やっぱり誰もあがれない）中村がトイレに行き休憩となる。
武達も休憩するようで、高橋が教室から出て行った。中村と暗闇の中で遭遇したりしても大丈夫だろうか？　見た目的な意味で。
まぁ武が何も言わないし、中村もチェーンソーを置いていったから大丈夫だろう。
それに中村はいい奴だった。
俺の手札と合いそうなやつをさり気無く自分の手札の中でアピールしてくる気配り上手な奴である。
人を見た目だけで判断してはいけないといういい例だ。反省しなくてはならない。
「きゃぁぁぁぁぁ！」
二秒前の俺の反省を返してもらいたい。
「恵ちゃん！」
「大輔！」
工藤が教師から駆け出していく。
武も俺に視線を送ってくる。
それに頷き、俺達も悲鳴の聞こえた場所に向かった。

No title 3

また巻き込まれた。これでいったい何度目だろうか？
あれか？　主人公の武と脇役の俺が一緒に居たら何も起きないわけがない、ってな感じか？
――駆けつけたときには、すでに手遅れだった。
廊下に血溜まりを作り、その中に横たわっている体。
誰が見ても致死量だとわかるほどの出血量。ピクリとも動かない体はその生命がすでに事切れていることを物語っていた。
一応すぐに武が脈を計ったが、やはり結果は変わらない。
何でこんなことになった？
いったい何がいけなかったのか。
何故こいつが死ななくちゃいけない。
なんで――
「なんで中村が殺されなくちゃいけないんだっ」
俺の押し殺したような声に反応してくれる奴は誰もいなかった。
悲鳴を上げたと思われる高橋は、涙目で中村の横に座り込んでしまっている。駆けつけたとき血があふれている中村の腹部を押さえていたので体中血まみれだ。
武と工藤は、予想外すぎる展開にどんな反応をすればいいかわからないって感じに固まっている。その反応はわからないでもない。
まぁ普通は『なんでやねん』ってツッコミたくなるよな。『なんでここでお前が死んでるんだよ』って。正直俺も見た瞬間はそう思った。
でも俺は中村に心を開き始めていたから、今は戸惑いより怒りのほうが大きい。
中村を殺した存在が許せなかった。
人が死ぬのは見たことがある。目の前で死なれたこともある。
それでも、やはり人が死ぬのには慣れない。

いや、慣れたくない。
今回ばかりは俺も、無様な脇役で終わりたくなかった。犯人をこの手で捕まえ、中村の無念を晴らしたいと思っている。
中村から視線をはずし、武を見る。
武も戸惑いから覚め、中村の死体を悲しそうに見ていたが、俺の視線に気づき表情を引き締め頷いた。
それに頷き返し、俺は中村の横に座る。高橋が涙目で此方を見てきたが、俺も他人を気にしている余裕はないので武を頼ってください。
中村の表情はホッケーマスクでわからなかった。一瞬ホッケーマスクを取るか悩んだが、やめておくことにする。
きっと何か理由があって、中村もマスクを被っているのだろう。それを勝手に知ってしまうのは忍びなかった。
続いて傷口に視線を移す。
そんな俺に武が確認事項のように言った。
「大輔。わかっていると思うけど……」
「あぁ、いじったりはしない。凶器がなんだったか見ているだけだ」
できることなら、少しでも安らかに眠れそうな場所に運んでやりたいが、そうもいかないのだ。
こういった場面も過去にあった。さすがの俺も現場保存は知っているから、遺体に触れたりはしない。
遺体の切り裂かれた傷口を見て、武に確認を取る。
「刃物だよな？」
「うん。傷の深さから見て、一度刺してそのまま横に切り裂いたみたいだね」
「……なるほど」
聞いた以上のことを教えてくれた。見ただけでそこまでわかるとは、さすがは武。能力差は理解しているので有り難くヒントとして頂いておく。

俺が猶も遺体を見ていると、武が立ち上がり場を仕切りだした。
「皆、いったん教室に戻ろう。警察には僕から連絡するよ」
武の言葉に工藤と高橋は頷く。
もちろん俺も異論は無い。ここに長居するのは危険だ。
武が座り込んでいる高橋に手を差し伸べ、高橋が少し逡巡しその手を取ると抱きかかえるように立たせてあげる。妬ましい。
それを見て俺も、遺体を真剣な表情で見ている工藤に手を差し伸べてみる。
「大丈夫か？　女の子にはキツイだろ」
「……」
工藤は俺を無視して武に「武君、ぼく怖いよ」と抱きついた。
俺は差し伸べた手をどうするか僅かに悩み、その手で頭をかいた。
教室へと歩いていく三人の後姿を眺める。自分の行動を棚にあげ、こんな時にイチャイチャしてんじゃねーよこのＤＱＮ共と思った。
もと居た教室に着くと、さっそく武が知り合いの警察に連絡した。
連絡を終えた武が言うには、この天候なので警察は来るまでに少し時間がかかるらしい。なので暫く皆でここに待機だそうだ。
殺人犯がどこにいるかわからない場所に留まるのは危険だと思うかもしれないが、武が居ればほとんど安全は約束されたようなものだ。台風の中、無理して家に帰るより安全だろう。
おそらく後藤さん（四十一歳♂刑事）もそのように判断したのだと思う。
「今は犯人がどこにいるかわからない。まだ学校のどこかにいるかもしれないし、もしかしたらもう外に逃げたかもしれない。だからこの教室にいよう」
武は「大丈夫。僕が皆を守るから」そう言って皆に笑いかけた。
工藤がうっとりとした表情で武を見ている。
俺もやっていみた。
「それに俺もいるしな。安心しろ」キメ顔で二人に笑いかける。
「変態はどっかいってよ」

ついに工藤が直接的な言葉をはなってきて、俺の心は予想以上のダメージを受けた。決して気分が高揚しているなんて事はない。ないったらない。

俺は静々と教室の隅に移動した。

武が心配そうに俺を見ているが、そんな同情は俺の心をさらに抉るだけだ。

自分の心の崩壊を防ぐため、俺は現状の把握に没頭する。

まず、中村は殺されたと見て間違いないだろう。

高橋が言うにはトイレから出てきたら中村が死んでいたらしい。凶器が現場に無かったかことから自殺は無い。

凶器は傷口から刃物だと推測できる。これは武の同意も得られたからほぼ確定だ。

問題は犯人がまだこの学校にいるかどうか。

計画的に中村を殺したのならもういないだろう。逆に突発的な、または愉快犯だとしたら、まだ学校にいる可能性が高い。

そして、そうなってくると現状一番疑わないといけないのが高橋だ。

第一発見者にして、俺達の中で中村を殺せたのが高橋だけなのだから。

だが動機もわからなければ凶器も無い。

なにより高橋が中村を殺したと考えると、高橋の行動にはわからない点がある。

それは、何故第一発見者になったのかだ。

自分で殺し、自分が第一発見者になる意味がわからない。そんなことをしても自分が疑われる可能性が高くなるだけだ。

高橋を見る。

高橋はぬいぐるみを抱きしめ俯いていた。

傷口から見て包丁クラスの刃物だと考えられるが、その大きさの刃物を隠しているようには見えない。

ダメだ、わからない。

情報が足り無すぎる。
武は何かわかっているのだろうか？　すでに何か掴んでいるのだろうか？
聞きたいが、それでは意味が無い。
俺の力で犯人を捕まえたい。犯人がもう学校にいないなら解決の糸口を警察に提供したい。
中村の敵を討ちたった。
何かできることはないか。そう考え、もう一度中村の遺体を見たいと考えたとき、窓の外が光り轟音が聞こえた。
どこかに雷が落ちたようだ。そして――
「っなんだ？」
――停電した。

No title 4

「わぁぁ！」
「……きゃぁぁ！」
工藤と高橋の悲鳴が教室に響く。すぐに武の声が聞こえてきた。
「大輔大丈夫？」
「俺は大丈夫だ！」
「よかった！　二人とも、ただの停電だから大丈夫だよ！　僕から離れないで！」
武の声に落ち着きを取り戻したのか、二人の悲鳴はやむ。
俺は立ち上がり携帯のカメラモードを起動してライトをつけた。
三人のいる方を照らすと、工藤と高橋が武に抱きつき団子状態になっている。
羨まし過ぎる状態なので俺も混ぜてもらおうと思い近づこうとすると、工藤に止められた。
「変態はそこにいてよ。暗いからってぼく達にエッチなことしそうだもん」
「……」
俺は隅に戻り座りなおした。
ここにきてワイパンであることを軽く後悔し始めたが、どう考えても手遅れだった。
そのまましばらく電気が復旧するのを待ったが、この台風ではまだしばらく時間が掛かりそうである。
このままでは俺の携帯の電池も危ういので、懐中電灯を調達した方がよさそうだ。
俺がそのことを武に提案しようとしたら、武が先に話しかけてきた。
「大輔、職員室に懐中電灯を探しに行かない？　携帯の充電は何かあったときのために残しておいた方がいいと思うんだ」

同じことを考えていたようである。
「俺もちょうど同じことを考えていた」
「やっぱり僕達以心伝心だね」
知らんがな。
「職員室には皆で行くのか？　俺だけでもいいが」
できれば中村のところに寄りたいので一人で行きたかった。皆で行く場合は、女の子達の精神状態を考えてあまりよろしくないだろう。
だが――
「殺人犯がいるかもしれないのに大輔を一人を行かせたりしないよ」
そもそも武がこの場で俺の一人行動を許しくくれるはずが無い。
そしてそんな武の優しさを、俺は無碍にできないので単独行動は無理だ。
「わかった。それじゃぁ皆で職員室に行くか」
「うん。さぁ工藤さんと高橋さん、一緒に職員室に行こう」
そう言って武は二人の手を取り立ち上がる。
二人とも立ち上がったが、高橋が武の手を取り涙目で縋りついた。
「私怖いです。職員室まで行きたくありません」
小柄な彼女が涙目で訴えてくるのは、とんでもない威力だ。縋られているわけでもないし守備範囲外なのに、思わず職員室に行くのをやめようか、と考えてしまう。
そんな威力のある攻撃も武にはきかないが。
「ごめんね高橋さん。懐中電灯があるのはたぶん職員室なんだ。でも安心して。怖い人がきたら僕が全部やっつけてあげるから」
武が高橋の頭を優しく撫でると、高橋は目を細め小さく頷いた。
やはり武は女の子に無敵である。完璧な手際だ。
俺もそれに倣ってみることにした。
武が高橋を相手しているため、少し取り残された感を醸し出している工藤に話しかける。

「怖がることはないぞ工藤。俺が絶対に守ってやる」
「警察が来たらまず真っ先に君を突き出すよ」
罪状は猥褻物陳列罪ですね。よくわかります。
ここまできて俺はワイパンであることを本気で後悔し始めたが、すべて後の祭りである。
高橋が納得したので皆で職員室に向かった。
向かっている途中で俺はふと気になったことを武に聞いた。
「なぁ武。今思ったんだが職員室って鍵開いてるのか？」
学校が休校なのだ。誰もいない職員室が開いているとは思えない。
「たぶん開いてるよ。僕達が学校に入れた時点で誰か先生はいる筈だから」
武は苦笑して「僕もさっきまで忘れてたんだけど」と付け加えた。
なるほど、よく考えなくてもそうだ。
先生がいなければ学校に入れるわけがない。こんな単純なことを武が忘れていたなんて、珍しいこともあるものだ。
俺に限っては、忘れていたどころか気づいてさえいなかったが、それはデフォである。
職員室の前に来ると、予想通り職員室は開いていた。
一応「失礼します」と言いながら入る。当たり前だが職員室の中も暗闇だった。
携帯のライトを使い辺りを照らす。
休校の学校に来たというのに何の反応もない。先生はいないのだろうか？
携帯のライトを頼りに職員室の中を進むと、奥の席に人影が見えた。
その影は机に体を投げ出していて、どうやら寝ているようだった。
あの机は鈴木先生（三十八歳♂）の席だ。やることがなくて寝てしまったのだろうか？
俺がその背に近づこうとすると、武に肩をつかまれ止められた。
俺は振り返り武に聞く。

「どうした？」
「大輔はここで二人を見ていて。僕が先生を見てくるから」
真剣な表情で奥の人影を見る武。何かあるようなので俺はその場に立ち止まり頷いた。
武は俺に頷き返し、奥へと歩いて行く。
先生の席に近づき人影に手を当て何かを確認し、そうして戻ってきた武は衝撃の言葉を発した。
「鈴木先生は殺されていたよ」
「なん……だと……？」
ここにきて犠牲者が一人増えた。
それは、この学校にまだ犯人がいる確立が大幅に上がったことを示していた。
武の報告を聞いて、工藤が鈴木先生の席へ向かって行く。
俺は声をかけた。
「おい工藤！　危ないぞ！」
「職員室は安全だよ。僕達のほかに誰もいない」
武は俺の声に答え、高橋を抱きしめる。怯えていたのだろう。
こういったことを自然にできる武に憧れざるおえない。
俺もカッコイイことをやってみたいが、残念なことにこういったことはすべてイケメンにのみ許された行為なのだ。今の俺がやったら確実に御用でござる。
俺は武に羨望の眼差しを送り、死体らしい鈴木先生の席へ歩みを進める。
鈴木先生の席に近づくにつれ、ある臭いが鼻をついた。
嗅ぎ覚えのある、嗅ぎ慣れてしまった臭い。中村の近くでも臭った鉄錆びの臭い。
鈴木先生の席の足元には血溜まりができていた。
工藤は席の周りをあさっていた様だが、俺が来るとすぐに武の下へ駆けて行く。
俺はそれを無表情で見送り、鈴木先生を見た。

授業中の生徒が机で寝ているような格好で先生は死んでいた。
背中にある大きな刺し傷が致命傷だろう。殺し方からして中村を殺した奴と同一犯人と考えられる。
他に俺ではわかることはなさそうだ。一度工藤があさっていた辺りを見てみるがゴミ箱以外に何もなかった。
懐中電灯は壁にかかっていたのを武が見つけ、俺達は職員室を出た。

No title 5（前書き）

推理ものっぽいのに挑戦してみようとか考えた結果がこれですよ……。

挙句、また中途半端。すみません。

No title 5

教室に戻り、懐中電灯の明かりを頼りに、トランプをやった席に四人集まって座る。
今回は俺が近くにいても、工藤は何も言ってこなかった。
誰もしゃべらない。
工藤と武は何か考えているようだ。高橋は怯えているのかぬいぐるみを抱きしめている。
――突然振動音が響いた。
俺は驚いてビクッと震えた。少しちびったかもしれない。
工藤と高橋も驚いたようで目を見開いていた。
そんな中、武が手を顔の前にやり「ごめん」と謝ってから携帯を手に取った。
少し話してから武は携帯をおき、そして皆を見る。
「警察からの連絡で、今からこっちに来てくれるみたいだよ」
そう言ってから俺も方を向いて「この台風の中、後藤さん無理してくれたみたい」と笑った。
どうやら警察がもう少しで来てくれるようだ。
大雨強風なのでトロトロ車を走らせてくるだろうからまだ時間はかかるだろうが、この天候で来てくれるだけでも感謝するべきだろう。
そうなってくると、俺はこの事件に対し結局何もできなかったということになる。
武はどうだったのだろうか？　何か事件解決の糸口を掴んでいるのだろうか？
自分勝手極まりないが、俺ではダメだったので仇を代わりにとってもらいたい。
事件のことだけでも聞いてみようかと俺が考えていると、何の前触れもなしに工藤が立ち上がった。

そしてビシッと高橋を指差し、
「犯人は恵ちゃんだよ！」
と言った。
高橋は驚いて固まっている。何か言おうとしているが、言えないみたいで口をぱくぱくと動かしている。
武は真剣な顔で工藤を見ていた。
俺はというと、床に強打した尻をさすっていた。
さっき驚いたばかりで気が緩んでいたところに、いきなり工藤が立ち上がったため驚きすぎて椅子から滑り落ちたのだ。
誰も笑ってくれないばかりか、ツッコミすらなく俺は恥ずかしさと自分の空気の読めなさに絶望しながら椅子に座りなおした。
武が工藤に聞く。
「工藤さん。ふざけて言ってるわけではないよね？」
「あたりまえだよ。今から僕の推理を聞かせてあげる」
その答えを聞いて武は表情を厳しくし頷く。武が高橋を庇わないということは、武も高橋を疑っていたのかもしれない。
俺も真剣な表情をつくり工藤を見て、聞く態勢に入る。
ちらっと高橋を見ると、高橋は無表情になっていた。
三人の視線が自分に集まったのを確認すると、工藤は話し始めた。
「じゃぁいっきに話しちゃうよ。中村君と鈴木先生を殺したのは恵ちゃん、君だよ。あっ、話に割り込まないでね、いちいち質問に答えるのめんどくさいから。質問には後で一気に答えるよ。まず中村君ね。恵ちゃんは中村君がトイレから出てきたときに刃物で刺して殺したんだよ。恵ちゃん血塗れだもん。傷口押さえてたくらいじゃ、そんなに血塗れにならないよ。目の前で人を刺して、それをそのまま切り裂いて血飛沫を浴びたりしないとそうまで血塗れにはならないと思うんだ。いやいや、今更拭いたって遅いって。次に鈴木先生。実は最初に殺したのは鈴木先生なんでしょ？　ぼくと浅井君に会う前に殺してたんだよね。傷口が中村君と同じだったし、最初に会ったときから、君の足跡は職員室から来てたからおかしいと思

ったんだよ。昇降口からじゃなくて職員室の方から来るんだもん。
さて、ここからは証拠だよ。じゃじゃーん、これは鈴木先生の机の横にあったゴミ箱から持ってきたも。大きなぬいぐるみが入っていたと思う箱。鈴木先生の子供、今日誕生日みたいだね。メッセージカードに書いてあったよ。大きな熊のぬいぐるをあげるって。さて、鈴木先生は死んでるのに熊のぬいぐるみはどこにいったんだろうね？　熊のぬいぐるみが鈴木先生と中村君を殺したのかな？　ねぇ、恵ちゃんどう思う？　わっ、そんなに睨まないでよ、もう。それに最初会ったときも、恵ちゃんはびしょ濡れだったのにぬいぐるみはまったく濡れてなかったよね。さすがにおかしくない？　……何が、あぁ、だから最初違和感感じたのか、よ。変態は黙ってて。話を戻すね。だから、そのぬいぐるみは鈴木先生のでしょ。そして最後に凶器。凶器は、ずばりそのぬいぐるみの中だと予想。どう恵ちゃん、当たってる？　うわっ、そんなに睨んでくるってことは当たりだね。はいっ、これでぼくの推理は終わり！　以上のことから犯人は恵ちゃんです！　言い逃れとかできないからって、ぼくと武君を亡き者にしようとか考えないでね！」
工藤はそこまで語って「ふー」と息を吐きトスンと席に座った。
喋りつかれたみたいだ。
それにしても驚いた。
工藤が一気に捲くし立てるから、すべて合ってそうで俺には反論するところが見当たらなかった。
俺が感じた違和感も工藤のおかげで解消している。
だが、何より驚いたのが工藤の台詞に俺という固有名詞が無かったことだ。
ただ、どうも工藤の勢いと雰囲気に気圧されているだけな気がした。どなたか頭のいい人に解説を願いたいものだ。
高橋を見る。
高橋は唇を噛み工藤を睨んでいた。どうやら高橋が犯人で確定のようだ。

そうなってくると、工藤の推理は犯人を追い込むだけの論理性はあったということになる。やるな工藤。
そんなことを考えていたら、高橋が後ろに飛んだ。
文字通り、何の予備動作もなしに教室の中央から窓際まで飛んで、机の上に着地したのだ
まともな人間の動きではない。
そして高橋は嫌な笑みを浮かべ言った。
「ひゃははっ、よくわかりましたね工藤さん。正解です。すべて当たりです。全部間違いありません。そうです、殺したのは私です」
豹変していた。さっきまでの大人しそうな高橋ではない。あんなパンツが見えそうなほど足を広げて座るとか今までの高橋ではない。
あれはどこか狂って、壊れたしまった人間だ。もうちょっと足を広げてください。
「ひゃははっ、名推理ですよ工藤さん。名探偵でも目指しているんですか？」
高橋は狼のような体勢になる。まるで獲物を狙う獣のように。
張り詰めた空気が辺りを支配し始める。
そんな高橋を見て、言葉を聞いて、工藤は言った。
「あっ、ぼくの推理当たってたんだ」
「「「……」」」
張り詰めていた空気が霧散する。工藤には俺レベルでエアーリード機能が搭載されていなかったようだ。
何言ってんだこいつ、そんな視線が工藤に集まる。
工藤はそんな視線を気にすることもなく、ポケットから携帯を取り出して高橋に見せた。
「じゃーん、ボイスレコーダ。恵ちゃんの今の自白は録音されたよ」
「……どういうことです？」
高橋が困惑の表情を浮かべる。
せっかく真の正体を現し、これからってときにこの扱いは可哀想

だ。
だが、俺も工藤の発言は気になるので何も口を挟まない。
工藤は携帯をポケットにしまった。
「ぼくの推理なんて全部適当だよ。目の前で人を刺したからって血塗れになるか知らないし、箱はあったけど何が入ってたかなんてわからないし、そもそもメッセージカードなんてなかったし、廊下があんなに暗くちゃ足跡なんて見えないし、ぬいぐるみが濡れてなかったのだって鞄に入れておけば大丈夫だし……だからぼくの言ったことはぜーんぶ勘でぜーんぶ思いつきでぜーんぶ憶測。つまりぜーんぶ適当」
工藤は高橋を見て笑った。
「ぼくは適当だよ」

No title 6

その言葉を聞いた瞬間、高橋はぬぐるみから包丁を取り出し工藤に跳びかかった。
机から机へ、わずか一足で教室の中央まで飛ぶ。
ここで俺が主人公だったら、瞬時に反応し工藤を庇うことができるのだろう。
だが残念なことに、俺は主人公でもなくヒーローでもない。俺は普通の脇役でしかないのだ。
俺は高橋のスピードにまったく反応できなかった。
だから――
「させないよ」
「っ？」
――主人公経験者の武が工藤を守った。
高橋がこういった行動に出ると予想していたのだろう。
高橋が動き出すと同時に、武は工藤と高橋の間に割って入って、工藤に突き出されていた包丁を椅子で弾き飛ばした。こいつチートすぎる。
「……ごめんね。はぁっ！」
「ぐっ！」
武器を失い呆然としていた高橋に蹴りを決める武。
その一発で高橋は窓際まで吹っ飛んだ。
飛びすぎである。常人に出せる威力じゃない。
武はすぐに包丁を拾い、高橋に歩み寄る。
高橋は蹴りの威力がヤバかったのかまだ立ち上がれない、というより気絶していそうだ。
高橋の横に膝を着き、その顔を覗きこむ武。ついでに黒板消しクリーナーのコードで手足を縛っているようだ。
生きているのだろうか？　俺だったら死ねる自信がある。

そんなことを考えていると武が立ち上がった。
「気絶したみたい。終わったよ」
「武、高橋は生きて「浅井君！」ですよねー」
俺の言葉をさえぎって工藤が武に抱きつく。首に手を回し、ぶら下がるような格好だ。
「くっ、工藤さん。どうしたの？」
「浅井君助けてくれてありがとう！　一瞬、ヤバイかも！　って思ったよ！」
確かにあれはヤバかった。武っていうチートキャラがいなかったら工藤は死んでいたかもしれない。
警察が来るまで待ってから、高橋を追い詰めるのが正解だったのではないだろうか。
「何であの場面で高橋を追い詰めた？」
「……」
此処まできて、まさかの無視。
仮にも生死を共にした戦友である。この扱いは酷くなかろうか？
……でも気持ちい……いや、なんでもない。
そんな俺の問いに答えてくれたのは、いつでも俺に優しい武だった。
「あの場面しかなかったんだよ大輔。警察が来てしまったら自白しない可能性が高いし、いくら怪しいといっても、証拠がないと任意同行しかできない。あの身体能力だから、断られてしまったら逃げられてしまう。高橋さんが怪しいとは思っていたけど、僕は何も証拠と呼べる手札がなかったんだ。だから工藤さんがいてくれて助かったよ」
武が工藤に微笑みかける。工藤は照れくさそうに「適当だよ」と言う。
そして工藤が顔を真っ赤にしながら武を見た。
「それより、ぼくと浅井君っていいパートナーになれると思うんだ！」

「えっ？　いきなりどうして？」
武が慌てだす。俺も驚く。工藤は気にせず続ける。
「ぼく、転校して来る前は刑事さんに『女子高生探偵』って言われてたんだよ。地元の警察には少し有名だったんだ。事件を解決するお手伝いをしたんだけど、それで何度か危ない目にもあってるんだよ。でもこれからは、ぼくが事件を解決してぼくを浅井君が守るの。ねっ、いいコンビでしょ！」
「えっ、えっ、それはちょっと！」
「今からコンビ結成！　パートナーになったから浅井君じゃなくて武君って呼ぶね。ぼくのことも彩音って呼んで」
「そっ、そんな急にっ」
武は焦りまくっていて、まったくまともな反論ができていない。工藤は工藤で浮かれまくって武の首にぶら下がったまま、きゃっきゃっと楽しそうだ。
「武君、昇降口で警察が来るまでこれからの事話そう！　ぼくの今までの事とか聞いてもらいたいし！　……なによりここは変態がいるからヤダよ」
後半は俺にしか聞こえないように呟いたようだ。
おかしいな？　俺には聞こえてすぐ傍に居る武には聞こえないってどんな魔法？
女の子って不思議。
そしてそのまま、工藤に引きずられるように武は教室を出て行った。
武も抵抗していたようだが「待って！　僕は大輔と一緒にいいいい」という哀愁漂うドップラー効果を残すのだ限界だったようだ。
武に勝てるとは、工藤ったら恐ろしい子。これはお姫様と魔導師コンビ大ピンチだな。
それにしても。うん、俺空気。
事件解決の手伝いもできなかったし、最後まで空気だったし、ここには俺の居場所はないようだ。台風とか関係ない、最期に中村を

見てもう帰ろう。
そう思った瞬間――
「っ？」
高橋が立ち上がった。
それに合わせる様に、最近やたらと感じる機会の多い、世界が塗り換わるような感覚。
「なんだよこれっ……」
すぐに逃げなくてはならないのに体が動かない。擦れた声しか出せない。
俺では何もできないのだから、最低限誰にも迷惑を掛けないようにしなくてはならないのに、予想外過ぎる現象に眼を離せないでいた。
俺の視線の先で、高橋は俯き体を震わせている。コードは引きちぎられ、足元に落ちていた。
武の蹴りを喰らって立ち上がっただけでも充分驚きの事実なのに、それ以上に俺を困惑させる現象をその体に表しながら。
「あぁぁあぁぁあぁぁぁぁっ！」
喉から獣のようなうめき声が零れさせ、高橋はその体を変化させていった。
まず手の指から、大木でも切り裂きそうな鋭く大きな爪が現れた。
続いてむき出しの腕と足を体毛が包み、口の端に骨をも噛み砕きそうな犬歯を覗かせる。
正面越しに見える尻尾を揺らし、瞳を怪しく光らせ此方を睨む。
最後に頭頂部からぴょこんとイヌミミが生えてきた。
最後に頭頂部からぴょこんとイヌミミが生えてきた。
大事なことなので二回言いました。
俺は呆然とイヌ高橋を見る。
正直何を言えばいいかわからなかったし、展開にもついていけなかった。
シリアスな空気を保てと言われても、逆にお前ならこの展開でで

きるか？　と問いたい。
先ほどまで殺人犯として、恐怖の対象として存在していた少女が、突然イヌミミ少女に様変わりしたのだから驚くなという方が無理である。
俺は搾り出すように問いかけた。
「高……橋……？」
「わんっ」
「えーと……何かいろいろと大丈夫なのか？」
「わふっ」
「悪いが俺はバウリンガルを持っていない」
残念ながら犬語を翻訳することができない。日本語か簡単な英語でお願いしたいものだ。
座り込み足で耳の後ろをかき始めたイヌ高橋のパンツを呆然と眺めていたら、最近聞いた覚えのある声が背後から聞こえた。
「またあんたか……」
「きゃうっ」
同時に大量の符が飛んできて、イヌ高橋を拘束する。
展開が急過ぎて完全に混乱しながらも、符が飛んできた方向を見ると、
「二度までは偶然、三度目からは必然ってかぁ？　ここまでくると縁だな。ようっ、また会ったな山田」
指に符を挟み、その手を軽く振りながら邪気眼さんが教室のドア傍に立っていた。
「邪気……いや、確か……」
「うん？　あぁそっか。そういやぁ名前教えてなかったな。俺は土御門晴真。職業は、まぁあれだ。予想はついてると思うが、所謂妖怪とか退治する陰陽師ってやつだ」
そう言いながらイヌ高橋に歩み寄る邪気眼さん改め土御門晴真。
傍にしゃがみ込み、符に拘束されもがくイヌ高橋を見てさらに符を付け始めた。

つけ過ぎではなかろうか？　完全にミイラ女になっている。
イヌ高橋に符をぺったんする作業をしながら、包帯に覆われた視線を此方に向けてきた。
「それにしてもあんたはあれか？　また危険に関わってよ、Mなのか？　M田って呼んでいいか？」
「全力で拒否させてもらう」
M田とかもはや虐め。
それに俺はMではない。確かに今日何度か危うい思考があった気がするが、あれは極限状態での混乱が巻き起こした一種の気の迷いだ。
だから決して俺はMではないはずだ。
俺は常に特徴の無い一般人を自称しているのだから、そんな事はあってはならない。
俺ノーマルだよね？
土御門は、おそらくニヤニヤしながら（包帯邪魔）続ける。
「てーことはあれか？　事件に関わればまた事情聞きに来る人に会える、みてーな感じか？」
「それあれだろ？　犯罪心理学にある心理テストだろコラ。しかも俺に事情聴取みたいなことしてきた人達は皆、がたいのいい兄ちゃんだったぞこの野郎」
敬語とか知らない。俺のことMとか犯罪者とかホモ扱いする人に敬語とかいらない。
軽く前かがみになっているのは、決して怒られたり怖いことされたらすぐに土下座できるように準備しているためではない。
俺の答えを聞いて土御門が今度はわかるレベルで笑った。
「くははっ、あんた面白いな。時間があったらもっと話してーが、今日はそうもいかねぇ。まぁ、縁はあるみてーだしな。また会えんだろ。そん時までお預けだM……山……M田」
「おい、言い直した意味がないぞコラ。なぜ二回言い直したこの野郎」

お前が俺をどういった先入観をもって見ているか問いただしたい。小一時間ほど問いただしたい。
俺の憮然とした表情を見てか、土御門が声を出して笑う。
「くはははは っ！　おもしれぇ！　あぁ、久しぶりにこんな笑ったわ。さてと、そろそろ警察も来てんだろ。昇降口の方に行ってみな、もう居んだろーから。その後、あんたお待ちかねの愛しの人と会える事情聴取だ」
「今度お前の家に『魔法少女ケミカルこのは』のフィギアで宅配テロしてやるから住所教えろ」
爆笑しながら「やなこった」と言う土御門の声を後に教室を出る。
随分と個性的な人物に気に入られてしまった気がするが、よくよく考えてみると俺の周りには個性的な人物しか居なかったので今更だった。
それにしても、と俺は考える。
今回の『事件』は何だったのだろうか？
綺鬼に出会って巻き込まれた『事件』の続きか、それともまったく新しい『事件』なのか？
武まで巻き込まれ、工藤が解決し、後始末に土御門が現れた。
いろいろな要素を混ぜ込んだ、訳の分からない『事件』だった。
そんな事を考えながら俯いて歩いていた俺は、誰かにぶつかってしまった。
何だろうと思って視線を上げると、そこには警察官様が居ましたとさ。
俺が驚愕に固まっていると、その人は俺の格好を上から下まで三往復見た後、手錠を取り出して言った。
「猥褻物陳列罪で現行犯逮捕する」
「死にたい」
工藤に突き出されるまでもなかった。
俺はワイパンであったことを死ぬほど後悔した。

No title 6（後書き）

仕事が……。

幕間　其の二（前書き）

今日中に何とか書き終わりました。

幕間　其の二

「――アァ」
間の抜けた、意味のない声が自分の口から漏れた。
何かを喋ろうとして、直後に何を言おうとしたのか忘れたかのような声だ。
「あァレ？」
事実、何で声が出たのかわからなかった。俺は何かを言おうとしたのだろうか？
わからない。
自分の思考が思い出せない。
「アぁくそッ！」
そのことが無性にムカついて、憂さ晴らしのために足元に転がっているモノを踏みつける。
踏みつけると同時に「げぇっ」と不快な音が聞こえた。
視線を足元に向ける。
学校指定の制服を着た女が俺の足に押さえられながらも、這って逃げようとしていた。
その姿が俺のイライラを加速させ、俺は転がっている女の腕を、おもいっきり踵で踏んだ。
くぐもった悲鳴が女の口から発せられる。叫ぶ体力もないようだ。
「ははハッ」
蹲る女が、まるで芋虫のようで笑える。
そういえば、この女は何なのだろうか？　何故ここにいる？
思い出そうと数分前の記憶を探った。
そもそも何故俺はこの場所にいるのだろうか？　いや、それはわかる。妹を捜しに来たのだ。
思考が繋がる。
そうだ、思い出した。

妹を捜しに来て、この女を見つけたのだ。
妹だと思って近づいたら、見たこともない女だったので、ムカついてボコボコに殴ってしまったのだった。
女を見る。
改めて見ても、妹にはまったく似ていない。
何故自分は間違えたのだろうか？
「マァ、そんナコトはどううでもいいカ」
今一度、妹を捜す行動に戻る。早く見つけないといけない。
現状把握のためあたりを見渡す。見覚えのある風景。ここは俺が通っている高校の裏庭だ。
とりあえず、どこから捜そうか？　早く見つけないと妹が危ない。急がないと――。
――あれ？
また、思考が途切れる。
なんで妹を捜さないといけないんだ？　なんで急がないといけないんだ？
繋がらない、所々足りない思考のパーツを必死で集める。
そうだ……俺は妹を助けないといけないのだ。
最愛の妹を守らなくてはならない。
記憶を辿る。現状に陥ってしまった原因を探る。
――俺は妹と両親の四人家族だ。
父親は所謂エリートと呼ばれる人種だった。だがある日、俺が小学校低学年くらいの時に会社をクビになり、酒に溺れて金を消費するだけの役に立たない邪魔モノとなった。ただただ、毎日を自堕落に生きて、俺と妹に暴力を振るうモノ。
母親は、そんな夫のかわりに身を粉にして働いていた。できた母親だったと思う。
ただ、母親は俺達子供を守ってはくれなかった。
食事を作ってくれるし、高校にも通わせてくれた。
なのに、父親からは守ってくれなかった。父親からは母親も逃げ

ていた。
それは仕様が無いことだと思う。母親にとっても父親は恐怖の対象であったのだろうから。
だから、俺は必死に妹を守った。自分ができることは限界までやった。
学校では家の事情を周囲に悟られない様に明るく振舞い、放課後はバイトをして母親の稼ぎだけでは足りないものを補って、家に帰ったら父親からの暴力から身を盾にして妹を庇った。
辛いと思ったことはない。
その日常が俺にとっては普通だったからだ。
だが、俺にとっては耐えられることでも、妹が耐えられるとは限らなかった。
それに気づけなかったのが、俺の最大の過ちである。
肉体的には傷を負っていなくても、心はそうではなかった。
妹は少しずつ心を病んでいった。
俺は友達もいて、学校では馬鹿をやりそれなりに楽しんでいたが、妹はうまくいっていなかった様だ。
だんだんと不登校になっていき、俺ともあまり口を利かなくなっていった。
俺はどうすればいいかわからず、俯き笑わなくなっていく妹をただ見ていることしかできなかった。
ある日、バイトを終え家に帰ると妹が明るい笑顔で迎えてくれた。
俺は不思議に思い、また久しぶりに最愛の妹の笑顔が見れたことを喜びながら、笑顔の理由を尋ねた。
すると妹は嬉しそうに『幸せになる方法を教えてもらった』と答えた。
その時の俺は、何かの御まじないか何かだと思い気にしなかった。
それよりも妹が笑っていることが嬉しく『よかったな』と言って頭を撫でてやった。
だから俺は何も疑わず、妹の御まじないの準備を手伝った。

それは中々に大掛かりなもので、俺は妹に言われたとおりに家中の家具を移動し、所々に不思議な模様の書かれた紙を隠していった。その間に妹は配線や配管まで無理矢理変えていたようだった。
父親と母親の居ない時に行ったので、父親からは暴力を受けたが、俺は気にしなかった。俺の痛みなど妹が笑っていればどうでもよかったのだ。
そして、御まじないの効果は俺達の家を、俺達自身を狂わせた。
初めに変化が現れたのは父親だった。
御まじないの準備を終えた次の日、父親は歪んでいた。
精神の話ではなく、物理的に父親は歪んでしまった。
拉げ、潰れ、千切れた父親は、それでも家の中を歩いていた。
それを俺も、妹も、母親も気にしなかった。
次の日、母親がバラバラになっていた。
目、鼻、口、耳、首、胸、腕、手、足、脳、心臓、肺、腸、骨が血の海に浮かんでいた。
それでも母親は口で『おはよう』と言った。
それに俺と妹は『おはよう』と答えた。
父親は暴力を振るわなくなり、母親は何もしなくなった。
俺と妹は気にしなかった。
その次の日。
その日は台風だった。
何故かそんな日に、妹は学校に行った。御まじないを行ってから、家を出たのは妹が初めてだった。
両親も俺も、どういうわけか家を出る気がしなかったのだ。この家がこんなにも心地よく感じたのは久しぶりだった。
とりあえず、どんな理由であれ妹が学校に行くと言い出したのが嬉しかったので、俺は笑顔で見送った。
――ここが原因だ。
埋没していた思考から、意識を引き戻す。
そうだ、思い出した。あの日、妹は家に戻ってこなかったのだ。

今までこんなことは一度もなかった。きっと妹に何かあったに違いない。
心配に思った俺は、妹を捜して今まで町を探索していたのだ。
こんな大切なことを忘れていたとは、最近どうも記憶が曖昧になるときがある。
まるで擦り切れたビデオテープのように、過去の記憶が途切れ途切れだ。
まぁ、そんなことはどうでもいい。
今俺にとってもっとも大事なのは妹を早く見つけることなのだから。
「サて、どこからサガスか」
声に出して考えながら歩き出そうとしたとき、何かを蹴っ飛ばした。
「ウんッ？」
足元を見てみると、制服を着た女が寝転がっていた。
こんな地べたで寝るとは、どういった神経をしているのだろうか。理解できない行動だ。
趣味は人それぞれなのでとやかく言うつもりはないが、夏の真昼間とはいえこんな所で寝ていたら風邪をひいてしまう可能性がある。
「……マッたク」
俺は渋々と自分が羽織っていたカーディガンを女にかけてやった。これで風邪をひく可能性は減っただろう。
本当は起こしてやったほうがいいのだろうけど、ぐっすり寝ているようなので気が引ける。カーディガンを貸してあげるので勘弁してもらいたい。
「そノかーでぃガんはおキにイリダガラ、きかいがあったラカエシテクレ」
聞こえているとは思えないが、一応声をかけてその場を去ろうとする。
「――待て」

だが、背後から聞こえた声に歩みを止められた。

幕間　其の二　2（前書き）

昨日のうちに投稿できなかった……。
そして戦闘描写は難しかったです。

幕間　其の二　2

瞬時に振り向く。
脊髄反射の限界を超えたスピードで振り向き、現れた存在を確かめる前にどんなことにも対応できるように構えをとった。
「急に呼び止めて悪いな。ちと、あんたに用があるんだわ」
視界に声をかけてきた主が入ってくる。
両目と右手に包帯を巻いた高校生くらいの男だった。
見た目からして普通ではない。
だが、それ以上に見た瞬間にわかった。いや、声をかけられた時にもう気づいていた。
――こいつは普通じゃない。見た目も雰囲気も普通ではないこの男は、
「反応したってことは、あんたはまだ人としての意識が少しでも残ってるようだな……なら挨拶といこうか。初めまして、俺は土御門晴真。あんたを止めにきた陰陽師だ」
俺の敵だ。
「どれくらい意識は残ってんだ？　俺の言葉を理解できんなら、抵抗しないで大人しく捕まんな。そんで俺達に協力すんなら命だけは助けてやる」
倒さなくてはならない。退けなくてはならない。
俺は妹を捜さなくてはならないのだから。
「抵抗するなら、俺があんたを狂わされた世界から解放してやるよ」
土御門晴真と名乗った男は、そう言って右手を軽く上げる。その指には、縦長の紙が挟まっていた。
嫌な感じのする紙だ。あれは危険だと嫌でも理解させられる。
慎重に相手を観察する。闇雲に突っ込んでも勝てる相手ではない。
声をかけられるまで気配を感じなかったのだ。男のほうが俺より

も格上なのは確実である。
ここ来るまでに襲ってきた謎の化け物たちとは、伝わってくる脅威のレベルが違う。
両手の紙に意識を向けながら、彼我の距離を計算する。目測で約八メートル。一足で充分すぎるほど足りる。
先手必勝。相手の方が強いなら、此方から攻めなくては勝機はない。
「ガァぁぁァ！」
一足で八メートルの距離を詰めようと駆ける。同時に土御門は、右手に挟まっていた紙が重なり合い剣の様になると、それを横に振るった。
明らかに届かない距離で振るわれたそれを見て、俺は右腕を大きく振りかぶり間合いに這入る前に振り下ろした。
「ぎァ！」
「っ？」
何も見えない空間で俺の爪と何かがぶつかり、金属音のような鋭い音を響かせる。それを見て土御門の驚く気配が伝わってきた。
一度バックステップで元いた場所に戻り右手を確認すると、鋭利な爪が僅かに欠けていた。
「……驚いた。正直、今の一撃で終わらせるつもりだったんだが。狂気に犯されながら、あんたはかなり意識が残ってるみてーだな」
「……」
言葉を返す必要はない。余計な情報を敵に渡すことなどないのだから。
言葉を交わす場合は、相手の情報を聞き出すときだけだ。
「……フシギなノウリョクだな」
「受け答えができんだな……それだけ異形になっていても……」
それは向こうも承知していたようだ。わかっていいたことだが、やはり一筋縄にはいかない。
今度は土御門もちゃんと構える。右手の紙でできた剣を横に、最

速で払えるように。
今のは、此方に油断していると思わせる作戦だったのだろう。警戒していなかったら言葉通り一撃で終わっていた。
とりあえず飛び道具があるとわかったのはでかい。正面から飛び込むのは危険だ。
なら、
「チッ！」
横にある木を目指して駆ける。
それを見て、土御門が紙剣を横に払ったのが視界の端に映った。
「はァァッ！」
俺は木を足場にして横に飛ぶ。無理矢理な方向転換に体がミシミシと鳴ったが気にする余裕はない。
俺が木を蹴ったすぐ後に、不可視の何かが通っていったのを肌に感じた。
着地した後、土御門の動きを意識しながらも木を見る。見たところ変わったところはない。
俺は木に近づき、幹をおもいっきり蹴った。
すると木は幹の途中で真っ二つに切れ、大きな音と多量の砂埃を上げ倒れる。
切断面は驚くほど綺麗だった。
これで、不思議な能力の正体はだいたい理解できた。土御門は不可視の刃を飛ばせる。それもとんでもなく鋭利なモノを、だ。
わかったが、さてどうやって近づくか。
こちらの武器は爪と牙だけなのだから、近づかないことには勝ち目はない。
土御門がもう一度構える。
すぐに不可視の刃を飛ばしてこなかったことを見ると、一度飛ばしたらすぐに二発目を飛ばすことはできないのかもしれない。
そこを確かめれば、近づくことはできる。
「アァァぁぁァァッ！」

やけくそになったと見せるため、叫びながら土御門に向かって真っ直ぐに駆ける。
今の一撃で此方がビビッたとでも思ったのだろう。すぐさま横に剣が振るわれた。
不可視の刃。
予想していたそれは簡単にかわせるが、わざと必死さを装いしゃがんでやり過ごす。
両手と膝までついて普通なら隙だらけに見える体勢だが、実際は両手の力と足の指の力で瞬時にその場を離れられる。
それを見て、土御門が紙剣を胸の前で構え、駆けて来た。
距離が近づいていただけに一瞬で詰められるが、俺には見てから離れるだけの余裕があったので問題ない。
四肢に力を入れ即座にその場から跳び、離れる。
「なっ？」
土御門は驚愕の声を上げ、駆けていた足を止め後ろに飛び退く。
これで今一度彼我の距離が遠くなった。
だが問題はない。今のでわかったことが二つある。
一つは、不可視の刃を飛ばした後すぐに、もう一度不可視の刃を飛ばすことができないということ。
もう一つは、不可視の刃を飛ばしたあと、僅かに溜めを必要とすること。
これらは俺がわざと見せた隙を、不可視の刃で攻めてこなかったことから確定だ。
あの場面で、飛び道具があるにも拘らず、わざわざ近づいてくるメリットはないのだから。
さらに、駆けてくるのにも僅かにタイムラグがあったことから、飛ばした後は僅かな溜めが必要なこともわかった。
これで近づくことはできる。
これだけ遠距離に拘るのだから、もしかしたら近距離戦は苦手なのかもしれないという希望も持てる。

だからといって、決して油断はしない。
俺には妹を捜すという、目的があるのだから。
俺は姿勢を低くして、両手を下げるように構える。
土御門も先ほどと同じく構えた。
「シッ！」
今一度正面から突っ込む。最初っからトップスピードで、できるだけ距離を詰める。
先ほどと同じように紙剣が横に振るわれた。
不可視の刃が迫るのを感覚で、肌で感じる。
「フっ！！
俺はそれを姿勢を低くすることでかわす。まるで四足で駆ける獣のように。今までも低かった姿勢を、さらに低くする。
そんな状態になっても止まらない。一瞬たりとも足を止めない。トップスピードを保ったまま駆ける。
一瞬ある溜めの時間。その間に近づき近距離戦に持ち込むため。
僅かな勝機を、すこしでも自分に引き寄せる。
だが、
「っナ？」
視界に映った土御門は、すでに二発目の不可視の刃を放っていた。

幕間　其の二　2（後書き）

中途半端ですみません。

幕間　其の二　3（前書き）

眠いです。

幕間　其の二　3

「ぐ、ガァァァ！」

地面すれすれで迫ってくるであろうそれを、前に飛ぶことで避ける。

低く、できるだけ低く飛び滞空時間を減らしたつもりだが、その隙を土御門は見逃さない。

俺の顔目掛けて突き出される紙の刃。

まだ地面に足は着いていない。かわすことは不可能。

顔の前に両手の爪をかざす。

接触した二対の刃と両手の爪は、一瞬拮抗したように見えたが、すぐに爪の盾は貫かれた。

まだ足は地面に着かない。

土御門の刃が目の前に迫る。

このままでは死ぬ。

この刃に、顔を貫かれ死ぬ。

ダメだ。死ぬわけにはいかない。

妹を残して、俺は死ぬわけにはいかない。

まだ、死ぬわけにはいかないのだ。

「ガァ！」

俺は顔を僅かに動かし、目の前に迫った刃を咥えた。

土御門が目を見開く。

一瞬。本当に一瞬時間を稼げ、やっと足が地面に着いた。

瞬時に足に力を入れ、刃が迫る流れに逆らわず後ろに飛び退く。

飛び退く瞬間に咥えていた刃も放した。

「ハァハァハぁはァ」

着地した途端、肩で息をする。今の一瞬の攻防で、少なくても三回は死ぬ機会があった。

自分が生きているのは奇跡以外のなんでもないだろう。

「はァハァ……クソガっ」
ブラフだった。
不可視の刃の二発目をすぐに放たないのも、一発目の後にある溜めも、今の攻防で俺を仕留める為の囮だった。
「だが……シノぎきッタぞ」
まだこちらが不利なことには変わらないが、土御門の力を把握できたので少なくても最初よりかはマシだ。
マシになるはずだったのだ。
彼我に絶望的なまでの実力差がなければ。
「――ガァぁ？」
――何が起きたのか理解できなかった。
突然胸に鋭い痛みが奔ったと思ったら、心臓のあたりから血が噴出した。
「……ハァ？」
見ると、胸に小さな穴が開いていた。それは貫通していて、背中からも血が溢れている。
「ゴボっ！」
わけがわからず呆然と噴出する血を見ていたら、血が逆流してきて口から溢れた。
足が震えだす。
俺は立っているができなくなり、受け身もとれずに前のめりに倒れた。
「グッ……」
体に力が入らず起き上がることができない。
体温が急速に失われていくのがわかった。それは同時に俺の命があと僅かだということを示している。
現状が把握できず、焦りだけ募り、乱雑に思考が働く。考えを何一つ纏めることができない。
わけがわからない。理解できない。
何が起きた？　誰に、いつやられた？　何をやられた？

足音が聞こえる。死が近づいてくる。
動け。動いてくれ俺の体。頼むから動いてくれ。
足音が、すぐそばで止まった。死が確定する。
頭上から声が聞こえた。
「狂気に犯され、思考能力が低下していながらここまで戦えるなんてな。素直に関心できんるよ。あんた、戦闘に関して天性の才能を持ってたんだろうな……それだけにこんな結末は残念だ」
そう思うなら見逃してくれ。俺は妹を捜さないといけないんだ。
言葉にしたいが、口から出るのは擦れた息と血だけ。喋る力も残っていない。
「……じゃぁあな高橋悟さんよ。どうか、来世は幸せになってくれ」
最後に聞こえた言葉は、そんな無責任なものだった。

父親に連絡を入れ、土御門晴真は獣の死体を見下ろしながら考える。
生前の獣の名は高橋悟。今回の事件における犠牲者の一人。
強かった、と晴真は思う。おそらく、自分が相対しなければ犠牲者が増えることになっただろうと。
晴真は幾つか能力を持っているた。
それを敵に悟らせない為に、まず符の剣を使い、まるで剣で見えない刃を飛ばしているように見せる。
大抵の敵は、これでダメージを負ってくれる。そして見えない攻撃に焦り始める。
だが高橋悟は初見で不可視の刃を防ぎ、それがどういった攻撃なのか、ある程度看破した。
それも狂気に犯され思考能力が低下した状態で、だ。
確かに異形となり、身体能力が上がっていたというのもあるだろう。

それでも評価すべきは、何日も異界となった家で狂気に当てられながら、自分の意識を保っていたことと、元からある戦闘センスである。

先の戦闘でも、晴真の不可視の刃は全て防がれた。

高橋に思考能力があると見て、わざと隙を見せる策を弄したが、それも破られた。

結果的に晴真は手加減できずに、殺すことしかできなかったのだ。

戦闘もまともに行ったことがないであろう素人相手に、である。

高橋の意識を不可視の刃に向かせていたため一撃でしとめることができたが、狂気に犯される前の高橋であったのなら結果がどうなったいたかわからない。

家の者は父親以外誰も認めないであろうが『土御門』という家で現状もっとも強いであろう晴真をもって、天才と評されるほどの才能を高橋悟という男は持っていた。

それだけに惜しい。こういった人間が自分達の味方にいてくれたのならば、失われない命もあっただろうに。

「……たられば、か」

晴真は呟き、高橋から視線を外し辺りを見回す。確か女生徒が倒れていたはずだ。

少し離れた場所に倒れている人影を発見し歩み寄る。

女生徒は気絶しているようだ。傷だらけで、腕も折れているようだが命に別状はない。

晴真は女生徒を羽織られていたカーディガンごと抱えあげた。

この女生徒は、おそらく授業をサボってここにいたのだろう。そこを高橋に襲われたのだと考えられる。

カーディガンは高橋のものだろうか。襲っておきながら理解できない行動だ。

思考が安定していなかったのか、こういったところに狂気の片鱗が見られる。

「さて、これからどうするか」

とりあえずこの女生徒は専門の病院に連れて行くとして、それからどうするか。
事件の調査や妹分である土御門晴美の訓練などやらなければならない事はある。
だが、事件の調査をしようにも、晴真が怪しいと睨んでいる『倉橋』はなかなか尻尾を掴ませてはくれないし、訓練をしようにも晴美とは意見の食い違いで喧嘩状態だ。
今日だって本当だったら晴美と事件に当たるはずだった。
「あぁ、めんどくせぇ」
人生儘ならないことばかりだ、と晴真は頭をがしがしと掻いた。
その時、
「ん？」
胸元に仕舞っておいた符が動いているのを感じ、晴真はそれを取り出した。
それは先日、晴真が晴美のためを思い仮契約をした子鬼の式符だった。
「何だ？」
このままでは話もできないので、とりあえず解放しようとした矢先、
「んだよ？」
今度は携帯電話が着信をしらせてきた。
「親父？」
包帯に覆われた視界でありながら着信相手を確認し、晴真は通話ボタンを押して耳に当てる。
「どうした親父？　さっき連絡したばっかじゃねーか？」
『無駄話をしている余裕はないのでな、重要事項だけ言う』
「あぁ？」
『晴美と『倉橋』に連絡が繋がらない。お前の懸念通りの事態になっているやもしれん。お前はお前で動いてくれ』
「……あぁくそっ。本当に儘ならねーことばっかだ」

『すまない。お前には本当に苦労ばかり掛ける』
「んなことは今はどうだっていい。何かわかり次第連絡はいれてくれ」
『わかった。気をつけてくれ』
「そっちもな」
そう言って通話を切り、晴真は大きくため息をついた。
その表情には包帯の上からでもわかるほど疲れが滲み出している。
晴真は僅かな時間これからの行動に思考をめぐらし、考えが纏まると式符にむけ言った。
「子鬼。お前がんな慌ててるって事は、あいつがまた巻き込まれてるってーことだろ。ならお前はあいつの所に行け。晴美は俺がなんとかする。――解」
晴真の言葉が終わると同時に、式符が軽く光、少女の形を取る。
光が収まると其処には着物を着た少女が居た。
少女は晴真を一瞥すると、すぐさま何処かへと走り出す。
「言われるまでもないってか」
晴真は走り去っていく少女を見送り、自身もとある高校を後にした。

其の三

夢を視た。
楽しくて寂しくて愛しくて切なくて心壊れるほど悲しい夢。
それは終わってしまった『物語』の記憶。

俺の名前は山田大輔。ごく普通の高校二年生で現在引きこもり候補生だ。
これといって特徴の無い名前に黒髪黒目中肉中背で、もう「名前くらい改名したほうがよくね？」って感じの一般人である。
さっそく名前を零音（れいん）に改名しようかな。山田零音……ねーよ。なんというアンバランス。
そんなどうでもいいことを考えながら昼間の住宅街を歩く。
学校は休校となった。
台風による被害と、殺人事件の後始末のためである。
一昨日の台風の日。
高橋が二人の人間を殺した日。
そして俺が猥褻物陳列罪で連行された日。
一昨日は本当に大変だった。三時間にわたる話し合いの末、何とか釈放された。真に遺憾である。
そしてあの『事件』の結末だが。
中村は最近話題の連続殺人鬼だったようだ。
ニュースでは『殺人鬼母校で自殺』と報道されていた。
実際は高橋に殺されたのだが、案の定事実は揉み消されたようだ。
高橋の異常な身体能力や謎の変容はあまりに現実的ではなかったので納得できる。『事件』の隠蔽などはおそらく土御門が関係しているのだろう。
高橋があの後どうなったかはわからない。
俺は再三にわたる黒服兄ちゃん達の『この事は口外しちゃダメだ

よ（優しさ誇張）』的な言葉攻めに『事件』の全容をまったく聞くことができなかったからだ。
武と工藤は何か知っていそうだったが、教えてはくれなかった。
中村が何故俺達を殺そうとしなかったのか、高橋が何故あのような事になってしまったのか、俺は何一つわからない。
俺は所詮脇役で一般人だ。
わかっていたことだが、此処最近の不甲斐無さも合わさり今一度引きこもりたい気持ちが膨れ上がってきていた。
俯きがちな姿勢で歩いていたが、何とかコンビミニ到着する。
なるべく人通りの少ない道を通ってきたから普段より時間がかかってしまったが、いくら学校が休校だといっても俺としては警察の目が怖いのだから仕様が無い。一昨日捕まったばかりなのだ。実刑怖い。
だったらこんな真昼間から外を出歩くなという声が聞こえそうだが、夢見が悪く気分も沈みがちで本当に引きこもりに戻ってしまいそうなので外出したかったのだ。
自動ドアが開き店内に入ると、レジにいる大学生くらいの女の子が「……」ガン無視である。いらっしゃいませくらい言えよ。
軽くショックを受けていると、後から入ってきた客には「いらっしゃいませっ！」である。
武がモテ過ぎるわけではなく、俺が異様にモテないのではないかと不安になってきた今日この頃。
悲しい現実から目を背けつつ、昼飯を選ぶ。妹が作ってくれた昼食は九時のおやつになりました。
だいぶ腹が減っているのでがっつり食べたいが、お昼時をちょうど過ぎた時間帯なので弁当はなく、おにぎりもほとんど残っていない。
弁当を食べたいのだが……やむをえん。圧倒的存在感を放ちながらも、他の追随を許さないレベルで売れ残っているこの『アカイカレー～あのインド人も泣いた美味さ～』で妥協しよう。

パッケージに映っているインド人が、いったいどのインド人なのか気になるところだが、ここはこのインド人を信じることにする。
続いて飲み物選びにかかる。
いつもの『デロドロインドジュース』を選ぼうとしたとき、その隣にあった『新発売デロドロインドジュース改』が視界に入った。
迷わず手に取り、そこで気づく。
――この二つの商品、販売元が同じだ。
もはや神のお導きである。セットで買うしかない。
俺は意味のない使命感を感じレジに向かう。
俺が買おうとしている物を見て、先ほど挨拶をしなかった店員が変人を見るような目で俺を見てきたが気にしない。むしろ気持ちい――。
まて俺、いい加減やばいぞ。そっちは行ってはいけない場所、辿り着いてはいけない境地だ。
引き返すんだ。まだ間に合うはずである。
それによーく考えてみろ。実は嬉しくなかっただろう。酷い扱い受けたら死にたくなるだろう。もう一度、しっかり考えてみるんだ。
……。
むしろ踏まれたい。
……。
俺はもうダメかもしれない。
いつの間に俺は此方側に来てしまったのだろうか。何か最近、自分を変えてしまうほどの出来事があっただろうか。
あっ、もしや工藤のせいではなかろうか。あの生死のかかった極限の状態で、あいつのあまりにも酷い扱いに、俺の心は自分の性癖を変えるしか耐える手段がなかったのかもしれない。
つまりすべては工藤のせいである。あいつめ、武にあることないこと悪い噂を吹き込んでやる。
俺は器の小さい仕返しを考えながら、コンビニを出て人目を気にしながら歩く。

警察も怖いが、今は誰とも会いたくなかった。
家に帰ったらネットゲームで一日を潰すとしよう。
ネトゲーはとても楽しい。厳しい現実を忘れられるし、ネトゲーの友達は皆優しいのだ。
俺が空腹とこれからの超がつくほどのダメ人間生活に涎を垂らしながら、人通りのない裏路地からさらに奥の路地に入ったとき、
「……わふっ」
「……」
路地の奥、建物の壁に寄りかかっている女の子と目が合い、女の子が小さな声を上げた。

其の三　1（前書き）

久しぶりにゆっくり寝れました。

其の三　1

その顔はとても見覚えがある。それもごく最近だ。
服はあの時と違って囚人服だが、小柄な体にあのおさげ。
ふさふさの尻尾に、頭頂部に生えた獣の耳。
そう、名前は――
「――高橋恵」
隠蔽された殺人事件の犯人。人の『カタチ』を忘れた殺人犯。
俺が知っている限り、二人の人間を殺した狂人。
……外出しなければよかった。
「くぅん？」
「……くっ」
高橋が壁に寄りかかるのをやめ、此方に歩み寄ってくる。
失敗した。
すぐに逃げるべきだったのだ。これで俺の生存確率が大幅に下ったことになる。
何故高橋がこんな所にいる？　いや、そんなこと考えるまでもなく確実に脱走だ。
警察や土御門は何をやっているのか。仕事しろよ。職務怠慢なら訴えるぞ。
高橋がすぐそばで立ち止まった。
もう、逃げられそうにない。
こうなったら戦うしか生き延びる手段はなさそうだ。相手は化け物、話し合いは無理だろう。何より共通言語が無い。
見たところ武器は持っていないようだし、純粋な殴り合いなら勝てるかもしれない。
それに此処で俺が高橋を倒せば、この後無用な犠牲者を出さないで済むのだ。
やるしかない。俺だってやるときはやるんだ。

「わ――」
「何でもするんで命だけはお助けください！」
土下座。
俺だってやるときはやるんだ、から土下座までわずか三秒。
俺は男としての誇りを失い、男の埃となった。
だって死にたくないもん。痛いのやだもん。
台風の日の高橋を見れば抵抗する気など欠片もわかない。あんなのに対抗できるのは専門家か武くらいだ。
やめてよね。俺が君に勝てるわけないじゃないか。
「わん」
「お願いします！　どうか見逃してください！　高橋様のことは誰にも言いませんので命だけはお願いします！　あっ、もし殺す相手をお探しでしたらこの路地をぬけて進んだ先の袋小路に活きのいいＤＱＮがたむろっているので、そいつらなんてどうでしょうか？　きっと気持ちいいくらい、いい声で鳴いてくれますよ！　それに比べて俺はあれです！　なんかマンドラゴラみたいな悲鳴上げるんでやめたほうがいいですよ！　高橋様の気分を害してしまうだけです！　なのでどうか俺の命だけはお助けください！　他の人はどうなってもいいので俺のことは見逃してください！」
そう言って俺は地面に額を擦りつけた。結構痛い。
言語は通じ無そうだが、きっと誠意は通じるはずだと俺は信じている。
プライドとか目の前のわんこに喰われました。服従って仰向けになればいいんだっけ？
はい、そこ。最低の人間とか言わない。
君はまだ知らないだけだ。人間の本性なんて、みんなこんなものである。
誰だって死にたくないのだ。どんなことをしても、他人を犠牲にしてでも生きていたいと思っている。
こういった生死のかかった場面では、その醜い本性が曝け出され

る。
俺はそういった瞬間を見たことがあった。
依然俺が地面に額を擦りつけていると、頭上から困ったような高橋の声が聞こえてきた。
「くぅん？」
「ごめんなさい！」
とりあえず謝る。弱き者の特権である。怖くて高橋の顔を見れない。
自分の生殺与奪権が他人の手にあるという現実に、緊張のあまり吐きそうだ。
コンビにまでだからと携帯を置いてきてしまった過去の自分を殴り飛ばしたい。
脇役でしかない俺になす術などないのだった。
「わふっ！」
「何でもします！　俺の命が無事なら、肩揉みから靴の裏を舐めることまで、もう何でもやります！　お望みとあらば胸だって揉みマンドラゴラ……失礼しました。何でもありません」
落ち着け山田大輔。醜い本性を曝け出しすぎだ。その本性は生死のかかった場面で曝け出す必要はない。
だが、大丈夫なはずだ。
あまりに迂闊な発言だったが高橋と俺では言語形態が違うので、今のセクハラ発言は通じていないはず。
高橋が俺の傍にしゃがみこんだ。
卒倒しそうなほど俺が戦々恐々としていると、高橋はがさがさと何かやり始めた。
何をやっているのかと面を上げ見てみると、俺が持っていたコンビニ袋に鼻先を当てて匂いを嗅いでいた。
「えーと、中身が気になるのか？」
「すんすん」
回答は無し。だが、無視されたところで俺のハートは今更傷つか

ない。
どうすればいいか数瞬悩んでいると、高橋は袋から弁当を咥え出してパッケージを食い破り中身を貪りだした。
「がつがつ」
「人類進化の集大成、手の利便性を忘れたようだな」
近所のわんこが餌を食べている様子と目の前の光景に差が見られない。
どうやら、共にトランプをやった（やっていない）あの頃の高橋と目の前のイヌ高橋は、完全に別物と考えた方がいいようだ。
「だがな、イヌ高橋」
小さく呟き、静かに立ち上がる。
「人間……弱い人間ほど、割り切ることができないもんなんだよ」
俺はニュースで言っているように、中村が連続殺人事件の犯人だということが信じられなかった。
中村のことをまったく知らない奴が何を言っているんだ、と思うかもしれないが、逆にあの日の中村しか知らない俺にとって、あの日の中村がすべてなのだ。
だからこそ、中村は隠蔽工作のために高橋の罪を肩代わりさせられたのではないかと考えてしまう。
穿ち過ぎだと分かっている。今の俺は現実を受け入れたくないと駄々をこねている子供と同じだ。
きっと俺はまだ、何もできない自分を認められていないのかもしれない。
「くそっ、夢見の悪さを引きずりすぎだ」
頭を振り、高橋を見下ろす。
熱心に弁当を食べているようだ。相当腹が減っていたのだろう。
そして、それに相乗し現在の高橋はとても無防備だ。どんな生物も食事中は辺りへの警戒心が薄れる。
つまり大チャンスという訳だ。
「中村の仇だ」

弁当に顔を突っ込んでいる高橋の後頭部目掛けて、軽く踵落としをはなった。
えっ？　本気でやれって？
何を言っている。後頭部を思いっきり殴ったり蹴ったりしたら、死んでしまう可能性があるだろうが。
俺には人を殺す覚悟も勇気もない。
たとえそれが人の『カタチ』を忘れたモノであっても同じだ。
というわけで、一撃入れて鬱憤を晴らしトンズラしましょう。
喰らえ高橋。脇役の恐ろしさをその身に刻み気絶しろ。
「わふん」
「ないわー」
高橋がちょうどよく面を上げたため、俺の踵落としは虚しく空の弁当箱に突き刺さった。
高橋さんったら、ベストタイミングでお食事を終えたようですね。
そういえば、犬って餌食べるの早いよね。イヌ高橋ってば、そんなところまで犬なのね。もう、小さな口で頑張っちゃって。
俺オワタ。

其の三　1（後書き）

明日も早起き。
これから暫く忙しくなるかもしれないので、投稿ペースが崩れるかもしれません。
すみません。

其の三　２（前書き）

昨日はＰＣの起動中に寝てしまうという離れ業をやってしまいました。

其の三　2

「……」
「……」
見詰め合う一人と一匹。
まるで恋をしてしまったかのように、つぶらな瞳が俺を捕らえて離さない。
「わ――」
『逃げるが勝ち！』
実際は逃げるタイミングを掴むために一挙一動見逃さず凝視していただけである。
高橋が何か声を発しようとした瞬間、背を向け大通り目指して全力で走りだした。
「わんっ！」
「めっちゃ笑顔で追って来やがった！」
振り返ると高橋が両手を前に出し『待ってよー』という感じで追って来ていた。
俺達の周りにキラキラを浮かせ背景を海岸にしスローモーションで再生すれば、まるで恋人同士の戯れのように見えるかもしれないが、実際は陸上部もビックリなスピードでのデットヒートである。
何というデジャビュ。わりと最近同じような事をした気がする。
とにかく逃げるしかない
今の高橋にまともな知能があるかわからないが、裏路地に居た事から人目を避けていると考えられる。
なので、表通りに向かえば追跡を諦めてくれるかもしれない。
「あれか？　獣の本能的なものか？　逃げるものを追ってしまうみたいな」
「わん！　わん！」
なんて淡い希望が叶うわけもなく、表通りでも躊躇なく追って来

るイヌ高橋。
俺が逃げるのではなく、近くの石でも遠くに投げれば勝手にどっかへと行ってくれたのかもしれない。犬だし。
だが、そんな事を今更気にしても仕様が無い。今は逃げることに集中すべきだ。
「俺を舐めるなよ高橋！　踊り子体験によって鍛えられた我が足腰！　さらに何だかんだ言ってテケテケや変な顔からも生き延びた俺の脚力を見せてやる！」
そう、自身に気合をいれ速度を上げた。
五分後。
「無理」
「わふっ！」
捕まったでござる。
直線では勝ちようがないと悟り、公園に入ってぐるぐる追いかけっこしをていたが砂場に足を取られごろごろ転がった俺は敢え無く組み伏された。犬と競争とか無理ぽ。
しかも途中で誰ともすれ違うことなく、助けを呼ぶこともできなかった。
五分以上街中を走って人一人会わないって、どれだけ俺は神様に見放されているのだろうか。
「草食動物の気持ちがよくわかるな。あっ、やめっ！　噛まないでください！　せめて甘噛み！　甘噛みでお願いします！」
「がふっ！　がふっ！」
これがエロい十八禁の展開なら大歓迎なのだが、現実はグロい十八禁の展開である。
捕食とか勘弁。
手で高橋を押しのけようと必死になっていたら、その手に持っていた『新発売デロドロインドジュース改』を手ごと咥えられた。
「あっ、てめぇ！　このジュースだけはやらんぞ！　こらっ！　咥えるな！　放せ！」

「がぶっ！」
これだけは意地でも渡さない。
ここまで執念で持っていた好物を取られそうになり、俺の決死の抵抗もあって組んず解れずの取っ組み合いとなる。
俺からすれば生死をかけた場面なのだが、高橋からすればじゃれ付いているだけなのかもしれない。さっきからふさふさの尻尾が千切れんばかりに振られている。
そして傍目からこの場面だけを見れば、きっと俺がコスプレさせたか弱い女の子を手篭めにしようと襲い掛かっているようにしか見えないだろう。
……やばくね？
イヌ高橋も怖いし、警察も怖いしでどうすればいいかわからず、俺がもう意味分からんほど焦りすぎて、とりあえず胸揉むか、という最悪の結論に辿り着いた瞬間――
「キャハハハハハ！」
「キャッ！　キャッ！」
辺りに子供の笑い声が木霊した。
あまりに突然の事に驚き、俺も高橋も取っ組み合いをやめ、辺りを見回す。
ついさっきまで公園には俺達以外誰もいなかったのだ。なのに何故いきなり笑い声が聞こえてくるのか？
その原因はすぐにわかった。
砂場。
俺達の横にある小さな砂場に、二人の幼子がいた。小さな男の子と、男の子より少し小さい女の子。
二人は手をつなぎながら、三日月のような笑みを浮かべ、俺達を見ていた。
その二人を見た瞬間、見てしまった瞬間、急に周囲の空気が重くなった気がした。
どこか冷静な部分が告げる。

この感じ、この感覚は……また。ならあの二人は……。
頭の中に警報が鳴り響く。脳が少ない細胞を必死に使って、早く逃げろと体に指令を出す。
しかしそんな事は、目の前の自体に、何より二人の姿に驚愕している俺には意味が無い。
小さな男の子と、小さな女の子。
あれは俺と――
「……莉香（りか）」
過去の記憶が蘇えり、誘われるように二人の下へと歩き出す。
二人の姿に脳を刺激される。
嫌が応にも思い出を振り返させられた。
懐かしい記憶に心温まり、同時に悲しい記憶によって冷めさせられる。
今朝の夢も思い返させられ、ただただ少女を抱きしめたいと願い腕を伸ばそうとして、
「いたっ」
掌に奔った痛みの現実へと舞い戻された。
痛みの原因を見ようと視線を向けると、高橋が噛み付いている。
俺の歩みが止まったからか、高橋は噛み付きをやめ今度は唸りだした。
「がるるるる」
「……いきなり何だ？」
疑問に思いながらも、高橋の視線を追いもう一度二人の子供へと顔を向ける。
そして、初めて高橋に感謝した。
俺の見ていた子供達は、もう居なかった。
そこには何故見間違えていたかもわからな、い知らない二人の子供しか居ない。
俺の知っていた少女は、あんな無機質な瞳をしていなかった。俺の憶えている少女は、あんな気味の悪い笑みをうかべたりしなかっ

た。
その事が彼女を馬鹿にしているようで、また見間違えた自分自身も許せず、八つ当たり混じれに子供といえど容赦せず一発殴ろうと思った時。
視線の先、二人の子供が此方に一歩、同時に踏み出した。
「くっ！」
「がるるるるっ！」
周囲の景色が一変した。
まるで世界から色が抜け落ちたかのように、ほとんど黒白の景色となる。
現実味の無い世界。現像の裏の虚像。
完全にやばげ所に引きずり込まれたようだ。
先ほどの威勢も何処へやら、俺の中から殴るという選択肢が一瞬で無くなった。
色の無い世界それだけでも耐え難い恐怖だと言うのに、二人の子供の姿も変化し始める。
「キャハハハハハ！」
「キャッ！　キャッ！」
くぐもった耳障りな笑い声が木霊すた。最初聞こえた、高い子供の声とは似ても似つかない低い擦れた笑い声。
そして声の変化以上に、見た目の変化のほうが衝撃的だった。
それは一言で表すなら人影。
のっぺりとした質量を持った影。ただ人型を取っただけの手抜きとしか思えない輪郭だけの影。ただ顔と思われる部分に、三日月形の口がある。
相手からすれば真の姿お披露目なのだろうが、はっきり言おう。
幼子のほうが怖かった。
なんか今の姿は、子供の落書きみたいであまり恐怖を感じない。
周囲の景色が白黒になったのは心底ビビッたが、こいつ等の姿を見たら気が抜けた。これなら俺の妹が小学校一年生のときに書いた、

俺の似顔絵のほうが怖い。
「というわけでダッシュで逃げるぞ！」
「わふ？」
自分でもどういうわけかはわからないが、とりあえずこれは高橋からも逃げるチャンスだと考え走り出す。
走り出す瞬間、影達が四足で走り出すのが見えた。あいつ等は人間の影ですらないのだろうか？　キャラを固定してもらいたいものだ。
「わんっ！」
「お前はもうついてくんな！」
相変わらずついてきたイヌ高橋。
狙った獲物は逃さないその精神に、心の中で滂沱のごとく涙を流しながら感心した。
正直初めから分かっていた事だが、自分ではどうしようもないので助けてもらえそうな場所を目指す。
目的地は武の家。
巻き込みたくないという気持ちもあるが、武は一度高橋に勝っているし問題ないだろう。
その後ろの落書きはどうとでもなりそうだ。
「大丈夫だ俺！　この町のことは知り尽くしてるだろう！　武の家までの最短距離もわかってる！」
「わふっ」
自身を鼓舞しながら、公園を出て最初の曲がり角に差し掛かる。この曲がり角を右に曲がって佐藤さんの庭を突っ切らせてもらえばすぐに武の家だ。
曲がる前に一瞬後ろを振り返って確認したが、走り出したときよりも影達と距離が離れている気がした。
もうホント何なんだろうかあいつ等。二足歩行のほうが速い気がする。
これなら楽勝だと思い、曲がり角を曲がった。

「マジか……」
「くぅん？」
道路工事中でした。しかもフェンスとかあるかなり本気の工事である。頭を下げている看板がとても憎い。
すみません、この町のことは知り尽くしているとか嘘でした。
そこで気づく。
呆然と立ち止まっている場合じゃない。とにかく引き返して別の道から浅井家に向かわなければ。そう思い振り返った。
「くそっ！」
だがそこには二つの影が立ちふさがっていた。
いくら走るのが俺より遅かっかったからと言って、ほとんど同時に走り出し距離もそんなに離れていなかったのだ。此方が少しでも立ち止まれば追いつかれるのは当然である。
これで退路は塞がれてしまった。影に高橋に工事と八方塞である。
俺がその場を動けないでいるのを見てか、影達はじわじわと此方に寄って来た。

其の三　2（後書き）

見直す余裕もないので誤字、脱字などありましたらご報告お願いします。

其の三　3（前書き）

八月四日加筆。

其の三　3

「落書きの癖に……」
悪態をついたところで何も変わらないと分かっている。だがどうすればいいか何も思い浮かばないのだ。
いくら見た目があれだからって、戦って何とかなる相手ではない。あのような存在に一般人の俺が勝てるようなら、そもそも土御門達のような職業は存在しない。
何とか、何とか逃げ延びる術を考えなくてはならない。
何か、何かないのか。
だが、何も思い浮かばない。足が、体が恐怖を思い出し震える。
影達が三日月をさらに大きくして笑う。推し量るまでも無く、悪意があるとわかる笑みで此方を嘲る。
――ここまで、か。
俺はそう覚悟を決めた。
もう、どうしようもない。このままただ何もせずに殺されるのなら僅かばかりの可能性に賭けて抵抗するしかない。
死ぬわけにはいかないのだ。
たとえ死にたいとしても、俺は死ぬわけにはいかない。
「やってやる……やってやるよ！」
現状、影達を何とかするのが最優先。
高橋はどういうわけか、ただ俺と影達を交互に眺めているだけなので後回しだ。
武器はない、完全な徒手空拳。
相手は住む『世界』の違う異形
それでもやるしかない。
「おらぁぁぁぁ！」
吶喊。そして突貫。次いで一気呵成。
難しい事は考えず、恐怖を忘れるように、敵を殴り飛ばすことだ

けを思考する。
だが、
「ぐはっ！」
「わぅ！」
案の定、影の一人にペチンと殴られ駆けた距離を一瞬にして飛び戻され、フェンスに激突する。
やばい、ペチンのわりに高威力だ。
「がっ、ぐぅぅ」
「くぅん」
すぐに体を起こそうとするが、ダメージが大きくフェンスに寄りかかることしかできない。
高橋が心配そうに寄って来たがそれを気にする余裕もなかった。
くそやろーがよくもやってくれたな、と怒り心頭になり影を睨むが、影がすごく笑っていたので怖くなりすぐ視線を逸した。
一瞬にして覚悟を失ったどこまでも意気地のない俺。
フェンスを支えにしふらふらと立ち上がる。
一度の交戦で悟った。
俺ではどうすることもできない。その事を理解できる程度の脳みそはある。
いや、初めからわかっていたことだ。
だからこそ、最初から逃げ延びることを前提に思考してきたのだから。
故にもう一度考える。生き残るための手段を探す。
どうすればいい？　話し合うか？　高橋を生け贄にするか？　それとも何故か襲ってこない高橋を説得（餌付け）して、協力しこの影達から逃げるか？
ゆっくりと影達は近づいてくる。まるで、少しでも俺が恐怖を感じる時間を増やすかのように。
すぐに襲い掛かってこないのは好都合ではあった。俺はその時間に必死に思考を働かし、生き延びる可能性を捜し続ける。

――それでも、結局のところ俺は一般人で脇役でしかないのだ
「がるるるるっ」
今まで、大人しくしていた高橋が突然唸り声を上げた。
驚いて見ると、犬歯をむき出しにし怒りの表情を浮かべている。
「……ゲームオーバーか」
それを見て、俺は力尽き座り込んだ。
ここにきて影達に加わり、高橋まで参戦である。さすがにもう、考えたところでどうしようもない。
完全に積みだ。
俺が座り込むと同時に影達が両腕を鎌のようなものに変え、俺に向かって一足で飛び掛ってきた。
すべてがスローモーションになる。少しずつ少しずつ、影達が俺に近づいてくる。
走馬灯でも始まるのだろうか？
だが過去の記憶は何も思い浮かんでこない。ならこれは、ただ死の恐怖を長く味わうだけではないか？　確かに俺のような最低野郎の死に方にはピッタリだが。
死ぬ前に、せめて世話になった人達に礼を言いたかった。
影達の鎌が迫る。もうすぐ俺を切り裂く。
思い返すような思い出もない。最期に残す言葉もない。俺は結局最後までどうしようもない奴だった。
そうして最期に自嘲の笑みを浮かべた俺は、影達の鎌に切り裂かれるはずだったのだが、結果は影達が切り裂かれることとなった。
「がるるるるぅぅぅ！」
高橋によって。
「……はっ？」
あまりの出来事に理解することができず、呆けながら影達が崩れ煙のように消えていく様子を眺める。
一瞬の出来事だった。
影達の鎌が俺に届く前に、横から飛びかかった高橋の爪が、牙が、

影達を切り裂き噛み砕いたのだ。
「何故だ？」
座り込んだまま、思考すらまともに働かず、ただ呆然と高橋を眺めていると、影達が消えた後を不思議に感じている様子で匂いを嗅いでいた高橋が、此方を振り向いた。
俺と視線が合うと、尻尾を振りながら飛びついてくる。
「てっ、うおっ！」
「わふー」
鼻先を此方の首筋に押し付け、嬉しそうにひと鳴きした。
まるで飼い主に褒めてくれと甘えている犬のようだ。いや、犬か。
犬は他人になかなか懐かないものだと思っていたが、イヌ高橋が特別なのだろうか？　それとも俺が、高橋の知り合いと似ていたりするのだろうか？
そんな考えても意味が無いことを長く考える俺ではないので、やたらとじゃれ付いてくる本人（本犬？）に声をかけた。
「お前は何がしたいんだ？」
「わふ？」
答えは返ってこない。言葉が通じないと分かっていても聞いてしまう。
「何故俺を助けた？」
「わん！」
「これほどバウリンガルの必要性を感じたことは無い」
そして、それはこれからも感じる事は無いだろう。少なくても高橋相手に、そう感じることは無い。
つまり、もう二度と高橋とは会うことが無いということだ。
影達の脅威が無くなり、一先ず高橋も俺に害を及ぼしそうにないことが分かったのだから、俺はすぐにこの場を離れ何処かに逃げるべきだった。
それこそ武の下に向かうべきだったのだ。
これが『物語』の主人公であるのなら、おそらくは高橋を伴い安

全な場所に避難するか、最終決戦の場に向かったのだろう。
武とかなら、こんな何も分からないまま終わってしまう事はなかったはずだ。
だが、どうしようもないことに俺は主人公ではない。
だから毎回、過ぎてしまった後に後悔することになる。
せめて俺は、助けられた礼を高橋に言うべきだった。
――トン。
と、弱くもなく、また強すぎもしない程度に、俺は高橋に押されその場に倒れた。
「な――」
――んだ？　と言葉を発す前に一陣の風が高橋の体を攫って行く。
目に捉えることのできなかった獰猛な風は、その華奢な体を中空へと飛ばした。
高橋は、仰向けである俺の視界から一瞬で消える。
直後。
おそらくはフェンスを突き破った音と、想像したくもない何か柔らかいモノが落ちたような嫌な音が、頭上から聞こえた。
焦燥に駆られ跳ね起き、背後を振り向く。
フェンスに開いた大きな穴の奥、道路に横たわる高橋を視界に捕らえたと同時に、先ほどの影達と同じように高橋は崩れ煙のように消えていった。

其の三　４（前書き）

とても難産でした。
プロットあるのに難産って……文章力が欲しいです……。

其の三　4

「う……あぁ……」

開いた口は、何も言葉を表さなかった。

目の前で起きた光景が信じられず、意味がないにも関わらず、高橋が居た場所へと手を伸ばす。

酷く喉が渇く。

目を逸らしたい現実なのに、目を逸らすことができない。

そこで、背後から声が聞こえた。

「なんだよ。獣同士がイチャついてんのかと思ったら、男の方は堕ちてねーじゃん」

聞こえてきた声に、緩慢に振り返る。

目を逸らす理由ができたことを心の片隅で喜び、またそのように考える自分が嫌で堪らなかった。

「あぶねーあぶねー。死体隠すのメンドイんだよ。人間は『魔』と違って勝手に消えてくんないからな」

声の主は、茶髪の長髪にシルバーアクセサリーを多くつけた若い青年だった。

その風体だけで言えばよくいる若者だが、その服装は青年の見た目とはかけ離れている。

「しかも、長のジジイに見つかったら長ったらしい説教コースだし。短くて一時間とかどんだけだよ。なぁ、其処のお前もそう思うだろ？」

法衣。

以前、狂った家から脱出した後に現れた者達が着ていたものと同じもの。

更に、青年が一般から逸していると判断できる――

「んだよ、無視かおい？　ムカつくな、お前。俺の式神ならお前如き、さっきの獣みたいに

瞬殺できんだぞ？」
――その肩にとまった、カラスを大きくしたような奇妙な鳥。
現実の世界には確実に存在しないであろう外見と、何処か綺鬼に通じるものを感じる存在感。
その存在を従えるこの青年もまた、土御門達と同じ常識の外で生きる者だろう。
おそらく青年が言う、俺如きは瞬殺できるという言葉に偽りはない。
そして青年は、躊躇いも無くその言葉を実行できるタイプだと思われる。
それでも俺は、
「おいおい、まだ無視か？　めんどくせぇ。黒風（くろかぜ）、そいつ殺（や）っちゃ――」
「なんで殺した？」
「――あん？」
問わずにはいられなかった。
「なんで、なんで高橋を殺した？」
「何言ってんだお前？」
青年の返しに、本当に此方の意図がわからないという返答に語気が荒くなる。
「だから！　今！　なんでお前は高橋を殺したかって聞いてんだよ！」
「うっせぇなぁ。高橋って其処に居た獣のことかよ。んなもんただの準備運動に決まってんだろ」
「準備……運動……？」
「そうっ」
青年は髪をかき上げ、楽しそうに頬を吊り上げながら言った。
「長のジジイがな、ユカイな事に『倉橋』総出で『土御門』に喧嘩売るって言い出したんだよ。何日も前から大掛かりな儀式まで行ってな。そういえばさっきの獣、どっこで聞いたことある名前だと

思ったら、この前の『事件』関係者か。あーらら、可哀想に。大方、長のジジイの儀式に巻き込まれて堕ちちまったんだろーよ。まぁ、長のジジイも何か『土御門』に気づかせるとか知らせるだとか色々言ってたが、俺からすればそんな難しいことはどうでもよくて、堂々と晴真の野郎を殺せる絶好の機会なんだわこれが。その準備運動。晴真の野郎を殺して晴美を手に――」

まだ青年が何か続けていたが、途中から完全に耳に入ってこなくなっていた。

思考にふける。

聞いていないことまで喋ってくれた青年の言葉を元に、考えを纏める。

少ない脳細胞をフルに回転させ、持てる情報をかき集めてピースを繋げていく。

長のジジイ、儀式、青年、『倉橋』、土御門晴真、『土御門』、喧嘩、学校、『事件』、巻き込まれた、堕ちた、獣、『魔』、狂った家、『表札』、高橋。

これらのピースで必死に考え、纏め、繋げ、一つの結果へと路を作る。

――成った。

纏まった。

正しいかは分からないが、少なくても俺の中で答えはでた。

つまり、中村が死んで、高橋があぁなってしまったのも突き詰めれば、

「ようは、お前らのせいってことか」

ムカツク。

ムカツク。ムカツクムカツク。ムカツクムカツクムカツクムカツクムカツクムカツクムカツクムカツク。

自分自身に対してではなく、他人にここまで怒りを覚えたのは久しぶりだった。

決めた。

真実がどうであろうと、青年らの行動に例え正義があったとしても、関係ない。
もう今回の事で後悔はしたくないのだ。
もし中村を誘っていなければ、もし高橋の違和感の理由に気づいていれば、もしすぐにこの場を離れていれば。
この場で逃げ出せば、きっと俺はまた後悔することになる。
だから長のジジイとかいう奴の計画も、目の前の青年の喧嘩も、
「俺が邪魔してやる」
そして高橋に礼を言えなかった八つ当たりのために、
「お前はぶん殴る」
「マジ晴美って可愛いよな。しかもムネはくそでけーし……てっ、ん？　なんつったお前？
」
ゆっくりと立ち上がった俺を、ぺちゃくちゃと喋るのをやめ訝しげな表情で見てくる青年。
その表情のまま続ける。
「今、俺の事をぶん殴るとか言った気がするが、もちろん俺の聞き間違いだよな？」
それに対し俺は嘲笑をうかべ答えた。
「この距離で聞き間違いか。随分と耳が遠いようだが、その年で難聴とは同情するよ。脳がだいぶ腐っているようだから、耳まで腐っちまったのか？」
「……どうやら死にたいようだな。お望みどおり今すぐ殺してやるよ。殺れ！　黒風！」
俺の返しに青年は一瞬で表情を怒りに変え、青筋を浮かべながら式神に命令した。
青年の命令を聞き、黒風と呼ばれた怪鳥はその身に風を纏い消える。
直後、俺の眼前で怪鳥は鬼の手によって地面へと叩きつけられた。
「大さんに触れるな」

突然俺の影から現れた醜く禍々しい鉤爪の主、綺鬼はそう言って消え始めている怪鳥にもう一度鉤爪を叩きつける。
その一撃で怪鳥が完全に消滅したのを確認した綺鬼は、鉤爪から小さな少女の手に戻し、まるで其処が自身の定位置だとでも言うように、ごく自然に俺におぶさった。
それら僅か数秒の出来事を、俺は嘲笑をうかべたまま微動だにせず眺めていた。
「はっ？」
呆けた声が響く。
俺が消し飛ぶことを確信していたであろう青年は、目の前の光景が信じられないようであった。
数瞬呆けていた青年だが、曲がりなりにも戦闘を生業としてきただけはあるようだ。
すぐに立ち直り、憎々しげな声を発した。
「そうか、そうだよな。人払いの結界の中に居るんだ、当たり前か。しかもそのガキは式神か？　つーことはお前もこっち側の人間っ？」
青年が途中で言葉を切り、明後日の方向を向く。
その視線の先で、俺達からはだいぶ離れた場所に、突然光の柱が上がった。
天を貫くほど巨大なそれは、どれほどの全長なのか想像もつかない。
それを見て青年は目を見開く。
「おいおい、まだ予定の時刻になってねーぞ。長のジジイ、何勝手に始めてやがんだよ。俺無しで儀式が成功するとでも本気で思ってんのか？」
「これは良い事を聞いた」
「あん？」
「つまりは、俺の目的はお前を倒せば叶うわけだ」
計画の邪魔も、青年の企みも、俺の八つ当たりさえ、目の前の男

を倒せばすべて叶う。
随分と景気よく喋ってくれる男だ。
此方が何もしなくても、此方の目的と方針まで教えてくれた。
「お前……まさか俺に勝てるとでも思ってんのか？」
「そっくりそのままお前に聞き返してやる」
俺はそう言って、一歩ゆっくりと踏み出した。
「お前の式神を一撃で殺した綺鬼を従えている俺が、お前よりも弱いと本気で思っているのか？」
「くっ」
俺が踏み出した分、青年は一歩下がった。
そんな青年を俺は見下し、言う。
「覚悟しろクソ坊主。お前だけは謝ったとしても許さない」

其の三　４（後書き）

まさかのシリアスでした。

其の三　5（前書き）

目先のお盆休みを生きる希望に頑張っています。
八月二十日加筆修正。

其の三　5

ゆっくりと右手を上げ、掌を上に向け中空で構えた。
青年は此方の動きを警戒しているのか、動かない。
そんな青年に問いかける。
「世界の広さを知っているか？」
「……意味がわかんねーよ」
封印していた記憶を思い出す。
「お前は異世界があるのを知っているか？　天使を見たことがあるか？　竜は？　精霊は？」
「何が言いてーんだよ！」
それはまだ、自分を信じていた時代。
「ならこの世界ではどうだ。言霊使いは？　概念ごと消してしまう闇は？　不死なる者は？　巫蟲（ふこ）は？　神話の化身は？」
「知らねーよそんなの？　ふざけてんのか？」
力を求め続け、願い続けていた記憶。
「お前がただ無知なだけだ。さぁ、当ててみろ。俺の能力はなんだ？」
スイッチが切り替わる音がした。
それは、かつての自分へと還る警報。
忘れ去られた歴史が、今紐解かれる。
「見せてやるよ。俺の本当の力を」
呟き、中空で構えていた右手を握り締め胸元に寄せる。
寄せた右手の手首を左手で掴み、俺は二度と口にすることは無いと決めていた言葉を紡いだ。
「零式封印機関解除（ぜろしきふういんきかんかいじょ）。『イデアの瞳』接続に伴い第二種永久機関（だいにしゅえいきゅうきかん）『カイロスの翼』を制御術式に固定」
辺りに、大気が震えているような音が響く。
青年が息を飲んだ気配がした。

「お前、何をしている？　何をしようとしてんだ！」
「自分の目で確かめろ」
笑みをうかべる。俺は今、どこか狂ったような笑みをうかべているだろう。
それも当たり前だ。
狂ってでもいなければ、とても耐えられないのだから。
「『エデンの夢』正常稼動を確認。接続者認証完了。最終システム起動コード『プロジェクト・エンジェル』入力。さぁ、剋目しろ！　これが俺の力だ！」
両足を軽く開き、左手で右手首を掴んだまま、右手を空に突き上げた。
「機工術式武装『ルシフェリオン』展開！」
俺の叫びと同時に、足元の道路が俺を中心にひび割れ、砂埃が舞う。
砂埃が舞い、視界が塞がれている中、誰も動かない。
数瞬後、その砂埃が晴れても、俺達は誰も喋りださず、辺りを静寂が支配していた。
俺は最後の姿勢で固まったまま、青年は何が起きてもいいように俺を注視しながら辺りを警戒し、綺鬼は俺の襟元にマーキングするが如く額を擦りつけている。
そのまま、時間だけが静かに過ぎていった。
何分起っただろうか。いいかげん俺の精神が崩壊しそうになってきた時「くちっ」と可愛らしいクシャミが背後から聞こえた。
それを聞いた俺は、まるで何事もなかったかのように構えを解き、背中に手を回して綺鬼を掴み正面へと持ってきて聞く。
「どうしたの綺鬼ちゃん？　風邪でもひいちゃった？」
「大さん、私は大丈夫だよ。大さんの襟足がくすぐったかっただけだよ」
「そうか、よかった」
俺がそう言うと、綺鬼はすぐにまた俺に抱きつき、胸に額をぐり

ぐりと擦りつけてきた。
その様子がとても微笑ましく、更に綺鬼がくっ付いてきてくれて堪らなく嬉しいのだが、ただそこは人体の急所である鳩尾だということを今度教えてあげたいと思う。
「てっおい！　お前ら何和んでやがる！　お前の力って何だよ？『ルシフェリオン』はどうした！」
そんな和やかな雰囲気を台無しにする青年。
それでも攻撃してこないのは、この状況になっても俺を警戒してのことだろう。
警戒しても意味無いのに。
「そうか、そうまで俺が怖いか。なら教えてやる。俺の力の真実を」
「……」
青年が冷や汗をうかべながら中腰で構える。
今一度空気が重くなった気がした。
「機工術式武装『ルシフェリオン』とはな……俺が中二の時考えた黒歴史の一つだ！」
「……」
だが、一瞬にして軽くなった。
何か、すごい冷めた視線を感じる。
確かに俺も自分でやっていて、あぁこれはないわーって思ったけど、仕様が無いのだ。
現状俺がとれる手段でもっとも有効そうなものが、ハッタリによる時間稼ぎだったのだから。
正直、綺鬼が助けてくれなかったら、式神を嗾けられた時点で終わっていただろう。避けるまでも無いと余裕があったわけではなく、早すぎて視認することも避けることもできなかっただけなのだ。
それに誰にでもあるよね、黒歴史って。
封印している恥ずかしい記憶の一つや二つ、誰だってあるよね？
まだ、自分の未知なる可能性を信じていた時代。

特別な力を求め、異能に目覚めることを願い続けていた記憶。
かつての自分へと還ってしまう事に対する警報。意図的に忘れ去られた悶絶ものの歴史。
皆もやったでしょ？　自分で考えたオリジナル最強キャラのステータスを考えたり、自分自身に宿るとしたらこんな異能だろうとノートに記したり、果てはテロリストに占拠された学校を想定して、脱出方法をシミュレートしたりとか。
……やばい。
綺鬼の可愛さによって精神崩壊を誤魔化していたが、事細かに思い出すことによって思わず道路工事中のマンホールに飛び込んで一人ゴロゴロと転がりながら悶絶したくなってきた。
「ま、まて！　なら大気が震えるような音や地面が砕けたのはどういうことだよ！」
「あれは『大輔秘密道具その二』で音を出していたのと、地面は綺鬼ちゃんが砕いてくれたからだ」
『大輔秘密道具その二』とは色々な音を録音してあるテープレコーダーである。他にも猫や何かよくわからない怖い生物とかの泣き声も入っています。
茂みなどからの逃走にとても役に立つ道具だ。
そして、空気を読んで地面を砕いてくれた綺鬼の頭をお礼もこめて撫でる。
目を細め嬉しそうに撫でられる綺鬼を見て精神安定をはかる。
「お前……！　俺を騙しやがったな！　なら、なんで人払いの結界がきかねーんだよ！　それにその式神はなんだ！」
「それについては俺が聞きたいくらいだ」
特に人払いの結界。お前には絶望した。
どれだけ俺を一般人から仲間はずれにすれば気がすむのだろうか。
その結果の判断基準について問いただしたい。小一時間ほど問いただしたい。
ちなみに綺鬼は可愛いから問題ない。

もう一度言うが可愛いは正義なのだ。
「くそが！　馬鹿にしやがって！　ぶっ殺してやる！」
怒り心頭といった感じで自身の懐に手を伸ばす青年。
キレやすい十台である。最近の若者は怖い。
「させるか！」
明らかに式神を出そうとしているのを見て、とりあえず少しでも阻止しようと、もはや意地だけで持っていた『新発売デロドロインドジュース改』を投げつける。
たかが缶ジュースだが、それでも当たったら痛いと思ったのか青年は手で払い落とそうとした。
だが、青年が払い落とす寸前に綺鬼の鉤爪が『新発売デロドロインドジュース改』を切り裂き、その中身が青年にかかる。
後で拾って飲もうと思っていたのに……。
「ちっ！　式符が滲みやがった！　お前、これが狙いか！」
「……け、計画通り！」
そう、ここまで俺の思い描いていた展開なのだ。
後で拾って飲もうとか冗談である。
「大さん、大さん。学校でこのジュースを魔法陣にかけたら中途半端な儀式発動になったのを覚えていたんだね。さすがは大さんだよ」
「……そ、そそそその通り！」
綺鬼の此方を見る、親を尊敬するよう綺麗な瞳を見つめ返せない。
このまま押し通すことに決めた。

其の三　5（後書き）

ここまで読んでくれている方なら、こんな事だろうと予想できたかもしれません。
シリアスなんて山田に似合いませんものね。

其の三　6（前書き）

八月二十日加筆修正。

其の三　6

「さぁ、これで自慢の式神は使えないな。戦闘慣れしているお前の方が肉弾戦だけでも俺より強いだろうが、此方には綺鬼ちゃんがいる」

「くそっ、くそが！」

青年が一歩下がる。

俺が一歩進む。

「覚悟はできたか？　半殺し程度では許してやらないからな」

時間稼ぎは充分できたと思う。

後は、おそらく向こうで戦っているであろう土御門に任せても問題はないであろう。あいつはきっと主人公ポジションの人間なのだから。

脇役は脇役らしく、ライトの当たらない舞台袖で頑張らしていただくとする。

拍手喝采などいらない。

特別な力など何も無い俺は、恥も外聞もなく持てる力をすべて使い、目的を達成して見せよう。

「だから綺鬼ちゃん。クソ坊主殴るために、悪いけど力を貸してね」

「大さん、ごめん」

「えっ？」

まさかこの場面で断られるとは欠片も思っていなかった俺は、驚きながら腕の中の綺鬼を見下ろす。

綺鬼はとても疲れた声色で続けた。

「大さん、ごめん……霊力……の……供給が……」

言葉の途中で、空気の抜けるような軽い音を伴い綺鬼は消える。

まさか綺鬼までも、と半狂乱になりながら慌てだした俺だが、掌の中に小さな人型の符があったことに若干落ち着きを取り戻した。

それでも、以前不安は完全には解消されない。
そんな俺を見て、余裕を取り戻した青年が笑う。
「ははははっ！　どうやら霊力切れで式符にもどっちまったみてーだな！　さてどうする？　これでそのガキは主が霊力をこめるまで戦えねーぞ！」
「そうか、とりあえず綺鬼ちゃんは無事ではあるんだな」
綺鬼が死んだわけではないとわかり、不安は解消された。
この青年は、実のところいい奴なのかもしれない。
出会ってから今まで、俺に教えなくてもいい情報ばかり教えてくれる。しかも此方の得になる情報ばかりだ。
「まぁ、そんなことはどうでもいいのだけどな」
呟き、そっと、折れ曲がったりしないように綺鬼の式符をウエストポーチにしまう。
そう、そんな事は関係ない。
俺にとって重要な事は、青年が高橋を殺したという事実だけなのだから。
余計な考えを追い払い、中腰になって目の前の青年に集中する。
「余裕こいてんじゃねーぞクソ坊主。確かに綺鬼ちゃんが居なくなって俺のアドバンテージは無くなったが、それでお前の勝ちが決まったわけじゃないのだからな」
「はんっ、言うじゃねーか。正直、ガキが居なくなった時点でお前なんか無視して長のジジイの所に向かおうと思ってたんだが、やっぱやめだ。お前をソッコーでボコしてから行くことにする」
「……その手があったか」
そうか。綺鬼が居なくなった時点で青年からすれば俺に背を向けて去ったところで脅威はないのだ。
完全に失念していた。また教えてもらっちゃったよてへっ。
だが、青年がこの場に残ってくれたので結果オーライである。
「二度と人前に出れねーような顔になるまでボコしてやるよ！」
「とりあえず……あぁ、くそっカッコイイ台詞が思いつかない

！」
そうお互いに叫び、お互いの敵を殴るため、俺達は同時に走り込み腕を振りかぶった。
いくら相手のほうが戦闘慣れしているとしても、青年は初めから式神に頼るような戦闘を行おうとしていたのだ。
これは自分から肉弾戦には自信が無いと言っているようなものである。
更に青年は見た目からして、喧嘩など経験なさそうな現代っ子でもある。
これはもう無駄に修羅場をくぐり、人外との肉体言語も経験のある俺からすれば、
「中村と高橋の仇とらせてもらうぞ！」
青年の右ストレートを華麗に避け、姿勢を低くしレバーにショートパンチを叩き込む。
相手が前のめりになったところに、その顔面目掛けて膝蹴りを放ち、天を仰ぐカタチになったその顔面に続けざまに右ストレートを打ち込んだ。
数メートルは飛び地面へと倒れこんだ青年に、俺は止めとばかりに鳩尾へと倒れこむように肘を打ちつける。
数度咳き込み、完全に気を失った敵を冷めた目で見下した俺は、何も得る事の無い結果に虚しさだけを感じながらその場を去るのだった。
そんな展開もあり得る。
そう思っていた時期が俺にもありました。
現実は俺フルボッコ。
何か空手みたいな構えをし始めたから「あれ？　おかしくない？　もちろんハッタリだよね？」と、なるべく現実を見ないようにして殴りかかったらいきなり見惚れるような正拳突きを頂きました。
もやしだと思っていたが、実はこの青年、大根だったでござる。
普通こういった場面なら主人公の勝ちで終わるはずなのに、世界

はいつだって脇役に厳しすぎだ。少しは脇役にも代償無しで見せ場をください。
その後も、正拳突きとローキックとハイキックを面白いように喰らって現在ダウン中です。
「おい、まだ意識はあるか？　なくてもいいが、そこで大人しくしてろよ。俺はいい加減長のジジイのところに行くからな」
そう言って此方に背を向け此処から去ろうとする青年。
背を向けているという事は、今の青年は完全に無防備である。言い方を変えれば隙だらけ、というわけだ。
この時を待っていた。
俺は最後の力を振り絞って勢いよく立ち上がり、背を向ける青年目掛けて全力で拳を振るう。
「死ねやコラー！」
「しつけーよコラー！」
「ぺぷし！」
華麗なクロスカウンターを喰らい数メートル吹っ飛ぶ俺。
何度目かの地面との熱いベールを交わした後、憎々しげな目で青年を睨んだ。
「ぐっ、素人相手に何て大人気ないんだ」
「不意打ちかました奴が言う台詞かよ」
「……」
だって、どうすれば殴れるかわからないのだもの。
「つーかよ。どんだけ殴られ蹴られすれば諦めんだよ。お前あれか？　Mなのか？」
「やめろ！　気にしているのだから言うな！　でもMの自分を受け入れ始めた俺もいます」
「気にしてんのかよ！　しかも最後のカミングアウトいらねーよ！　気持ちわりー！」
そちらから聞いといてあんまりである。
でもそんな扱いをうけても挫けないのが俺クオリティ。

震える足に渇を入れ、歯を食いしばりながら気合と根性で立ち上がる。
人外の不意打ち攻撃にも一発は耐えた俺である。くる事がある程度わかっていて、しかも人間の攻撃なら、覚悟を持って喰らえば耐えられる。
だから、次の一撃に全てを賭ける。
攻撃を喰らっても、倒れずふら付かず、足を踏ん張り、敵が攻撃を放った一瞬の隙に一撃を叩き込む。
所謂カウンターである。
素人にできるわけがないと思うだろうが、もう本当に余力が無いのだ。
近づいて殴ることも、避けて殴ることもできないのなら、喰らって殴るしかない。
尚も立ち上がった俺を見て、青年は苦虫を噛み潰したような表情で言う。
「マジでいい加減寝てろよな。これ以上は手加減もできねーぞ」
「何だ……手加減してくれていたのか。見た目に反して……優しいんだな」
「……死んどけ」
「悪いが……お前を一発殴ってからだ」
俺が答えると同時に、青年が正拳突きを放った。

其の三　7（前書き）

すみません。
切りのいいところなのでいつもより短いです。
八月二十日加筆修正。

其の三　7

同時に歯を食いしばり、腹筋に力を入れ、腰を落とし拳を握り締める。
一瞬のチャンスを見逃さないために、目を見開き迫る拳を睨みつけた。
数瞬後、青年の拳が顔面に突き刺さる寸前に、交差するように此方も拳を突き出す。
そして、お互いの顔面にお互いの拳が突き刺さった。
「らぼすっ！」
訳もなく、ただ俺だけが拳を喰らって吹き飛んだ。
当たり前である。カウンターなどという高等技術を俺ごときが使えるわけが無いのだ。
それをぶっつけ本番でやろうとした俺が愚か過ぎるだけである。
ゴロゴロと数回転して、仰向けで止まる。
ただ、敵を一発殴るだけのことすら達成できないとは、自分の事ながら情けなさ過ぎて泣けてきた。
欲張らずに中村と高橋の仇を合わして一発殴るだけで満足するつもりだったのに、その一撃すら無理とか、どれだけ世界は俺に対してドSなのだろうか。
だが――
「あぁくそっ。だけど、それでも……お前の邪魔だけは成し遂げたぞ」
「あん？」
狂風が巻き起こる。
全てをなぎ払わんとする、凶暴な風が辺りを吹き抜けていく。
「なんだ？」
その発生源に青年が慌てて振り向いた。
その視線の先。巨大な光の柱が立ち上る場所。

「失敗……したのか？」
その光の柱の方角から、荒れ狂う強風が吹きつけ、続いて光の柱を飲み込み赤く燃え上がる紅蓮の炎が立ち上った。
狂風は熱気をも伴い始める。
光の柱は完全に炎の柱へと成り代わってしまった。
呆然と立ち尽くす青年を視界の端に収めながら、俺は地面に横たわったまま笑う。
「あーはっはっはっはっ！　ざまーみろ！　お前らの計画とやらは失敗みたいだな！」
「だまりやがれ！　まだだ！　まだ俺が行けばわからない！」
「いいかげんお前こそ諦めやがれ。俺に付き合った時点でお前は舞台の中心から転げ落ちてるんだよ！　しかも、舞台袖からも退場のお時間みたいだぜ！」
「んだと？」
俺が指差す先にその男はいた。
黒の短髪に精悍な顔立ちをした、三十代と思われる男性。
いったいいつ其処に現れたのか。まるで俺が瞬きをした瞬間に現れたが如く、いきなり視界に存在していた。
それは青年も同様のようで、炎の柱に気を取られていたとはいえ、男性の登場には驚きをあらわにしている。
そんな俺達を険しい表情で見渡した後、男性は静かに口を開いた。
「倉橋泰真（くらはしたいま）だな。すまないが此処は力ずくで拘束させてもらう」
「……くそが。何でこんな所にお前が居やがる……土御門晴夜！」
にらみ合いを始める二人。
そんな二人をねっころがりながら眺めていた俺だが、ふと思った。
これはチャンスではなかろうか？　と。
今頃になって名前が判明した青年こと倉橋……なんとかは男性のみに集中している感じである。
これなら、こっそり忍び寄れば殴れそうであった。
「と、いうわけで思いついたが吉日。考えたら即実行だ」

限界を超えている体だが、ドＭ魂で立ち上がりすり足、差し足、忍び足で倉橋なんとかの背後に忍び寄る。
悲鳴を上げる体に快感を覚えながら拳を振り上げ、
「今度こそ死ねやコラー！」
「マジでしつけーよコラー！」
「デジャブ！」
振り上げた拳を振り下ろす前に、倉橋なんとかが振り返り拳を振るってきた。
まさかの、先ほどと同じ展開である。
不味い、と思う間も無く迫る拳。
全快時ですら避けれなかったのだから、今の俺ではどうしようもない。
俺だけでは、ただもう一度殴り飛ばされる結果しか残らなかったことだろう。
だが、現実は倉橋の拳が俺に届くことは無かった。
俺の眼前で、小さな手に受け止められることによって。
「大さんは、私が守るよ」
「クソガキが！」
「綺鬼ちゃんマジ天使！」
いつの間にか俺におぶさっていた綺鬼が倉橋の拳を受け止めてくれた僅かな時間に、倉橋の懐へと体を滑り込ませ、すくい上げるように拳で顎に叩き上げた。
俺のアッパーを防御することもできず、モロに喰らい後ろに引っ張られるように倒れていく倉橋。
俺もいいかげん立っていることも辛く、拳を振りぬく勢いを殺せもせずに、そのまま前のめりに倒れた。
結果、倉橋に覆いかぶさる俺に、覆いかぶさる綺鬼の図が出来上がりました。
なにこれ？　誰得？　また同人誌増えちゃうの？　そしてあの男性はなぜ最後まで静観し続けたの？

そんな事を考えながら、とりあえず一発殴れたことに満足し意識を手放す俺だった。

何とも締りがなく、格好もつかない俺らしい終わりかたである。

其の三　7（後書き）

仕事場の近くに引っ越したいです。

エピローグ（前書き）

一先ず完結です。
八月二十日加筆修正。

エピローグ

今日は果たして何曜日だったか？　と俺はベンチに座りながらふと考える。

ここのところ色々とゴタゴタしすぎていて、曜日感覚すら曖昧となっていた。

その事を電話越しに伝える。

「今日って何曜日だっけ？」

『金曜日だよ。期末テスト終わっちゃったから、たぶん大輔は夏休みに補習だね』

「泣ける」

『進級できなくなっちゃうかもしれないから、ちゃんと受けないとダメだよ。それよりも、何があったの？』

「懲りもせず怪我して、そっち系の組織とか関係している病院に居ます」

『もう、僕は本気で心配しているんだからちゃんと理由を話してよ』

「むしろ俺のほうが、自身が怪我をしなくてはならない理由を詳しく知りたい。ほとんど何も知らない上、怖い人達に『この事は私達との秘密だよハート（殺）』と言われているから、たとえ武が相手でも言えない」

『そうなんだ……むー、仕様が無い。二度とこんな事がないように、これからは四六時中僕と一緒に居ようね』

「なに怖いこと言ってんの？」

『だって、大輔ってば僕と居ないときばっかり危ない目にあうんだもん』

「もんとか言うな。そして、そういった発言はやめろ。お前も一度あれらの本を見たほうがいい」

『そう言えば大輔。大輔の机に小さな女の子が居るんだけど、知

ってる？』
「あれ？　スルー？　えっ？　武が俺の話をスルー？」
『肩くらいまでの黒髪で、赤い着物を着ている女の子だよ』
「嘘？　マジスルー？　理由考えるの怖いから今の展開はなかった事にする。えーと、その子はたぶん綺鬼ちゃんだわ。どこにも居ないと思ったら、まさか学校に居るとわな。武は普通に視えるのか？」
『うん。他の人には視えてないみたいだけどね』
「お前も大概チートだな」
『そうでもないよ。この子は綺鬼ちゃんでいいのかな？　この子からは大輔に対する悪意とかを感じないけど、どうするか一応大輔に確認を取っておこうと思ったんだ』
「綺鬼ちゃんは悪い子ではないから、放って置いても大丈夫だと思うぞ。ところで綺鬼ちゃんは何をしているんだ？」
『わかったよ、とりあえず様子見だね。綺鬼ちゃんは大輔の机を漁ったり、机にお絵かきしたりしているよ。それで、クラスメートから見たら物が勝手に浮いたり大輔の机に突然奇怪な絵が浮き出たりするから、皆大輔のこと気味悪がってるね』
「綺鬼ちゃんにお話があるから俺のところへと来るように言っといてくれ」
『了解、伝えておくよ』
「あぁ、それと武。工藤って実は男だぜ。所謂オカまぶし！」
後頭部に衝撃が奔りベンチから転げ落ちる。
それと同時に携帯を奪われ、
「違うよ武君！　ぼくは男なんかじゃないからね！　えっ？　大輔が言ったことを信じる？　まって武君！　なんでそんな無条件にあの変態の事を信じるの？　ちょっとまって！　すぐに戻るから話し合おう！」
工藤が叫びながらどこかへと走って行った。
おそらくは武が居る学校へと向かったのだろう。誤解を解くつも

りなのだろうが、無駄な努力である。武が俺の言ったことを疑うわけがない。
それにしても、工藤がいきなり現れたときは驚いたものだ。
仮にも裏関連の病院なのに、武が俺と話したがっているという理由で、工藤は『適当』に歩き回り俺が居るこの病院を見つけてしまったのだから。
もはやあいつは超能力者だと思う。
転げ落ちた芝生に寝転がりながら、夏の日差しに目を細めた。
俺が今居る場所は、木々が生い茂る緑豊かな庭園である。
ここは搬送先の病院にある中庭だ。病院自体も大きいので中庭もかなり広く、綺麗だった。
見上げた太陽の位置から見るにちょうど昼間だろうか？　暖かい日差しに、最近めっきり感じることのなかった自然の空気。なんとも癒される、心地いい場所だ。
そんな緑に囲まれた中庭で、自分と同じ入院用の服と思われるものを来た人達がちらほらと視界に入る。皆、のんびりと日向ぼっこや本を読んだりしていた。
しばらくそんな光景を何ともなしに眺めていると、視界に見覚えのある二人組みが入ってきた。
特徴的な二人組みである。一人は黒髪ロングに巫女服の女の子。もう一人は右手と両目に包帯を巻いた男。
二人は中睦まじげに、お喋りしながら中庭を歩いている。
そんな二人を見て、この『事件』は終わったのだと何となく確信した。
楽しげな様子から、どうやら彼らにとってはハッピーエンドだったようだ。
その影でバットエンドを向かえた人も、当たり前のように居るのだろうが。
だが、どちらが正義だったのかもわからない俺にとっては、どうでもいいことである。

なぜなら、山田大輔は主人公ではないのだから。
所詮脇役でしかない俺が、それらの事を気にしても仕様が無いのだ。
俺が何もしなくても、世界は廻り続ける。
しかし、俺が過去と現実から目を逸らし続ける限り、世界は歪み続ける。
それでも誰かが許してくれているうちは、このまま愚者のように生きていこう。

エピローグ（後書き）

まずはここまで読んでくれた方、こんな駄文に付き合ってくださり有難うございました。
これにて第一章完結です。なので一先ず完結にします。
次は何を書くか決めていませんが、そのうちまた何か書き始めたいと考えています。
それが第二章になるか、またはまったく別の物語になるかはわかりません。
第二章の場合は、完結を解いて続きとして書き始めると思います。
何か書き始めたら、どうしようもないほど暇で何も時間を潰すものがなければ読んでやってください。

プロローグ（前書き）

第二章開始です。

プロローグ

――人生は儘ならないものだよ。

何かうまくいかない事があると、彼女はよくそう口にしていた。

かつてのまだ子供過ぎた時期は『そんな事はない』と考えていたこともあるが、精神的に少しは成長した今の俺は『その通りだ』と素直に頷ける。

今まで生きてきて、思い通りにならず不自由を強いられることなどいくらでもあった。

この世界はいつだって、情け容赦がなく理不尽なのだ。

勿論、すべての人がそう感じているはずだ、とは言わない。

人の数だけ人生があるのだ。中には自分の思い描いたとおりの人生を楽しんでいる人も居るだろう。

それは、テレビや新聞に少し目を通してみればすぐにわかる。

今この瞬間ですら、罪もない子供達が死に醜く太った大人達が笑っているのだ。

平和大国と言われている日本で生まれ育った俺には、多くの子供達が死んでいく現実など知識でしかわからないが、それでも無責任に怒りを覚えることがある。

そして、そんな事はすぐに忘れるのだ。

怒りを覚えたとしても、決して何も行動には起こさない。

どんなに理不尽なことが起きていても、どれほど無情な仕打ちが行われていても、結局のところ他人事でしかないのである。

手の届く範囲であっても手を差し伸べるかどうか迷ってしまうかもしれない俺が、届かないどころか視界に入ってさえいない存在にわざわざ手を貸すわけがない。

彼女は、それが普通だとも言っていた。

――助けたくない、というわけではないんだよ。

――助ける術がまったくない、というわけでもないの。

――ただ、助ける勇気がないだけなんだよ。
おそらくその通りなのだろう。
誰だって自分が（中略）と、いうわけで『魔法少女ケミカルこのは』の話になるわけだが、簡単に内容を説明すると『突然、地球を侵略しにきた高次元存在から地球を守るため、世界を見守り続けてきた同じく高次元存在から力を授かった少女が戦う、大きいお友達向けのアニメ』である。
キャッチコピーは『発達しすぎた科学は魔法と変わらない』なのだが、俺の記憶違いでなければ科学はケミカルではなくサイエンスのはずだ。おさらく、語呂がいいという理由かなんかでケミカルにしたのだろう。
まぁ、そんなことは本編が面白いのでどうでもいいのだが。
実はこのアニメ、かなり俺のお気に入りである。
自他共に認められているであろうロリコンである俺の、ストライクゾーン直球ど真ん中にきた近年まれに見る良アニメだ。
先日も寒い財政事情を省みず限定版ブルーレイＤＶＤＢＯＸ（通常版とセット購入）をネットで購入し、補習で学校に行っている間に配達員が来てしまったため妹が受け取ってしまい、そのままオークションに出されそうになるという事件があったが、俺は何一つ後悔していない。
このはの可愛さを持ってすれば、そんな些細なことすぐに忘れることができる。
早いところ土御門の家を捜しだして、このはの良さを知ってもらたいものだ。
土御門だって一度でも『魔法少女ケミカルこのは』を見れば、すぐにこのはの虜になってしまうだろう。包帯の関係で見れるかどうか少し不安だが、そこらへんは心に直接響くこのはの魅力で問題ないはずである。
本編を見終わった後、共にこのはの良さについて語り合いたいものだ。

自慢になってしまうかもしれないが、俺はこのはについてなら三日は寝ずに語れる。
いつ、どんな場所だろうと語り始めることができる。
そうだな。今、少し触りだけでもこのはの魅力について語っておこうか。
まず、何といっても主人公であるこのはの可愛（中略）さて、そんな魔法少女大好きである俺だが、残念なことに今まで現実の魔法少女に会ったことがなかった。
俺の『才能』を持ってすればいつかは会えるのではなかろうか、と期待していたのだが高校生になった時に、さすがにもう年齢的に無理かもしれないと半分ほど諦めていた。
ちなみに異世界で会った魔道士は違う。あれは魔法少女ではない。断じて俺は認めない。
あんなフード被って曲がった杖持った奴は、魔法少女ではなく魔女である。少女ではなくババアだ。なんてことが口に出ていたらしく、対象を凍らせる魔法で殺されかけたが俺は発言を撤回する気はない。
そもそも魔法少女というのは、完全無敵であるこのはを例として話すと（中略）だが、遂に念願叶う時がきたのである。
「Ｇｙａａａａａ！」
「プリムラソード！」
頭に響く耳障りな獣の咆哮と、聞きほれてしまいそうな凛とした少女の声が辺りに響く。
鋭い牙と爪を使い少女を切り裂こうとする黒き獣と、青みがかった髪と同じ色の可愛らしい服を翻し魔杖を剣に変え迎え撃つ少女。
まるでアニメの世界に迷い込んでしまったかのような目の前の光景に、思わず現状を忘れ見とれてしまう。
今まで多くのことに巻き込まれてきたが、こんなにも心躍る『事件』は初めてだった。
何て事を僅かばかり考えていたが、獣が爪を振り下ろすたび家屋

が布キレのように吹き飛んでいくのが目に入り意識が現実へと強制的に戻される。
あんな威力の攻撃を喰らったら、俺でなくてもひとたまりもないだろう。
こんな所にただ突っ立っているなど危険すぎる。
だが、まだ良くて中学生ほどの少女を見捨てて逃げるなど、さすがの俺もできないこともなくもないかもしれなくもないと思っていた時期が俺にもありました。
已むを得まい。
いつか魔法少女に会った時のためにと、魔法少女とイチャつくまでの過程をシミュレートしまくってきた予習の成果を今こそ見せるときである。
――検索開始。
――ヒット。
――該当データ展開。
一。ピンチの魔法少女を助けて、俺『大丈夫か？』魔『好きです！』俺『ではホテルに行こう』。
二。ピンチの魔法少女を助けて、魔『あなたは誰ですか？』俺『名乗る名などないさ』魔『これ婚姻届です！』。
三。ピンチの魔法少女を助けて、俺『フッ（キメ顔）』魔『かっこいい！　脱いで！』俺『もう脱いでいるさ（ドヤ顔）』。
……。
――データ破棄しました。
これらを考えたときの俺は、いったいどれほどまで心を病んでいたのだろうか。
突っ込めないところがないほど、破綻しまくりの三段論法である。
エロゲーやアダルトビデオですら、このような超展開はないであろう。
そもそも前提条件である、魔法少女を助けた後というのが無理ゲーだ。

あんな化け物と戦うとか無理っす。俺、中型犬にすら勝てる自身ないっす。

そして日本が平和とか言ったのどこのどいつだよ。こんなのが一般住宅街に生息している国のどこが平和なのか俺に説明しろ。

「はぁぁぁ」

大きくため息をつく。幸せが逃げるというが、まだ俺に逃げるほど幸せが残っているのか疑問である。

結局いろいろ考えたところで、いつも通り俺にできることなどないみたいだ。

勇気がない俺は、ただ彼女が勝つことを祈るしかない。

本当人生ってのは儘ならないものだ。

プロローグ（後書き）

忙しいので執筆速度は大幅に落ちると思います。
どうしようもなく暇なときにでも覗いてみてください。更新しているかもしれませんので。

其の一（前書き）

ひっそりと更新です。
毎度の事ながら中途半端ですみません。

其の一

世間一般の方々は、夏休みをどうお過ごしだろうか。
おそらくは、多くの方が初日から何処かに出掛けたり友人達と遊び過ごすのであろう。
友人宅でゲームをするのも良し。普段行けないような遠出をするのも良し。
プールに行ったり、海に行くのも夏ならではの遊び方だ。
どうやって限界まで遊び倒すか、頭を悩ますのが夏休みというものなのだろう。
まぁ、俺こと山田大輔（彼女居ない暦＝年齢）には関係ないことだが。
夏休み始まって四日。
普段と違うイベントが、補習しかありませんでしたが何か？
遊びのお誘いとか、一度もきていませんけど？
え？　友達？　なにそれおいしいの？
……だめだ……自分で自分を追い込んでいる。しかも二度ネタだ。
俺だって、夏休み前はいろいろ夢想していたのだ。
友人宅に泊り徹夜でゲームをしたり、数少ない友人を誘ってプールに行ってみたり、近くでもいいから旅行にも行きたいな、とか考えていた。
それなのに、現実はぼっちである。
連絡の取れる友人には連絡したのだが、俺の数少ない友人達はそれぞれ何らかのイベントが起きてしまい俺に付き合っている暇はないそうだ。
それでも武だけは俺を裏切らないと思っていたのに、夏休み初日に異世界へと拉致られてしまった。
もう、姫も魔道士も大嫌い。
綺鬼も土御門たちに連れて行かれちゃったし。何か修行とか言っ

てたから、確実に『事件』が起きるフラグだろう。
そんなものには誘われても行きたくない。
……ごめん、嘘ついた。
正直に言うと、綺鬼は連れて行って俺は誘ってもくれなかったことに軽くショックを受けていたりします。
いくらMの俺でも耐えられることと耐えられないことがあるのだ。
このままでは、夏休みネトゲーだけで終わってしまうかもしれない。まだ四日しかたっていないのにそんな危機感すらわいてくる。
始業式の日、皆が健康的に日焼けしている中、俺だけが病的に白くなっていた、とか嫌過ぎだ。
このままではマズイ。何かマズイ気がする。
そうして意味不明な焦燥感と、寂しさを紛らわせるため夜の散歩へと繰り出したのだが、これが大失敗。
人の気配がなく、静かな住宅街は孤独を強調させるだけだった。
越してきて一年半。もう見慣れたはずの町並みも今はどこか知らない町のように見え、世界に一人っきりになっってしまったかのように感じ泣きたくなってきた。
ただ歩いていただけなのに精神に多大なダメージを受け、ふらふらと近くの公園に向かう。
リストラされ人生に絶望したサラリーマンのように俯いてブランコに座り、何か俺にも夏休み特有のイベントが起きないだろうか、と考えていたら――
「Ｇａｒｕｒｕｒｕｒｕ」
「いや、もうね。こういうの夏休み特有じゃないから」
――目の前に突然、黒い獣が現れました。
間違ってもこんな事は望んでいない。
確かに寂しかったけど、こんな優に俺の三倍はあるわんこと戯れたいとも思っていない。
はい、きたよこれ。
また何かに巻き込まれたみたいだ。

このパターンはあれに似ているな。よく物語の最初とかにある、名前すら出てこない一般人が主人公の敵となる存在に殺されるシーンとかに。所謂プロローグってやつ。

自分で言うのもなんだが、俺にぴったりな役所である。遂に泣けてきた。

できることなら犠牲者Ａとか第一犠牲者などは勘弁してもらいたい。ストーリーテラーさん、主役になりたいとか高望みはしないのでどうか生存させてください。

「Ｇａｕ！」

「お前、今ヤダって言っただろ。絶対言っただろ」

黒い獣の鳴き声で現実に思考を戻す。今更俺にバウリンガルが搭載されても嬉しくも何ともない。

さて、お得意の現実逃避によって少しは冷静さを取り戻せた。そろそろ真剣にいこう。

生き残るために脳みそをフルスロットで回転させる。

明日の朝日を眺めるためには、目の前で鼻息荒く此方を見ている黒い獣を何とかしなくてはならないのだが、どうしたものか？

目の前で逃げだしたところで、獣の脚力に勝てるわけがない。戦ったとしても、これもまた獣に勝てるはずがない。

つまり詰みである。

脳みそをフルスロットで回転させた意味がなかった。いつもながら、そもそも考えられる選択肢が少なすぎる。

しかし、ここで諦めるのは普通の脇役。

だが、俺は訓練された脇役。

「そぉぉぉい！」

「Ｇａ？」

俺は足元の小石を全力で遠くに投げた。

この黒い獣は見た目から考えて、おそらくはイヌ科であろう。それならば、俺が投げた小石を本能的に追ってしまうはずだ。そうすれば逃げる時間を稼げるかもしれない。

先日の経験を活かしてみせる。脇役だって学習するのだ。
目論み通り黒い獣は小石に興味を示す。ブランコに座った状態だったのであまり飛距離は出なかったが、俺の投げた小石は公園の茂みに飛んでいき、
「きゃうっ」
可愛らしい声が聞こえた。
「あわわわわっ。変身する前に見つかっちゃったです！」
あわわわわっ。茂みから小さな女の子が頭を押さえながら出てきちゃったです。
ないわ。
黒いわんちゃん、四肢を屈め少女に駆け寄る五秒前。
「わっ、わっ！　大変です！　我が『願い』を魔法の力に！」
少女が何かを翳しそう叫ぶと、突然少女を中心として辺りに光が満ちた。
暗闇の中、青白い光に目をやられながらも手をかざし見ると、少女の衣服が消え胸元に浮いている宝石のようなものからリボンが飛び出し少女の体を覆っていく光景が視界に映る。
「この展開は……まさか」
夢にまで見た魔法小――
「Ｇａａａ！」
「きゃぁぁぁ！」
「空気読めよわんころ！」
黒い獣が口から火の玉のようなものを飛ばし、変身途中の少女を攻撃した。
直撃はしなかったものの、中途半端にしか衣服を纏えていない少女は爆発の余波で吹き飛びころころと転がっていく。
まさかの変身途中で攻撃。悪の親玉ですら、そこは空気を読んでヒーローの変身を見守ってきたというのにこのわんこは。
現実的に考えれば、あんな隙だらけな敵を攻撃しない方がおかしいが。

其の一（後書き）

二度寝の贅沢さといったらないですよね。

其の一　2

「てっ！　そんな悠長に考えている場合じゃない！」
黒い獣は少女に脅威を感じたのか、牙の隙間から火の粉を散らし二射目の準備に取り掛かっていた。
この場で、あの少女を失うのは精神的にも俺の生存確率的にも厳しい。
「させるか！」
ブランコから飛び降りて黒い獣の胴体にタックルをかます。
少しは効いたのか、僅かにふら付き此方に視線を向ける黒い獣。
ならこのまま攻め続ければ、あるいは何とかなるかもしれない。
続けざまにその腹部目掛けてアッパーを放つ。
「胃袋の中身をぶちま「Ｇａ！」けろんぐ！」
案の定幻想だった。俺の優勢ターンなどあるわけもなく、もふもふの尻尾で叩かれ結構吹き飛ばされる。もはやお決まりのパターンである。
もふもふしていたのは外側だけで、中身は筋肉もりもりのようだ。大分痛い。
だが、不幸中の幸いか少女の近くに叩き飛ばされた。
自身の耐久力と精神力にモノを言わせ跳ね起き、起き上がろうとしている少女に駆け寄る。
「おい！　大丈夫か？」
「世界がぐるぐるしているですぅ」
どうやら無事と判断しても問題なさそうだ。目を回している少女を急いで抱き寄せ、全力で横に飛ぶ。
直後、俺達の居た近くで爆発が起きた。
「くっ！」
「きゃぁ！」
爆発の余波で数度地面を転がる。

直撃は間逃れたものの、襲いくる熱波と地面との接触から少女を守るため、その体を抱え込み耐える。
数秒後、爆発の余波が収まると、すぐに黒い獣へと視線を移した。
黒い獣は少女を警戒してか、遠距離攻撃で此方を仕留めるつもりのようだ。再び火の粉を散らし、火炎弾の準備に取り掛かっている。
二度打って仕留められなかったからか、先ほどよりも多く炎を溜めているように思える。
変身中の少女を攻撃し、今も此方を警戒していることから大分用心深いようだ。
なら、まだ対応のしようがある。
「あ、あの――」
「驚くほど余裕と時間がないから要点だけ聞かせてもらうよ」
少女の言葉を遮り問いかける。
「君は変身できればあの化け物に勝てる？」
「えっ、えーと、その……はい！　勝てるです！」
「オーケー。なら俺が一瞬だけでもあいつの注意を引き付けてみせるよ。その間に変身してね」
「そんな！　危ないです！」
「言っただろう。問答している場合じゃないんだ」
俺はそう言って、庇うように少女の前に立った。
少女に言ったように、余裕も時間もない。
先ほどの爆発音はかなり近隣に響いていると思われる。夜遅いとはいえ、いずれ野次馬が集まってきてしまうだろう。
そうなってしまったら、被害は計り知れないものとなってしまう。
解決できるであろう少女に、早く終わらせてもらうしかないのだ。
囮が増えれば少女を抱え逃げられるかもしれないという考えも過ぎったが、さすがの俺もそれはしたくないと思える倫理観はある。
「――倫理観はある……か」
そんな事を考えていながら、俺は自分が助かるため、こんな小さな少女に危険なことをさせようとしているのだ。自己弁護も甚だし

い。
胸中で舌打ちする。
抱えた少女は小さく軽かった。背は俺の胸元までないかもしれない。
おそらくは、まだ中学に届くかといった年齢だろう。
そんな幼き少女に肝心な部分を任せるしかない自分が俺は嫌いだ。
そして何より俺をイラつかせているのは――
「くそっ、肝心な部分が見えないとは」
少女が纏う衣服が、うまい具合十八禁にならないよう中途半端に纏われていたことだった。
あの犬っころがもう少し早く攻撃していれば、いやむしろ俺が変身中の少女に特攻していれば……。
悔やんでも悔やみきれなかった。
そんな事で本気で悔やめる自分が俺は嫌いではない。
今回はドサクサに紛れ少女に抱きつけた事で我慢することにする。
役得、役得。
俺には倫理観があるどころか、それの結構重要な部分が欠けていた。
「まぁいい、後悔は後でするものだ。今はこんな可愛い子の前だからな。少しは格好付けさせてもらうぞ」
そう呟き、俺は『大輔秘密道具その八』を取り出した。
それは防具の役割も持つブラと、腰に着けるアクセサリーから前後に長い布を垂らした――そう、踊り子の衣装である。
瞬間、確かに時が止まった。
少女のきょとんとした気配が背後ごしながら伝わってくる。黒い獣すら呆然としているようだ。その証拠に今の今まで溜め込んでいた炎が霧散していた。
気まずい静寂が辺りを包み込む。
なぜだか、無性に謝りたい気持ちが心の底から湧き出てきた。
言い訳に聞こえるかもしれないが、決して俺はウケを狙ったわけ

ではない。寧ろ大真面目である。
いらない。『シリアスブレイカー』とかそんな二つ名いらない。
これでも俺と少女が助かる方法を必死で考えた結果なのだ。ない頭を懸命に使って導き出した回答なのである。
なので迷わず実行に移させてもらう。
俺は少女と黒い獣が現実を受け入れきれていない隙に、いそいそとその場で着替え始めた。
少女に対し背を向けた格好だが、年端もいかない少女の目の前でパンツ一丁になっていると考えると興奮を禁じえ――冗談です。俺は真剣です。
ただし、真剣に興奮しています。
そうして着替え終わった俺は、誰が見ても通報確実な変態だった。

其の一　2（後書き）

先日、仕事でミスをしてしまいその事を部署の先輩に謝りに行きました。
ミスを報告したら、突然先輩が奇声をあげ手足をくねくねさせる奇妙な走り方で何処かに行ってしまいました。
もう何か、いろいろとダメかもしれないと思いました。

其の一　3（前書き）

前話より少しだけ長いです。

其の一　3

女の子が着ていれば凝視してしまいそうなエロ可愛い衣装だが、男の俺が着ていたら褌にブラ着けた可哀想な人である。
そんな奴が奇抜な踊りを始めたとなったら、誰しもが注目せざる終えないだろう。
そしてそれは、たとえ獣であっても変わりはしない。
異世界の魔獣ですら、僅か動きを止めてしまった俺の踊りを見せてやろう。
『山田大輔の不思議な踊り』
もしテロップが出るとしたら、こんな感じだろうか。
俺は自分でも気色悪いと本気で思える科を作りながら、腰をくねらせ踊り始めた。
そんな俺を黒い獣は、どこか困惑したように見つめている。
その様子を見て俺は確信した。
――勝った。
珍しく、本当に珍しくこれは俺の作戦勝ちだと言い張れる。
黒い獣よ。用心深い本能が仇となったな。
此方を警戒しすぐに行動に移さず、俺の踊りを目にした時点でお前は終わりだったのだ。
そのキモさとウザさから敵を困惑させ注意を引き付けるという点において、俺の踊りは類まれなる効果を発揮する……はずだ。
これでお前は俺から目を逸らせず、数瞬待たず少女から完全に気を逸らしてしまうだろう。
現にこの瞬間、黒い獣の注意は少女から俺に集約したように感じた。
今だ。
そういった想いを込め少女にアイコンタクトを送る。
俺の踊りは、あくまで僅かばかり敵の注意を引き付けることしか

できないのだ。そろそろ黒い獣も困惑から覚め、常軌を逸したあまりのウザさに攻撃をしかけてくる頃だろう。ちなみに俺の羞恥心も限界が近い。

そういった諸々の事情を込めた俺のアイコンタクトを受け取った少女は、

「あわわわわ」

両手で顔を覆い隠し、真っ赤になりながら指の隙間から俺を見ていた。

あわわわわ……。

敵味方無差別判定を持つ俺の踊り。

そういえば、少女に俺のことを見るなと言っておくのを忘れていた。

先ほどの興奮していた俺をグーで、いやパーで殴りたい。

思い出すは、俺の踊りに気を取られ魔法を暴発してしまった魔道士の姿。

そして魔道士に凍らされる俺。

今でも納得できないのだが、俺の事を見ていたら集中できないと知っていて、その上で此方を見ていたのだから俺が怒られるのは理不尽だと思う。

あれは魔道士の自業自得だ。俺が攻撃される謂れはないはずだ。

「そこのところ、わんこはどう思う？」

「Ｇａａａ！」

「あっつい！　待って！　素肌多いから熱気でもやばいって！」

返答は火炎弾でした。

危なかった。ブラがなかったら今ので死んでいた可能性もある。

ただ地面に置いてあった俺の普段着は犠牲になりました。

また、先ほどから考えるに火炎弾の命中率はあまりよくないようだ。

その事に黒い獣も気がついたのだろう。遠吠え一つ、遂に此方へと踊りかかってきた。

もちろん逃げます。
戦って勝てないことはわかっているし、三十六計もないが逃げるが勝ちともよく言われている。
幸い黒い獣も標的を俺に絞ってくれたようなので、少女が逃げる時間程度は稼いで見せよう。あの子が戦うことに、もう俺は期待していない。
それでも、俺は絶対に小さい女の子は見捨てないのだ。
だから、少しでも黒い獣をこの公園から遠ざけ、人気のない場所に連れて行く。
後は、その間に救援が来てくれる事を祈るだけだ。
俺に出来ることなど、その程度しかない。
「こいつが俺に気を取られている間に君は逃げろ！」
少女の方を見る余裕もなくそう叫び、恐怖に竦みそうになる足腰に喝を入れ、黒い獣に背を向け駆け出した。
願わくは、少女だけでも助かりますように。
……。
わかってはいた。心の片隅で、どうせこうなるだろうと。
それなりの長さ生きてきたのだ。自身の行動によってどういった結果になるか、経験的にも確率的にもある程度答えは導き出せる。
例えば、俺が落ち込んでいれば武は励ましてくれるし、俺が笑っていれば武も笑っている。
俺がこのように動けば、武はこうやって動く、と予測ができるのだ。
『物語』の主人公ならば、例えの相手として女の子が出てくるのだろうが、そこは俺なので勘弁してもらいたい。
まぁ相変わらず俺の例え話が微妙で的を得ていないのは置いておくとして、つまり何が言いたいかと言うと、俺のこう言った気合を入れた台詞は大抵失敗フラグだった。
「公園出て五秒持たないとか最速すぎる！」
「Ｇａ！　Ｇａｕ！」

黒い獣に背を向け走り出し、公園の出口を出て住宅街をいざ駆ける、といったところで組み伏せられました。
こいつ速すぎる。故高橋を見習ってください。
「お前！　少しは手加減しやがれ！　てっ、ちょっタンマ！　やめてっ、喰わんといて！」
「Ｇａｕ！　Ｇａａａａ！」
「がっ！」
必死に手を振り回し抵抗していたが、前足で胸を踏まれ動きを封じられる。
マジ捕食五秒前。
凄惨な結末しか見えない。
だが、こんな見るからに化け物が相手なら仕様が無いだろう。誰が見たって勝てそうにないのだから。
必死に抵抗し、無様に足掻いて、それでも無理で虫けらの様な最期を迎えたのならきっと――
「プリムラキーーーーク！」
「Ｇａｈｕ！」
少女の声に続いて衝突音が響き、それに伴い仰向けに押さえ込まれていた俺の上から黒い獣がスライドし飛んでいった。
突然の事に起き上がることも忘れ、それを見る。
そして視界から黒い獣が消えた俺の眼前には、淡く光を発す青みがかった髪と、同じ色の可愛らしい服を纏った少女が浮いていた。
パンツ丸見えの飛び蹴りの格好で。
パンツ丸見えの飛び蹴りの格好で。
パンツ丸見えの飛び蹴りの格好で。
あまりに大事なことなので三回言いました。
結構な距離吹っ飛んでいった黒い獣を見て、慌てた表情でパンツが……少女が駆け寄ってきた。いや、浮いていたから飛び寄ってきたか？　どうでもいいか。
「お兄さん！　大丈夫ですか？」

「眼福によって全回復したから問題ないよ」
「？　眼福ですか？」
「君は知らなくていいことだよ」
知られたら俺が御用でござる。
魔法少女を見てテンションが上がっていたのか、この少女に出会ってからいろいろ酷すぎるので少しは自重しなければ。
俺の言葉を受け「？」を頭上に浮かべていた悩んでいた少女だが、再び慌てた表情に戻りぱたぱたと両手を振りだした。
おそらくはそんな場合ではないと気がついたのだろう。そのまま今のやり取りは忘れてもらいたいものだ。
「わっ、わっ！　悩んでる場合ではなかったです！　お兄さん！　わたしが今から結界を張ってあの魔獣を隔離します！　お兄さんにはわたしと魔獣が突然居なくなってしまったように見えると思うのですが……」
そこで一旦言葉を区切り、ぱたぱたと振っていた両手でスカートの端を握り締め、
「ここで待っていて欲しいのですよ。大切なお話があるのです」
一瞬。泣いているように見えた。
すぐに此方に背を向けてしまったので確証はないが、俺にはそう見えたのだった。
少女が何を思ってそのような表情を浮かべたのか俺には知る由もないが、大切なお話とやらは想像できないこともない。
それは、この『事件』についてだろう。
巻き込まれたのか、巻き込んでしまったのか少女がどう考えているのかはわからないが、今後の見の振り方について教えてくれるに違いない。
今から結界とやらを張って黒い獣と戦う様子の少女を、手伝うどころか見守ることもできないのはとても心苦しい。
だが、俺が少女の傍に居ても少女の足を引っ張る確立が百五十パーセントである。一度足を引っ張ってまた足を引っ張る確立が五十

パーセントの意味で。
なので、大人しく此処で少女の無事を祈り続けるのが正解なのだろう。
そう、深夜の住宅街で。この踊り子の衣装で。
少女から大切なお話しを聞く前に、お巡りさんから人生に関わる大切なお話をされる可能性が高かった。
なるべく早く勝ってくれることを切に願いながら、少女の小さな背中を見る。
少女は俺に背を向けたまま、その手にどこか機械チックな杖を出現させた。
それを黒い獣が飛んでいった方向に向け、何か呟く。
瞬間、杖が光、辺り一帯の何かが変わった。

其の一　3（後書き）

「有給と祝日ってなんですか？」
「幻想だ」
少しだけ先輩がかっこよく見えました。

其の一　４（前書き）

少し急ぎすぎた感があるので、時間があるときに加筆したいです。

其の一　4

少女の力について何一つ知らない俺には詳しいことなどわからないが、確かに今まで俺の居た空間とは違うと断言できる。
何と言えばいいのだろうか。
生き物の気配がなく、無機質などこか偽者めいたこの世界を。
これが、少女の言っていた結界の中なのだろう。
さて、皆さん既にお気づきだと思われるが俺もどうやら結界内に居るようだ。
「もう結界と名のつくものを信じられそうにない」
「えっ？」
聞こえるはずのない声に、びくっと反応しすごい勢いで此方に振り返る少女。
「あわわわわっ。　何でお兄さんが居るですか？」
あわわわわっ。寧ろ俺が聞きたい事です。
考えても分からないことはわかりきっているので、すでに思考は放棄している。
この展開にも慣れたものだ。俺は半場諦観しながら空を仰ぎ見る。
結界内でも星は見えのですね。
「まさか！　お兄さん魔道石を持ってるですか？」
「確実に持っていないよ」
そんなあからさまに怪しそうな石を身に着けておくわけがない。
また、俺には石を拾う趣味もない。
「ならどうし――」
「Ｇｙａｏｏｏｏ！」
まだ何か言おうとした少女の言葉をかき消し、獣の咆哮が大気を震わせ周囲に響き渡る。
少女の跳び蹴り一発でやられてくれるほど雑魚敵ではなかったようだ。

「うぅ、お兄さん、このお話はまた後でです。わたしが魔獣を倒しちゃうまで離れていてください」
「わかったよ」
素直に少女に任し、なるべく離れる。
少しでも離れておけば、足を引っ張る確立も百三十パーセント程度に下げることができるかもしれない。
俺だって出来ることなら少女に迷惑を掛けたくないのだ。
というわけで少女から離れたところで、冒頭付近の戦いへとなったわけである。
「はぁぁぁぁ！」
「Ｇａａａａ！」
杖の先から青く輝く剣を発現させ縦横無尽に夜空を翔る少女と、その爪と牙で少女を切り裂こうとして周囲の建物を切り裂いている黒い獣。
住民の声が聞こえないのは結界の効果なのだろうか？
少し気になったので、二階部分が吹き飛んでしまったとある家屋に侵入してみる。
誰も居なかったら、申し訳ないがスウェットあたりを拝借したい。
どうでもよすぎる事ではあるのだが、実は冒頭付近の時点で俺は踊り子衣装だったのだ。
空気を読めていなすぎるので触れもしなかったが。
巨大な化け物に挑む、可憐な少女。
そして変態の俺。
場の雰囲気をぶち壊しだ。
決して俺にエアーリード機能が無い訳ではない。黒い獣と違って俺はそれなりに空気を読める自信がある。
ただ、私服は黒い獣の火炎弾によって消し炭となってしまったので着替えようがないのだ。
そういった諸々の理由を言い訳に住居侵入を果たす。緊急事態だから許してください。

――家屋の中はシンと静まり返っていた。
自身の家が破壊されているというのに、住人は騒ぐどころか反応もない。気持ち悪いほどの静けさ。
それもその筈。そもそも、住人が存在していなかったのだ。
「なるほど……だから『隔離』か」
少女の言葉を思い出す。
想像でしかないが、アニメや漫画でよくある設定と同じようなものなのだろう。
別の空間を作り出した、といったところだろうか。
人目を避けて、その上で一般人の被害も無くすのに都合のいい能力。
その空間に何故俺が存在しているのかが甚だ疑問だが。
「そんな事は置いといて、とりあえず服だな」
外では少女と黒い獣の戦闘音が未だに響いている。
何時この家屋が、今一度黒い獣の歯牙に掛かるか分かったものではないので急いだ方が賢明だろう。
というわけで箪笥を開けてみる。
「いきなり女性物の下着を引き当てた俺は、ある意味何かを持っているのかもしれない」
ふざけている暇はないので引き続き物色をする。戦闘音が地味に近づいてきている気がして割と焦る。
それにしても黒い獣は大分粘っているようだ。
普通、冒頭で出てきた敵は主人公が変身できたら直ぐに倒されるものだというのに。
変身するまでに障害があったのなら、なお更そういった展開は顕著なように思える。
まったく。『物語』のお約束は守ってもらいたいものだ。
――それとも、この『物語』が既に崩壊し始めているのか。
「山田大輔は白いスウェットを発見した」
ゲーム風に言っちゃうちょっとお茶目な俺。

何だかんだ言って、焦っていながらもこんな事が言えるとは俺も無駄に場慣れしたものである。
とは言っても余裕がないのは事実なので急いで着替えを済ませる。
人様の家で人様の服に無断で着替えている俺は、はっきり言って終わっていた。
今日だけで、警察のお世話になれる要素が多すぎる。
止むを得ない事情があったのだ。命が掛かっていたのだ。と、自身を納得させ着替え終えると同時に野外へと駆け出した。
外に出ると同時に視界に映ったのは、夜空を青白く照らし、神々しく空を射抜く強大な剣だった。
「受けてみるです。わたしの『願い』を」
少女の声が聞こえ、そちらに視線を移す。
それは空中に浮いている少女の杖より現れた剣。
少女の視線の先には、四肢をやられもがく黒い獣。
そして今宵の戦闘に幕が下ろされる。
「ガーディアンソード！」
頭上高く掲げられた夜空を照らす剣は、少女の両手の動きに連動し黒い獣へと振り下ろされた。
「Ｇａａ！　Ａａａａ！」
黒い獣の叫びの直後、魔法の剣が地面へと叩きつけられる。
一瞬の閃光後、尋常ではない揺れが周囲を襲った。
剣が叩きつけられた場所を中心に砂埃や家屋の残骸が舞い、一時的に視界が奪われる。
やがて視界が戻り、目に飛び込んできたのは信じられない光景だった。
振り下ろされた剣を中心に消し飛んでいる家屋。
元々は住宅街であったその場所は、今や縦に大きな亀裂が入った更地となっていた。
とてもじゃないが、黒い獣の死体等確認しようがない。
これは本当に魔法少女ものだろうか？　と俺が戦々恐々している

と、やがて少女も勝利を確信したのだろう。強大な剣を消し、小さな杖を持って笑顔で此方に飛んできた。
「勝ったですよ！　お兄さんも無事みたいでよかったです！」
「君も無事でよかったよ。助けてくれて有難う」
俺の言葉を聞き「お互い様ですよ」と少女は笑みを深くした。
純粋な、とても可愛らしい表情だ。
聞けない。こんな笑顔の少女に、消し飛んだ町どうすんの？　とか聞けない。
「お兄さん、お兄さん！　わたしはプリムラ・リーフです！　お兄さんのお名前はなんですか？」
「プリムラちゃんか。俺は大輔。大輔・山田だよ」
外国風に答えたことに意味はない。
少女ことプリムラは数度俺の名前を呟やき、
「大輔、大輔・山田。うん、大輔さんですね！　覚えたですよ！」
「僅かばかり苗字と名前を勘違いしていないか不安になってきた」
「？」
まぁ名前で呼んでもらえるなら、本人が勘違いしていようがどうでもいいか。正直俺も、プリムラが苗字か名前かなどわからないし。
キョトンとしていたプリムラだが、続いて真剣な表情になり言った。
「隊の人達が来たらきっと大変なことになるですよ。きっとお兄さんの事を調べようとするです。わたしはお兄さんを巻き込みたくないです。本当はもっとお話したいですけど、寂しいですけど、だからもうお別れです」
「プリムラちゃん？」
寂しいとか言ってもらえるのは嬉しいけど、何か調べられるとか無視できない単語があったよね？
「今から結界を解くです。それで町も元通りになるですから安心してください。だから、安心して、今日の事は全部忘れてくださいです」

「さすがに、忘れる事は無理そうかな」
ここまで印象的なことを忘れてしまうなど、到底無理な話だ。
それこそ魔法によって記憶を消したりでもしない限り。
苦笑しながらそう言った俺を、プリムラは悲しそうに見ていた。
「忘れちゃうですよ。今日のこと、黒い獣のこと……そして私の事も。わたしが忘れさせちゃうです」
「……それはどういうこと？」
答えることなく、目を瞑りプリムラは杖を掲げた。
その杖が光ったかと思うと、一瞬にして崩壊した町並みが元の様相を取り戻す。
そしてゆっくりと瞳を開けたプリムラは、
「これできっと今日の記憶を失っても違和感を感じない――」
全裸の俺を目にして硬直した。
今回ばかりは自首も視野に入れようと思う。
あれだろうか？　結果以内のものを身に着けていたから、結界が消えると同時に消えてしまったのだろうか？
空気を読もうとした結果がこれとは、さすがに報われなさ過ぎる。
俺は急いで『大輔秘密道具その八』を身に着けた。
そして何事もなかったように、
「……それはどういうこと？」
「――これできっと今日の記憶を失っても違和感を感じないはずです」
空気を読んでやり直してくれたプリムラ。俺や黒い獣と違ってちゃんとエアーリード機能が搭載されているようだ。
シリアスが一瞬にして茶番になってしまった。
俺の所為ではないと言い張りたい。
こんな茶番でも、それでも此方に合わせてくれるプリムラ。
「いつかきっと、わたしから会いに行くです」
杖を俺に向けたプリムラの表情はとても悲しそうで、その頬が赤く染まっているところに彼女の健気さが滲み出ていて、俺は涙を堪

えるのに必死だった。あそこでシリアスを粉砕してしまった自分に憤りを感じずには居られない。
「わたしは絶対に忘れませんから」
杖から光が発せられると、急速に意識が遠ざかっていった。
霞む視界の中、泣きそうなプリムラの表情が印象的で。
できることなら忘れたくないと、純粋に思えた。
あぁそう言えば今回はあまり足を引っ張らなかったのではなかろうか。

其の一　４（後書き）

通勤の電車を待っているとき、いつも横に並んでいるおじさんが居ないと、とても不安になります。

其の二

――翌日、俺こと山田大輔（工藤考案あだ名ボルボックス）は特に変わったこともなく、ここ数日通り補習を終えた。

担任が退出し静まり返った教室からグランドの方を見ると、夕方だというのに今だ爛々と輝いてやる気満々の太陽にウンザリしてくる。

そんな中、我が校の運動部諸君は駆け回り動き回りと頑張っているのだから、もう素直に尊敬しつつ彼らも同士と言う名のMなのではないかと期待してしまうものだ。

駆け回るサッカー部に視線を向ける。

照りつける日差し。ひかる汗。そして――恍惚とした表情。

自分で言っといてなんだが、我が校の部活動はダメかもしれない。

健全な精神は健全な肉体に宿る的な言葉を聞いたことがあるが、どうやら彼らには当てはまりそうもなかった。

完全に邪な精神が邪な肉体に宿っている。

部活の未来を軽く憂いながら、思考を昨日へと移す。

プリムラに意識を落とされた後、目覚めてから帰宅するまでに職質されたのは何時もの事なので措いておくとして、問題は当たり前のように昨日の記憶があることだ。

その代わりと言って言いのかわからないが、一昨日の夕飯がどうしても思い出せなかった。

『忘れちゃうですよ。今日のこと、黒い獣のこと……そして私の事も。わたしが忘れさせちゃうです』

『わたしは絶対に忘れませんから』

この悲哀に満ちた流れはなんだったのだろうか？

これによって昨日の出来事に僅かばかり残っていたかもしれないシリアス分が完膚なきまでになくなり、完璧なる茶番劇となってしまった。

何故敢えて一昨日の夕飯と言うピンポイントな記憶が消えたか想像もできないが、記憶を消すという魔法だ。きっと高等魔法かなんかで難しいのだろう。
もしくはプリムラがドジっ子なのか。
俺としては後者が有力だと思う。
予測では、結界内に俺が残ってしまったのも彼女のドジっ子スキルのせいだと考えていた。
まぁ、いくら考えたところで俺のような一般人的な高校生では予測しかできないので、そろそろこの思考も打ち切るとしよう。
プリムラ自身がその内会いに来るといっていたので、真相はその時にでも聞けばいいのだ。
プリムラが会いに来てくれればの話だが。
今思い返すと、彼女は軽く死亡フラグを建てていた気がしないでもない。
『ここで待っていて欲しいのですよ。大切なお話があるのです』
ほらね。この台詞って結構危ないと思うのよ。
普通だったらこの台詞の後、別れ離れになって台詞を言った人物が帰って来ないというのがよくあるパターンなので俺達には当てはまらないが、それでも心配ではある。
だが、いくら考えたところで、
「……結局のところ、俺には心配することしかできないのだがな」
辿り着く思考は何時もと同じ。
せめて、無事再開できる日まで祈り続けよう。
そんなセンチメンタルな気分になりながら、窓の外を眺めていると小柄な体とアホ毛が目に入った。
松本萌を捕捉したでござる。
即ダッシュ余裕でした。
グランドを横断し、校門へと向かっていた萌の後をコッソリと着いて行く俺。
そのまま校門を出て住宅街へと続く道を歩いて行く。

萌が何故夏休みにわざわざ学校へと来ていたのか分からないが、そんな事は萌を見てテンションメーターが振り切れている俺には関係なかった。
先ほどまでのセンチメンタルの気分など、もはや欠片も残っていない。
相変わらず萌は可愛い。
見慣れているはずの制服も萌が着ているだけでまるで違って見えてくるから不思議だ。その花柄の手提げもキュートでグッドです。
そんな可愛い見た目中学生の少女の後を、電柱などに身を隠しながら着いて行く男。
傍から見なくても通報は免れそうにもなかった。
違うのだ。これは決してストーカー行為ではないのだ。ただ俺は初心だから話しかけるタイミングが掴めずこうやってタイミングを計っているだけなのだ。だからやめて。通報はやめて。あぁ、やめて其処のご婦人。携帯出さないで。俺あの子と知り合いですから。本当、本当に知り合いです。一方的とかじゃないです。思い込みとかでもないですから。あっ、萌ちゃんが行っちゃう。ご婦人その手を離して、萌ちゃんどっか行っちゃうから。離して、離してって、そぉぉぉい。
少し離れてしまったであろう萌との距離を詰める為、駆け足で追おうと道端で寝ているおかしなご婦人を避けて電柱から身を出すと、ふと視界の端に『青』が映った。
気になったので不自然にならないように自然な様子を心がけて来た道を振り返る。
すると少し後方に、ブルーブラックの綺麗な髪の少女が電柱に隠れながら此方を見ていた。
どう見てもプリムラです。本当にありがとうございました。
確かに『いつか』には次の日も含まれているが……何とも言えない気分だ。
まぁ、どうやら無事死亡フラグは回避できたようで何よりだった。

俺の祈りも偶には届くようである。
誰に届いたかは知らないが。
目が合う。
プリムラは、急いで電柱に身を隠そうとするが、鈍い音と共にしゃがみ込んでしまった。
勢いあまって横の塀に何処かぶつけてしまったようだ。
これは後者で確定であろう。彼女はドジっ子である。
ひらひらのスカートやら長い髪がまったく電柱に収まっていないが、ここは哀れみと同情を持って気づいていない振りをしよう。
と、いうわけでストーキングを再開。あっ、自分で認めてしまった。もうどうでもいいや。
そうして萌をつける俺をつけるプリムラの構図が出来上がった。
そのまま数分歩き続けていると、突然萌が立ち止まる。
何故だろうかと凝視してみると、どうやら塀の上の猫を見つめているようだ。遠目なので確実ではないが三毛だと思われる。
暫く猫を見つめていた萌だが、周囲をキョロキョロと見渡し始めた。人目でも気にしているのか、だいぶ念入りに見渡している。
やがて誰もいないことを確認しきったのか、手提げから何かを取り出し、手提げ自体はその場に置いた。
残念ながらごく近くに変人が二人いるのだが気づけなかったようだ。萌が人の気配に鈍感すぎるのかプリムラのストーキング技術も捨てたものではないのか疑問だが。
そしてゆっくりと蟹歩きで塀の上の猫へと近づいてく萌。
時折欠伸の振りなどをしているのは、おそらく猫に警戒心を抱かせないためであろう。
人間の俺からすれば、その行動は警戒するに充分すぎるほど奇妙だが。
そうなってくると、この場には変人しかいないことになる。
だいぶ混沌とした空間になってしまったものだ。
「ちちちちちっ」

萌の声が届く。
塀に辿り着けたようだ。人差し指を猫の鼻先に近づけ気を引こうとしている。
猫も別段警戒していないようで、指の匂いを嗅いでいるようだ。
近くにいる萌はその事を俺などよりよっぽど理解しているのであろう。静かにその手を猫の頭へと持っていき、そっと撫でることに成功した。
「へへっ、お前いい子だな。ほら、これ食え。うまいぞー」
そう言って、彼女はもう一方の手に持っていた物を差し出す。先ほど手提げから取り出していたのはお菓子か何かだったようだ。
お菓子を与えニヒルな笑みを浮かべながら猫を撫で続ける萌。
驚くほど本性丸出しである。
普段学校などで猫かぶりしている萌なら、ここ台詞は『えへへっ、猫ちゃんいい子だねぇ。ねぇねぇ、これ食べてぇ。おいしいよー』となるはずだ。
何この落差。
その容姿でニヒルな笑みとかやめてよね。猫と戯れる風景と合わさって、心優しい人が見たらきっと無償で何でもしてあげたくなっちゃうよ。
なので心優しい人オーラ（自称）が滲み出ている俺は（工藤曰く変態五分変人五分オーラ）萌にナニかしたくなったので行動に移すことにした。
とりあえず、いきなり近づいて猫が逃げたりしたら萌に怒られる事は目に見えて分かっているので、静かに匍匐前進で近づくことにする。
ずるずると慎重に体を引きずりながら前進していくと、萌が手提げを置いた場所まで萌アンド猫に気づかれる事なく進むことに成功。
一先ず一息つき額の汗を拭ったところで、偶然萌の手提げの中身が視界に入った。
本のようだ。

薄いので雑誌だろうと思ったが、何故か心に引っかかるものがあり、悪いと思いながらもそれに手を伸ばしてしまった。
そして俺は、とてつもない衝撃を受けることとなる。

其の二（後書き）

先日突然右足がつりその場に膝まづいたら、続いて左足もつるという地獄をあじわいました。

其のニ　2

なんとその本は、
「『武の秘密の放課後～僕の大輔～』……だと？」
題名から考えるに表紙に描かれている、半裸で抱き合っている男二人組みは俺と武であろう。
つまりこの薄い本は、武×大輔の同人誌ですね、わかります。
本気で吐きそうになった。
その上、無意識に声に出してしまったため萌に気づかれてしまう。
「誰だ？　あっ、大輔！」
振り向いた萌の表情が驚愕に染まる。これはマズイ、逃げなくては。
「やばっ、見つかっちゃった。トラップカード発動！　逆流葬！　おぇ、オロロロロ」
「うわっ！　お前何いきなり吐いてんだよ！」
咄嗟に指を口内に入れ吐く。
いきなり何やってんだこの馬鹿は、と思われるかもしれないが、これも作戦である。
俺の吐しゃ物に萌が気を取られているうちに逃げるという作戦だ。
つまり馬鹿である事を否定できない、最低最悪の苦肉の策だった。
だが、咄嗟の思いつきの割には効果的な策だったようだ。
事実、萌は俺の予想外の行動に驚愕の表情のまま呆然としている。
それも当然であろう。
誰だって、振り向いた先にいた人間がいきなり、自分の口内に指を突っ込んで吐き出したら一瞬思考停止してしまうはずだ。
しかもそれが知り合いだったら、より一層混乱を招くこととなる。
よって、作戦成功。
後は背を向けダッシュで逃げるだけなのだが、
「おうふ……やばい、本気で気持ち悪くて動けない」

「てっ、おい！　大丈夫か大輔！」
背を向け走り出そうとしたところで膝をつき項垂れる。
元々吐きそうだったのに、本当に吐いたからマジで気分悪くなってきたよ。俺って、ほんとバカ。
自身ではすぐに動き出せそうにないので助けを求める視線をプリムラに送るが、オロロロしている俺の視線の先ではプリムラがオロオロしていた。
彼女が此処にいる理由が俺にはわからない。
結局逃げ出すことはできなかった。駆け寄ってきた萌が俺の傍にしゃがみ込み顔を覗きこんでくる。
「どっか具合悪いのかよ？」
「いや……おうっ……大丈……うぇ……夫だよ」
「説得力ねーよ！　アホッ！」
そう言いながら背をさすってくれる萌。
毛嫌いしている相手でも無視できない萌の優しさに、全俺が泣いた。
ストーカ行為の後ろめたさもあり、彼女にこれ以上迷惑は掛けたくないので、俺はウエストポーチから『新発売デロドロインドジュース改』を取り出す。
「心配してくれて有難う萌ちゃん。でも、本当に大丈夫だよ。これを飲めばすぐに良くなるから」
「……いや、そんなもん飲んだら余計気分悪くなんだろ」
より一層心配そうな表情にさせてしまった。
解せぬ。
何故誰もデロドロインドジュースシリーズの良さを理解してくれないのだ。大抵の人が変人を見る目で此方を見てくる。
まぁ今はその事について思考をめぐらす時ではない。
兎に角早いところ動けるようになり、萌が軽く混乱していて現状を完全に理解できていない今のうちに逃げるべきだ。
そんな訳で俺が『新発売デロドロインドジュース改』を飲もうと

したところで、萌が「うんっ？」と何かに気づき顔を真っ赤に染めると、
「てっ、誰がお前なんかの心配するかっつーの！　死ね！　このロリコンヤロー！」
「――っ！」
俺の股間にいる紳士サムを蹴り上げた。
声にならない悲鳴が俺の口から零れる。
あまりの衝撃に手から零れ落ちていく大好物『新発売デロドロインドジュース改』と同人誌『武の秘密の放課後～僕の大輔～』を拾う余裕もない。
俺は股間を押さえ、その場でダンゴムシのように丸くなり限度と理解を超えた痛みに涙を流しながら悶えた。
これはさすがに、我々の業界でも拷問です。
「ハァ、ハァ――そ、それとっ！　大輔！　お前何時から此処に居たんだよ！　まさかっ、また隠れて着いて来てたのか？」
「ひゅー、ひゅー――ち、違うんだ、萌ちゃん。ほら、最近あれだよ、あれ。そうっ、あれだよ！　殺人鬼！　ほらっ、最近殺人鬼が居るらしいから、可愛すぎる萌ちゃんが心配で影ながら見守っていたんだよ！」
俯いていた面を上げ、嫌な汗をかきながらも必死に言い訳をする。
「か、可愛いって……し、心配してくれたのか？」
効果を確認。
「そうだよ萌ちゃん！　俺は殺人鬼と言う脅威から萌ちゃんを守るために――」
「――あれ？　殺人鬼って確か……おい大輔。殺人鬼ってこの前自殺したんじゃねーのか？」
「――そうですねっ！」
「そうですねっ！　じゃねーよ！　このロリコンストーカーヤロー！」
「ベスパ！」

見惚れるほど綺麗な回し蹴りを顔面にくらいゴロゴロと転がる。
ダンゴムシ状態だったので普段より多く転がっています。
俺が転がったことにより、俺が落とした同人誌に萌が気づいたようだ。
「あーっ！　こっ、これってもしかして？」
叫び声を上げ、自身の手提げの中身を確認する。
「やっぱり！　これ萌のだろ！　てっ、てーことはっ。見たな！　忘れやがれ！　このっ！　このっ！」
「痛いっ。やめて！　俺のライフはもうゼロというよりマイナスよ！　やめっ、ちょっ、ほんとマズイって。オーバーキル！　オーバーキル！」
萌は転がり離れた俺を追い、必要に頭を踏んでくる。一昨日の夕飯以外も本当に忘れてしまいそうだ。
萌はツンデレなのだ、と自身に暗示をかけ何とか耐えてきたが、流石の俺もこれ以上は耐えられそうにない。
そもそも武という存在が居る限り、この暗示の効力は高が知れていた。
これ以上のダメージはダンゴムシ防御を超えてしまうと考えた俺は、このような事態を呼び寄せた諸悪の根源を排除する。
「こんなものがあるから戦争は無くならないんだ！（迫真）」
「あっ！」
萌の手から『武の秘密の放課後～僕の大輔～』を引ったくった。
本当は破り捨てたいが、体力、精神力共に限界近い今の俺では薄い本ですら破れそうにもなかったので「飛んでけー！」近くの民家に投げ捨てる。
ばさばさと民家にある木の間へと落ちていく『武の秘密の放課後～僕の大輔～』。
できる事なら、二度を人の目に触れることなく土に還って貰いたいものだ。
「大輔！　お前なんて事してくれてんだ！　わざわざファンクラ

ブに入ってまで手に入れたってゆーのに！」
「萌ちゃん！　基本俺は君の事は全肯定だけど、あれだけはやめて！」
萌は民家に忍び込んでまで取りに行くべきか悩んでいるようだ。住人を呼んで取らしてもらうには、さすがに羞恥心が勝ったのだろう。涙目で民家と此方を交互に睨んでいる。
そんな萌を前に俺は『武の秘密の放課後～僕の大輔～』の作者を一度殴ると心に決めた。すべてあんなものを描いてしまった作者が悪いのだ。
俺より作者が弱そうなら殴る。
少しでも俺より強そうなら土下座してでも描くのをやめていただこう。
「おいっ、大輔。お前が取って来いよ！」
「ごめんね萌ちゃん。萌ちゃんの頼みならこの場で今すぐ全裸になるのも厭わないけど、あれだけはダメなんだ」
「んなこと頼むわけねーだろ！　このロリコン露出狂が！」
「ぱっそる！」
見事としか言いようがない左ストレートをいただきました。
黒い獣と相対したときよりも短時間かつ大ダメージを受けているとは、これは如何に？
萌は軽く混乱気味だし、俺は既に瀕死だし、プリムラはいつの間にか居なくなっているしで場が混沌としすぎている。
いいかげん何とかせねば話が進まない、と俺が思ったところで、
「あわわわわ……だ、大輔さんっ。こ、これ何と言うかすごいです！」
「プリムラちゃん、再登場早いね」
件の民家からプリムラ登場。できればもう少しだけ待っていて欲しかったな。

其のニ　2（後書き）

久しぶりに映画『レオン』を見ました。
やはり名作ですね。何度見ても感動します。
私が一番好きな映画です。

其のニ　3（前書き）

私はどちらかというとバットエンド派です。

其のニ　3

何故このタイミングで出てくるのかまったく理解できないが、恐らく子供のプリムラはかくれんぼに数秒で飽きてしまったのだろう。子供は熱中しやすく、また飽きやすい。

ところで、その手に持っている本はなんだろうか？　見覚えがありすぎるのだが。

「こ、このキャラクターって大輔さんですよね？」

「やっぱりか！　よりによって何でそれを回収してきちゃったの？　ダメ！　プリムラちゃんはそんなのを見ちゃダメだよ！」

「わっ」

必死に起き上がりプリムラの手から邪気すら滲み出ている薄い本を取り上げる。子供の情操教育に悪い事この上ない。

萌という前例があるので、プリムラの実年齢も見た目どおりとは限らないが、仮に萌と同い年だとしても何度も言うがこれはダメだある。

「ダメだよプリムラちゃん。読むにしても、もっと大きくなってからで尚且つ俺が出演していない本ね」

特に後半を強調して言う。俺が出てさえいなければ人の趣味はそれぞれなので俺は関与しない。

何より俺が人の趣味にとやかく言う権利はないだろう。マゾだし。ロリコンだし。

それにしても、いったいこの本は世に何冊出回っているのだろうか。いずれすべてを回収する旅に出なければならないだろう。

抵抗されても著作権だか肖像権だか忘れたが、そこらへんで訴えれば勝てるはずだ。

同人誌回収の旅。ある意味無駄に壮大だ。

「うー、わかりましたですよ」

俺の言葉に素直に頷いてくれるプリムラ。その様子に俺も疲れを

忘れ自然に微笑んでしまう。プリムラは素直でいい子だ。
これまた自然にプリムラの頭を撫でようと手を伸ばしたところで、プリムラ登場から俺の後ろで此方を観察していた萌から声が掛かった。
「大輔さぁん、その子はお友達ですか？　萌にも紹介して欲しいなぁ」
少し幼い舌足らずな声が耳に心地よい。
ニコニコ笑顔の萌は可愛いなぁ。でも目が笑ってらっしゃらないのが怖いなぁ。
ちなみに松本萌検定有段者の俺には副音声の「おいロリコン。このチビガキは誰だ？　説明しやがれ。事と次第によっちゃ通報すっからな」もばっちり聞こえている。
俺が小さな女の子と知り合いというだけで、この疑いよう。信用されていないにもほどがある。
なのでここは自身の身の潔白を証明するためにも――嘘を吐こう。通報とかマジ勘弁。
プリムラもちらちらと此方に視線を送っていることだし、嘘も方便である。
そもそも一般人に昨日の事が理解されるわけがないのだ。
「この子はプリムラ・リーフちゃんで、俺のあぁそのあれだよ。従妹なんだ。何も疚しい事はないから通報しないでください」
「ダウトー」
「この子はプリムラ・リーフちゃんで、一番下の妹なんだ。何も疚しい事はないから通報しないでください」
「ダウトー。確か三つ下の華（はな）ちゃんと二人兄妹だよねぇ」
「この子はプリムラ・リーフちゃんで、近所の幼馴染なんだ。何も疚しい事はないから通報しないでください」
「ダウトー。大輔さん引っ越してきたんだよね？　もう嘘ばっかりだよぉ。（嘘吐くんじゃねー。いいかげんにしねーと問答無用で通報するぞ）」

「この子は魔法少女のプリムラ・リーフちゃんで、昨日夜の公園で黒い獣に襲われているのを助けてもらったんだ。俺は踊り子の衣装で踊ったり全裸になっただけで何も疚しい事はないから通報しないでください」
「無理」
そう言って萌は携帯電話を取り出しどこかにかけ始める。
どう考えても最後のやつが一番現実性がないと思われるのだが、信用されていないのはわかっているが萌の中の俺はどのような位置づけになっているのだろうか。
「おまわりさーん。先乃宮町三番地の佐藤さん家の近くに幼女誘拐と猥褻罪の現行犯がいますよぉ」
「ちょっ、萌ちゃん？」
えっ、さすがに冗談だよね？　友達に連絡しているだけだよね？
だが冗談にしてもあんまりだ。知らない人に聞かれたら俺の世間体と言うものが大変なことになる。この面子では誰一人として俺の言い分を聞いてはくれないであろう
たとえ萌が相手でも、ここはちゃんと言っておこう。
「萌ちゃん、冗談にしても酷いよ。確かに俺はロリコンと言われても言い返せないけど、それでも他人に嫌な思いをさせて喜ぶような変態じゃない」
「むぅ」
俺の真剣な表情に圧されたのか、萌は顔をしかめ押し黙る。
だがすぐに済まなそうな表情となり下を向いてしまった。
どうやらわかってくれたようだ。何だかんだ言って萌も根は素直な子だから、話せばわかってくれると思っていた。
頼むからそのまま俺が自白したことを何一つ否定していないことに気がつかないで欲しい。
気まずそうに此方をちらちらと見てくる萌は可愛いが、さすがにこのままという訳にもいくまい。
この何とも言えない空気をどうにかしなくてはならない。沈黙が

痛すぎる。
　こんな空気になってしまったのも、また原因も俺にあるのだから俺が何とかせねば。
　一先ず暑いので、どこかの喫茶店にでも移動しよう。この暑い日差しの下から逃れられるし、俺が奢ると言えば着いて来てくれるだろう。
「此処は暑いね。俺が奢るからとりあえず喫茶店にで――」
「そうです！　先ほどから見ていれば松本さんは大輔さんに酷すぎです！」
「――もって、プリムラちゃん。何故このタイミングで動き出したし」
　突然俺を庇うように萌との間に割って入ってきたプリムラ。
　この子、空気読めると思ったけどとんだＫＹだ。
　そういえば『空気読める』と『空気読めない』ってどっちもＫＹだよね。後『漢字読めない』もＫＹなんだぜ。どうでもいいか。
「大輔さんは優しくていい人なのに、松本さんは何でそんな意地悪するですか！」
「むぅ……」
「……プリムラちゃん」
　何ていい子なのだろうか。こんな俺のために怒ってくれるとは。
　人のために本気で怒れるというのはそれだけでその人の美徳である。空気読めないけど。
　プリムラの優しさは素直に嬉しいが、ただ萌が完全に俯いてしまったので此処は俺が仲裁に入るべきであろう。先ほども言ったが俺にも原因はあるのだ。萌だけが悪者扱いになってしまうのは後味が悪い。
「プリムラちゃん、そこらへんで――」
「確かに大輔さんはわたしの前で踊り子の衣装で踊ったり、裸になったりしましたけど……それにはいろいろ理由があったですよ！」
「――いいかげん空気読んでー！」

これが俗に言う、上げて落とすという高等テクニックだろうか。
さすがは高等テクニック。効果は抜群だ。
俺と――萌に。
萌の背後からどす黒いオーラが立ち上り始める。
視認できるほどのオーラとか、俺でも数回しか見たことがないです。あの親蟲（おやこ）は元気にやってるかなー。
そろそろお得意の現実逃避しようかと思っています。
萌がゆっくりと面を上げた。
「えへへ」
怖いでござる。
どこかで聞いた覚えがある。笑うという行為は本来攻撃的なものであり、獣が牙を剥く行為が原点であると。
なるほど。今の萌を見れば自分でも驚くほど納得できる。
「何で萌が怒られてるのかなぁ。何で萌の名前知ってるのかなぁ。そころへん話し合おうね、リーフちゃん？　大輔さんは後でねじ切る」
「えっ？」
どこを？　それは私の紳士サムをでしょうか？
思わず内股で萌から距離をとる。
ふたりのちびっ子は火花を散らし始めた。今の萌と真正面から対峙できるプリムラに尊敬せざる終えない。空気読めないところは尊敬しないけど。
「またそうやって大輔さんに意地悪するですか！　松本さんはそんなに大輔さんの事が嫌いならどっか行くです！　しっしっ」
「おかしいなぁ。たぶん萌、何も悪いことしてないよね？　何で萌が怒られてるのかなぁ」
「大輔さんの事を殴ったり蹴ったりしてたのに、よくそんな事が言えるですね！」
「女の子として普通だと思うよぉ。リーフちゃんも変態さんに襲われそうになったら必死で抵抗するでしょ？」

「大輔さんは変態さんではないです！」
「萌は変態さんとしか言ってないんだけどなぁ。リーフちゃんの中では大輔さんイコール変態さんなんだね」
「あわわわわっ。ち、違うですよ！　わ、わたしはそんな事思ってないです！」
「それと、もう一度言うけど何で萌の名前知ってるのぉ？」
「あわわわわっ！　し、知らないですよ？　わたしは松本萌なんて名前知らないです！」
頬を真っ赤に染めて慌てまくっているプリムラと、終始笑顔でたんたんとプリムラを追い込んでいく萌。
何故このような事態になってしまったのか。何故紳士サムはねじ切られなければならないのか。
わからない。もう何も考えたくない
こんなに暑くては元々働かない俺の脳みそは完全にニート状態である。
と、言うわけで全部太陽が悪いことにしよう。
「すべて太陽が悪いということで強制移動じゃー！」
「うわっ！」
「わっ！」
両脇にロリを抱え込みダッシュで移動を開始する。
走り出した直後は呆然としていたロリーズだが、驚きから立ち直り萌がぎゃーぎゃー騒ぎ出し、プリムラがきゃっきゃっとはしゃぎだしたが気にしない。
俺ではこの混沌としすぎた雰囲気を変える方法が、もう場所を移すくらいしか思いつかなかったのだ。
誰だって暑いと苛苛してしまうものだろう？　だから太陽がすべて悪い。
決して道の向こうから見覚えのあるご婦人が鬼の形相で走ってきたからとか、パトカーのサイレンが聞こえてきたからでもない。
きっと暑さの所為で幻覚と幻聴がいっぺんに襲ってきたのだ。

まったく、太陽は悪い奴である。

其のニ　3（後書き）

猫可愛いですよね。
いつか飼ってみたいです。

其のニ　４（前書き）

二章終わったら、二章全部を加筆修正したいです。

其のニ　4

まぁ、あれだ。普通に考えて両脇に三十キロオーバーの荷物を抱えながら走れるわけがない。
しかもそれが炎天下の中ともなれば、考えるまでもない事だ。
「ぜはぁ、ぜはぁ」
「そもそも何でリーフちゃんはあそこに居たの？」
「そ、それは今関係ないです！　今は大輔さんの事です！」
案の定走り出してすぐにバテた俺は、とりあえず近くの公園でロリーズを降ろし木陰で休憩中である。
日射病一歩手前という感じだ。ガチで太陽が憎い。
「汗が止まらん。頭がくらくらする」
「あれです！　変態変態言う人が変態だって誰かが言ってたです！」
「それならリーフちゃんが変人ってことになるよぉ」
だらしなく手足を投げ出し呼吸を整えている俺の脇では、今だロリーズが口論中。
俺の事を話しているのに、俺本人の事はガン無視である。少しでいいので俺の心配もしてください。
まったく、こんなにも暑い中子供は元気だね。俺もこれくらい小さかった時は、よく四人で年がら年中遊びまわっていたよ。
自身の幼き頃を事を思い出し、感傷に浸りながら、そんな二人を微笑ましく見守る。
「松本さんは大輔さんの事全然わかってないです！」
「へー、なら知ってる？　大輔さん学校で『完全なる犯罪者（パーフェクトクリミナル）』って呼ばれてるんだよ」
「だからなんです！　異名があるなんてすごいじゃないですか！
それに大輔さんの異名は『女性の大敵（アークエネミー）』だってエミリアさんが言ってたですよ！」

「エミリアさんって誰？　それと何度も言うけど何で萌の名前知ってるのぉ」
無理でした。
涙ながら二人を眺める。
俺、学校でそんな渾名つけられていたのか……。しかもまったく面識のないエミリアさんとやらにも、どうやら疎まれているらしい。会った事もないのに高感度マイナスってどういうこと？
おかしいな？　『新発売デロドロインドジュース改』がいつもと違って塩味だ。
プリムラにその気はないと信じているが、いつのまにか二人に攻め立てられているようにしか思えない展開になっていた。
「ロリコンでストーカーのどこが変態じゃないっていうの？」
「踊りの子衣装で踊っても、裸になったとしても大輔さんは変態じゃないです！」
「……」
だが、改めて他人の口から自身の行動を聞くと、むしろ責められる要因しかない事に気づかされる。さすがに今回の俺は酷すぎだ。
客観的に見ても、主観で見たとしても問答無用の変態である。いつ、常識の味方にして俺達の敵であるお巡りさんに鉄格子の中へと連れて行かれても、文句の言いようがない。
俺はいつからこのレベルの変態になってしまったのだろうか。それとも初めからだったのか。
――あぁ、まるで今の俺は莉香のようではないか。
「魔法少女かぁ。いかにも変態さんが好きそうなフレーズだよぉ」
「わ、わたしは魔法少女じゃないです！　魔法なんて使えないですよ！」
「魔法……か」
今更だが、プリムラが関わってきたので仄かに『事件』の香りがしてきたのだが、さてどうなるものか。
ここからが俺の『才能』の見せ所である。

もしかしたら、プリムラをこの場に連れて来ない方が良かったのかもしれない。
萌だけを連れてあの場を離れるべきだったのか。いや、自身の安全を一番に考えるならあの場から俺だけが何処かに移動するべきだったのだろう。
珍しく俺にも選択肢があったようだ。
こんな感じだろうか。
1．萌を連れて行く。
2．プリムラを連れて行く。
3．二人とも連れて行く。
まるでギャルゲーの主人公のようではないか。
まさかまさかの、山田大輔が主人公の『物語』が始まっちゃうのではなかろうか。遂に俺の時代到来か。
どうせなら、皆がハッピーになれる選択肢を選んでいることを願おう。
皆が幸せ、ということでハーレムエンドがベストだと俺は思います。
ハーレムとか、想像しただけでニヤニヤが抑えられない。
「あんな気持ち悪い笑い方している人が、普通のわけがないよぉ。何を妄想しているのかな？　大輔さんは」
「笑い方なんて人それぞれです！　確かに気持ち悪いですけど、それも大輔さんの個性ですよ！」
「まぁ、現実なんてこんなもんだ」
俺のポジションなんて、ギャルゲーの主人公の友人に一人は居そうな、弄られキャラがいい所だろう。
それでも、今現在、もし何かの『事件』に巻き込まれているなら、今回は中々『物語』に関わっているような気がする。
だってこんなにも可愛い二人が、到底脇役に収まる器だとは思えないのだろう？
「なぁ、お前はどう思うにゃんこ」

「にー」
突然だが、俺に対し殺伐としたこの場に癒しが登場。
俺達に木陰という優しさを提供してくれている樹木の横にある茂みから、見覚えのある三毛猫が顔を出していた。
「そうか、お前もそう思うか」
「にゃう」
「ところでお前はあれか？　萌ちゃんが餌をあげていたにゃんこか？」
「にゃっ」
「やっぱりそうか。まだ何か食いたいのか？」
「にゃふ」
「あはは、この食いしん坊め」
あはは……なに俺猫と会話してるんだろう……。
いくら友達が少ないからと言って、動物の言葉がわかるようになってしまったら本当にぼっちになってしまいそうだ。
……自分で友達が少ないと言ってしまった。
ダメだ。この事にこれ以上触れていたら自滅していくだけである。
そんな事より猫と戯れて癒されよう。
「そういえば三毛猫って雄と雌、どっちが珍しいんだっけっか」
確か遺伝的にどちらかが少ないと聞いたことがある。少ない方は漁師の方々にとって縁起がいいらしい。
「まぁどっちでもいいか。ほろ、三毛よ。そんな所に居ないでこっちにおいで」
萌のように猫のあやし方など知らないが、なるべく警戒されないよう寝そべったまま、茂みに半場隠れている猫に手招きする。
おいでおいで、こっちに来てささくれ立った俺の心を癒してください。そしてできる事ならイヌ高橋の逆パターンということでネコミミ幼女になってください。
元々人に慣れているのか、それとも空腹なのか、ゆっくりと茂みから出てきて此方に近づいてくる三毛。

「おぉ、来てくれるか。可愛いなお前。そのままこっちにおいで――ただし後ろの粘性生物、テメーはダメだ」
何か猫と一緒に、青色のぶよぶよとした変なのも居るござる。
茂みから出てきた三毛猫を追尾するカタチで、半透明の青色でアメーバー状生物？　も出てきた。
意味が分からない。なんぞこれ？
大きさは三毛猫と同じくらいで、目と口らしきものは見当たらないが、中心に球体らしきものが浮いている。
粘性生物は茂みから出て此方の様子を伺っている三毛猫の後ろで、触手らしき物をうねうねさせながら流動していた。三毛猫は気がついていない様子だ。
俺が知っている限り、地球上にあのような生物は居ないはずである。
黒い獣や目の前の粘性生物といい、ここらいったいの生態系はどうなってしまったのだろう？　生態系の崩壊どころではない気がする。
テレビで言っていたように地球温暖化が原因なのだろうか？　だとするとまた太陽か、ここでも太陽が悪いのか。
もう全部太陽の所為でいいや。この公園でのエンカウント率が以上に高いのも太陽が原因だろう。
そんなどうでもいい事を考えていたら三毛猫が食べられていた。
「うそやん」
突然粘性生物が扇状に広がったかと思うと、一瞬して三毛猫を包み込んでしまったのだ。
予想外の自体ばかりで、俺は先ほどから微動だにできていない。
苦しいのか取り込まれた三毛猫は、粘性生物の体内で足掻いていた。
だがすぐにその体はどろどろと溶け始め、やがてその名残も粘生成物の中から完全になくなってしまう。
粘性生物が半透明なので、三毛猫の最期が細部まで見えてしまい

気分が悪くなった。
悲しいよりも、憤りよりも、まず気持ちが悪いと思ってしまった自分が相変わらず嫌になる。
そんな俺を、目など見当たらないのに、三毛猫を消化しきった粘性生物の視線が捉えた気がした。

其のニ　４（後書き）

積まれていく小説を眺める日々です。

其のニ　5

瞬間、遅すぎる警報が脳内に響き渡る。
経験値のおかげか。弱者としての本能か。はたまた、目の前の存在が、見た目だけは弱そうだからか。危険を察知するのは遅すぎたが、体は素直に動いてくれた。
急いで起き上がり「萌ちゃん！　プリムラちゃん！」二人に声をかける。
俺と萌では事態に対応できないが、プリムラは昨夜の事件から見てこういった事態に慣れていそうだ。
そういった事を考えながら、プリムラの変身シーンに関しては期待をして振り向くと、
「「ぐぬぬぬぬ」」
お互いの頬を引っ張りあい、ブルドックしている馬鹿ロリーズが目に入った。
「少しは俺のことも視界にいれて！」
こいつら、マジで俺の存在をガン無視していたのね。
まったく、放置プレイとかぞくぞくしてしまうじゃないか……そんな場合ではない。
俺の叫びを聞き、ようやく此方に視線を向ける二人。だがお互いブルドックを止めないところに無駄な意地を感じる。心底どうでもいい。
そして俺の背後に居る粘性生物を見て、目を見開いた。
「ふぁんふぁ！　ほいつふぁ！（なんだ！　そいつは！）」
「あふぁふぁふぁふぁ！　うるーしゅらいむれす！（あわわわわ！　ブルースライムです！）」
奇怪な生物を目にし、猫を被ることを忘れている萌。
この粘性生物を知っているのか、一瞬にして表情が青ざめるプリムラ。

そんな二人は未だにブルドック。
「いいかげんやめなさい！」
「いてっ！」
「きゃう！」
二人の間に無理矢理入り、引き離すついでに小脇に抱え粘性生物から距離をとる。
お互いが限界まで手を離さなかったようで、二人とも自身の頬を涙目でさすりながら俺を挟んで相手を睨んでいた。
もう一度言うが、そんな場合ではない。
仮にも生死がかかっていそうな場面なのだ。おふざけも大概にしてもらいたい。
お前が言うな、とか聞こえない。脇役で一般人でしかない俺は、いつだって生き残るために大真面目です。
粘性生物から充分と思われる距離を取り、これからどうするか思案しながら、抱えていたロリーズを降ろそうとしたら萌がパタパタと手足を振りながら慌て始め、プリムラが俺の服の裾を引っ張り声を上げた。
「だ、大輔！　なんだよあれ！　あんなの見たことないぞ！」
「大輔さん気をつけてくださいです！　ブルースライムは決して単独で行動しません！」
「萌ちゃん落ち着いて。そしてプリムラちゃん、言うの遅すぎ」
どう考えてもブルドックより重要事項だと思われます。
正面の粘性私物の動きも気にしながら、周囲を見回してみると居ますわ居ますわ。
ブランコの脇、ジャングルジムの上、滑り台をずるずると落ちてくるやつ。出入り口にもちゃんと居る。俺の才能もだいぶハッスルしたようだ。
そいつらがじわじわと、此方を追い詰めるように近づいてきていた。
何も考えずに出口へと逃げていたら危なかったかもしれない。だ

が、このまま何もせずにいても刻々と事態が悪化していくだけだ。
どうすればいい？　最善は何だ？
先ほどのにゃんこ捕食風景を思い返す。
酸か毒かわからないが、捕まらなければどうにかなるだろうか？
なら得物を持ってすれば俺でも時間稼ぎくらいならばできるかもしれない。
それとも――また、プリムラに頼るか。
また、この少女にすべてを委ねるしかないのだろうか。
「うげー、キモチわりーなあいつら。大輔、ヤっちまえよ」
「簡単に言ってくれるね萌ちゃん。あんなんでも結構やばそうなんだよあの粘性生物。あと、猫被るの忘れてるよ」
「うわぁ、怖いよ。大輔さん、萌のためにやっつけて」
「もちろんさー！」
萌に頼られてしまっては、俺が逝くしかないだろう常考。
覚悟を決めて両脇のロリーズを降ろそうとしたらプリムラが俺の腕をがっしりと掴み「ダメですよ！」慌てた表情で此方を見上げてきた。
「プリムラちゃん？」
「ダメです！　ブルースライムは大変危険な魔獣です！」
そして表情を微笑みに変え、
「大丈夫です、大輔さん。この数のブルースライムなら、たぶん倒せるですよ」
「……プリムラちゃん」
俺は何と答えればいいのだろうか。
確かに、あの時のプリムラを見た限り、この粘性生物が相手なら倒せなかったとしても逃げる事程度は余裕そうではある。
俺が余計な事をして足を引っ張るよりかは、プリムラに任せてしまったほうがいいのだろう。
きっと、それが最善ではある。
だが、そんな事はプリムラ一人に任せることへの免罪符にもなら

ない。なってはならないのだ。
誰も守れないのは、彼女を守れなったのは、すべて俺が弱いのが原因なのだから。
自身の無能さに顔を歪めていると、プリムラは俺の頬をそっと手を伸ばし続けた。
「わたしは大丈夫ですよ。それにわたし決めたのです！　この事件が終わったら大輔さんのお家の近くでお花屋さんを開こうと思っているのですよ！」
「プリムラちゃーん！」
人、それを死亡フラグと言う。
自身の胸元に手を入れ「頑張るです！」と張り切っているプリムラを絶対に離さない様にホールドする。
変身しようとしたら、どんな手を使ってでも阻止する所存です。
一先ず自身の胸元を覗き込んでいるプリムラの胸元を覗こうとしたら、萌の強烈なアッパーを喰らったので断念。その体制でこの威力を出せるとは、松本萌、恐ろしい子。
両手がロリで塞がっていて痛い箇所がさすれないので、二人をその場に降ろそうとしたらプリムラが焦った表情で手をパタパタと振りながら見上げてきた。
「あわわわわっ！　大変です大輔さん！　魔道石を途中で落としてきちゃったです！　これでは変身できないですよ！」
「それは僥倖」
泣きそうな目で「全然良くないですよー」としょんぼりしているプリムラには悪いが、彼女のドジっ子スキルに感謝である。
いや、まだ安心できない。確かにプリムラが戦闘で命を落とす危険は下がったが、これもある意味死亡フラグ強化ではあるのだ。
考えようによっては、プリムラが戦えないことによって俺達の生存確率が大幅に下がったことになる。
粘性生物の包囲網は大分狭まっていた。
下がったどころではないか。これは詰み、だろう。

あれほどの力を見せたプリムラが、この粘性生物を見ただけで顔を青ざめさせたのだ。それだけでこいつらが見た目以上に恐ろしい存在だと理解できる。
そんな中、戦力として数えられるのは俺一人。そもそも俺を戦力として数えている時点でこのパーティーのオワタ感がハンパない。
とてもではないが、俺一人でこの状況を打破できるとは思えない。
三人が無事に生還するのは、ほぼ不可能だろう。進退窮まるとは、こういった事態を言うのだろうか。
両脇のロリを見る。
クエッションマークを散りばめ、未だに自体を良く理解していない様子の萌。
表情から血の気が引き、涙目で俺の腕を強く掴むプリムラ。
そんな二人を眺め、小さくゆっくりと息を吐いた。
覚悟を決めるには、彼女達だけで充分すぎるほどの条件が揃っていた。

其のニ　5（後書き）

絵がうまくなりたいです。

其のニ　6（前書き）

物語の確信に少しずつ迫っていく、みたいな文章力がほしいです。

其の二　6

俺では二人を抱えてこの包囲網を突破できるとは思えない。
無理に逃げようとして、三人揃ってお陀仏は最悪の結果だろう。
なら、俺が粘性生物の注意を引きつけ、彼女達の逃げる時間を稼ぐしかない。
二人が逃げてくれれば、助けも期待できる。
それに俺一人なら自由に動き回れるのだ。楽観的に考えれば、相手は所詮粘性生物。アメーバーの親戚程度、逃げ切れるかもしれないし俺でも倒せるかもしれない。
やるべき事は決まった。
至極明解。ただ時間を稼げばいいだけである。
さぁ、覚悟を決めよう。
今一度、『大輔秘密道具その八』を使う覚悟を。
正直、昨日の今日で踊り子の衣装を着る羽目になるとは夢にも思わなかった。
異世界では普段着だったが、さすがの俺も此方の世界で毎日着ようとは思えない。
これあれだよね。敵の注意を引き付ける事に関しては問題ないと思うけど、その後誰か助けに来てくれたとしても、その人が目にするのは粘性生物の中心でブラ着けて踊っている変態としか言いようのない男だよね。
助けに来てくれたはずの人が、さらに助けを求めてポリスメンを呼ぶ。
粘性生物を何とかできたとしても、俺の補導は免れまい。
だが、命に比べれば安いものだ。俺の経歴に修正不可能な傷がつく代わりに、少女二人の命を助けられるかもしれないのならば、やらない理由はあるまい。
周囲の粘性生物を見る。

何を警戒しているのか、今はある一定の距離を保ちうねうねしていた。
好都合だ。
俺は自身の考えを二人に話す。
「二人とも、俺が粘性生物の注意を引きつけるからその間に何とか逃げて。そして、できれば助けを呼んでほしいな」
それに対し萌は『何言ってんだこいつ』みたいな表情を浮かべ、プリムラは悲哀に満ちた表情を浮かべた。
「何言ってんだお前？」
表情に浮かべるだけではなかった。俺の悲壮な決意を少しでもいいので感じ取ってもらいたい。
プリムラが居なかったら俺は挫けていたかもしれない。
プリムラが俺の服の裾をおもいっきり引っ張る。そろそろ裾が伸びそうだ。
「ダメです！　大輔さん死んじゃうですよ！　大輔さんは頑張って逃げてください。その隙はわたしが――」
「それこそダメだよ、プリムラちゃん。変身できないプリムラちゃんよりきっと俺のほうが強いしね」
「――うぅ」
黒い獣戦を見る限り、変身していないプリムラは単なるロリである。
まだ俺の方がマシであろう。
それに、俺だけが助かるつもりならばとっくに二人を囮とし逃げようとしている。
そんな事はできないと、端から決まっているが。
何度も言っているので聞き飽きていると思うが、俺は決して小さな女の子を見捨てられないのだ。
そう、見捨てられないのだ。
だから「無視すんな！　この！　この！」無視して悪いとは思っているからそんなに殴らないで萌。

痛いから。結構痛いから。予想以上に力あるんだね。
お願いだから追い詰められている現状を理解してください。そして逃げることだけを考えてください。
――まぁ、どんな状況になろうと、どんんな犠牲を払おうと、萌だけは生き残らせて見せるが。
プリムラの何かを押し殺したような声が届く。
「……わかりましたですよ。おそらく大輔さんに抱えられたときに落としたと思うので、拾ってすぐに戻ってくるです」
下を向いてしまったプリムラの表情はわからないが、こんな状況になってしまった元凶の一端はわかった。
つまり俺の自業自得ですね。
プリムラが変身道具を落としてしまったのは、俺がパトカーのサイレンと般若面のご婦人に驚き逃げ出したあの時のようだ。
本当、俺って碌な事しないな。
自嘲めいた笑みを浮かべる俺を「よくわかんねーけど、早くあのキモイのなんとかしろよー」小突く萌。
俺だって何とか出来るなら何とかしたい。だがあいつらは見た目に反して、ゲームなどに出てくる雑魚キャラではなさそうなのだ。
よく見てみ萌。あの粘性生物の触手から出てる液体。ジャングルジムとか溶かしてるから。
どう考えても初期装備の木の棒とかじゃ倒せない。
しかも俺が装備できるのはブラと腰巻。
下手したら雑魚キャラも倒せないだろう。
事実、異世界では一匹も敵を倒せていない。レベルとかあったら、最初の村から最終戦までレベル一で貫き通したある意味猛者だ。
とんでもない縛りプレイである。
閑話休題。
とにかく自分の仕出かした事の尻拭いだ。絶対に二人だけは生きて逃がさなくてはならない。
プリムラはともかく、萌はもうあれだ。説明とか無理そうなので、

向こうに武が居たよ、とでも言えばいいだろう。
そうすればすっ飛んでいくに違いない。
というわけで、
「俺が合図したら、決して振り向かず公園を出るんだよ。そしてなるべく遠くまで逃げて」
「大輔さん……すぐに、すぐに戻ってくるですよ！　だからそれまでっ」
「大輔ー、喉かわいたからどっか喫茶店行こうぜー」
「萌ちゃん、今駅前の喫茶店に武が居るってよ」
「やっぱ腹減った」
どないせいっちゅーねん。
「プリムラちゃん。萌ちゃんの事お願いね」
「大輔さん、絶対に死なないでくださいです」
「ファミレス行くぞ大輔」
「……」
このロリーズ、お互いがお互いを無視し始めていないだろうか？
萌とか完全に素で離している。
なぜだ。なぜ俺が必死にシリアスな雰囲気を作り出そうとすると、すぐに混沌とした雰囲気になる。
どう考えても、今この場はふざけていられる場合ではないだろうに。
もういい。もう、自分の心の中だけでもシリアスにいこう。ロリーズは一先ず無視して話を進めなくては。
「そして一緒にお花屋さんを開くですよ！」
さぁ、覚悟を示すときだ。
「歩くのメンドイからオンブな」
命を懸けるだけの意味があるのだから、命を懸けた意味がある結果を残そう。
「わたしはロレイヤのお花が好きなのですが、大輔さんは好きなお花とかあるですか？」

二人が助かってくれれば俺の勝ちだ。
「なぁ大輔ー。萌なチョコレートパフェとストロベリーパフェ食いたいんだけど」
どちらかが助けを呼んできてくれるまで生き残れれば、皆の勝利となる。
「あっ、ロレイヤのお花はわたしの世界にあるお花なんですが、淡い青色のお花がとても綺麗なんですよ」
これがどのような『事件』で、何に巻き込まれているかも分からない。
「でも二つも食いきれないから、お前がチョコレートパフェ頼め。それで半分ずつにしようぜ」
だが、どうせならハッピーエンドを目指そうじゃないか。
「本当は違う世界に持ってきてはいけないのですが、実は持ってきたのですよ」
この『事件』のハッピーエンドの条件など知らない。
「……そういえば、お前工藤彩音って奴の仲いいのか？」
それでもこの場を生き残り、その後萌が望むようにファミレスでも行ければ俺達にとっては充分すぎるほどハッピーエンドだ。
「大輔さんに見せたいので、エミリアさんに内緒で今度持ってくるですよ」
今すぐ逃げ出したい。足だって震え始めている。実際は覚悟なんてできていない、いつも通りの俺だけど。
「ファンクラブの奴に聞いたんだが、お前とよく話してるって」
その時を想像するだけで、きっと頑張れる。未来に希望を持てる。
「小さなお店でいいです。ゆっくりした穏やかな日々でいいのですよ」
だから、脇役で一般人でしかない俺にだって、見せ場の一つや二つあったっていいだろう？
「浅井の事か？　何話してんだ？」
見せてやるよ、ストーリーテラーさん。こんな俺でもやる時はや

るってことを。
何かいろいろ言っていた二人の顔を一度見て、自身を鼓舞し、踊り子の衣装に着替えるため両脇の二人を降ろそうとした瞬間――
空から降ってきた幾千もの剣に粘性生物が貫かれた。
……偶に夜寝る前とかに考えるのだが、俺の覚悟って何なのだろう？

其のニ　6（後書き）

連休が欲しいです。
とりあえず好きなだけ寝たいです。

幕間（前書き）

そろそろシリアスタグがついている意味を示さなくてはならないと思っています。

幕間

浅井武は基本、幼馴染であり親友である山田大輔の事を第一に考える。

その次に山田の妹ともう一人いた幼馴染。自分の事は二の次で、それ以外の他人はどうでもいいと、わりと本気で浅井は思っていた。

浅井と山田が異世界に召喚された時も、彼はまず山田の安全を第一に考えたし、異世界を救ったのだって結局のところ山田を無事元の世界に還す為である。正直彼にとって異世界の住人が死のうが、異世界が滅ぼうが知ったこっちゃなかったのだ。

そもそも異世界に行った事すら、それ事態が山田の為を考えての事である。

今だ異世界の住人と付き合いを続けているのも、いざと言うときの『保険』でしかない。

とにもかくにも、浅井武という男は山田大輔の事が好きだった。

だてに山田と同じ高校に通うためだけに、わざわざ実家を出て遠く離れたこの先乃宮町まで来た猛者ではない。

夏休み早々、異世界から呼び出しをくらい嫌々ながら『これも大輔の為』と自身に暗示をかけ行ってきたが、やっぱり大輔と遊びたいと可愛い姫様より山田を選び夏休み早々に帰ってきた変態でもなかった。

そんな浅井は、今日も今日とて山田の為を思い行動していた。

「認識阻害系と防御系の結界かな」

月夜の晩。

先乃宮町の隣町にある廃ビルを見上げながら、浅井武は呟いた。

元に世界に帰って来た浅井は、何よりもまず山田に会いに行こうとしたが、工藤彩音の『才能』によって山田に予想以上の危機が迫っている事を知り、すぐさまそれを阻止するために動き出した。

だが、毎度の如く浅井はどうやっても山田が居る現場に介入する

事ができなかった。
なので全ての鍵を握る人物に会いに行ったが、これまた毎度の如く肝心なときに会う事もできない。
その時点で浅井は表立って動く事を諦めた。
会えないという事は、向こうが会う気がないということだ。そうであるのなら、奇跡が起きたとしても浅井が会う事はできない。
彼女は、奇跡程度ではどうしようもない相手なのだから。
もしかしたら浅井が夏休み早々異世界に行かなくてはならなくなったのも、彼女の仕業なのかもしれない。
彼女は浅井が本筋に関わる事を嫌うので仕様が無いことなのだが。
「案外脆そうだね」
そう言って浅井が手を伸ばすと、硝子の割れるような音が響いた。
「本当に脆いね。この程度が主流なら上位のレベルも知れたものだよ」
二層の結界を意図も簡単に破った浅井は、何事もなかったように歩を進め、廃ビルに入っていく。
山田の為に強くなると決めたときから、浅井の強さに上限は無くなったのだ。この場合、愛は人を強くすると言ってもいいのだろうか。
そんな親友思い、基変態の浅井が廃ビルの自動ドアを手動で開け中に入ると、其処は異様は光景となっていた。
「これは驚いた」
元となったビルの構造が想像できないほどに改造された内装。
至る所に伸びるコードに、所狭しと置かれた恐らくはコンピューターの類。
中でも目を引くのは、壁の両端をある一定の間隔で置かれた大小様々なカプセル。
とても外面の廃ビルからは想像もできない内装だった。
だが――
「これは『物語』の人物の仕業じゃないだろうね」

浅井を驚かせたのは別の件である。
それは、
「まさか、すでに破壊されているとは」
それら、改造された内装がすべて破壊されていたことに、である。
至る所に伸びるコードは、すべて千切られ、所狭しと置かれたコンピューターの類は一つも画面を映さない。
壁の両端に一定の間隔で置かれた大小様々なカプセルは一つ残らず割れていた。
そして、あたり一面を彩る極彩色の血と肉片。
地味に電気は生きているらしく、それらの光景が余すところなく見える。
其処は、地獄絵図と言っても差し支えはないであろう様相を催していた。
そんな中、浅井はやれやれ、と言った感じで肩をすくめる。
「僕を動かしたくなかったか、動かすまでもなかったってことか」
浅井はこの光景に対して特に思う事はない。本当に軽く驚いた程度である。
強いて言うのなら、自分の力で山田の為に何もできなかった事が悔しいくらいだった。
「それでも、事を成した人物を確かめるくらいは許されるかな」
血溜まりと肉片の中を、何も思うことなく歩む。
あからさま過ぎる地下室への扉を開け、降りていった。
「僕以外に動く人物。新たな存在といえば……」
階段を降りきり、薄暗い廊下を歩きながら浅井は思考を続ける。
思考しているが、自身の歩む先に続いている自分の倍はある血できた足跡である程度は予測できているのだが。
やがて、辿り着いたある一室の扉を開けると、其処に居た存在を見て浅井は自身の予測が当たっていた事を知る。
額から生える二本の角。
血肉を貪り、鮮血に染まった鋭い牙。

今だ引き裂いた者達の血が滴る鋭利な爪。
そして、浅井の倍はある体躯。
赤い、紅い鬼。
今だ何かを喰っている、そのおぞましい巨体に微笑みかけ、浅井は声をかけた。
「こんばんは――」
鬼の瞳が浅井を捕らえる。
感情の窺えない、無機質な瞳に射抜かれても浅井は動じることなく続けた。
「――綺鬼ちゃん」

幕間（後書き）

最近一人棒倒しにはまっています。

幕間　2（前書き）

久しぶりの二連休。
きました。遂にきましたよー！
ひゃっほーい！

幕間　2

浅井のその言葉と同時に、紅い鬼の姿が歪み始める。
そして数秒と経たないうちに、其処に居た巨躯の鬼は小さな少女へと変貌した。
肩口で切りそろえられた髪に幽霊のように白い肌。服装は現代日本では浮くであろう赤い着物。
名を綺鬼という人外の鬼。
「……こんばんは」
少女の姿となった綺鬼は小さく呟き、ぽいっ、と今までむしゃむしゃと食べていたものを投げ捨てる。
投げ捨てられたソレ――白衣を着た男性と思われる者の元一部は、嫌な音をたてて紅い液体と内容物を床にぶちまけた。
ソレを見て浅井は眉を顰める。さすがの浅井も、無残な死体を前に気分を悪くしたようだ。
その表情のまま綺鬼を見て、少し声色を厳しくして言う。
「ご飯を残しちゃだめだよ、綺鬼ちゃん。ちゃんと全部食べないと」
そうでもなかった。
「ご飯を食べるときは、他の命を頂き自身が生きる糧とする事に感謝しないと」
その表情は、子供のためを思って叱る優しい大人のそれだ。
言っている事は確かに子供のためとなる言葉だが、まずはそれ以外に注意すべき事がありすぎると思われる。
だが、そんな事を浅井は気にしない。
他人がどこで、何人死のうと彼の心には欠片も響かない。
彼は身内しか見ていない。
身内の心配しかしない。
だから、今彼が気に懸けているのは新たに身内に加わった目の前

の少女の教育だけだ。
小さいうちからの躾が大事だと浅井は考えている。それが子供の将来のためになると。
親が子供に甘すぎるのなら、嫌われ役は自分が買って出よう。
「……」
そんな浅井の気持ちを知ってか知らずか、綺鬼はガン無視だった。
ぷいっ、と可愛らしくそっぽを向き、袖口で他者の血に汚れた口元は拭っている。
その子供らしい様子に浅井は内心苦笑し、今度は素知らぬ様子で呟くように言った。
「あぁーあ、知らないよ？　大輔に怒られても」
綺鬼が大きな反応を示す。
浅井の言葉を聞き肩を大きく揺らし、大きな目を更に大きく見開き浅井を凝視する綺鬼。
予想以上の反応に、浅井は内心苦笑を深くしながら続ける。
「食べ物を残す子は、大輔嫌いになっちゃうかもよ？　後良く噛んで食べない子も――」
浅井の言葉が終わらないうちに、綺鬼は自身が放り投げた遺体へと駆け寄り食事を再開する。
あまりに必死な姿に、少し意地悪だったかな、と彼は思いながら、もぐもぐと良く噛んで元白衣の男性を食べている綺鬼を見る。
やはり、どんなカタチであれ子供というのは親に怒られたり嫌われる事を最も恐れるものなのだろう。
それを無闇に煽ってしまったのは、さすがにやり過ぎだったと浅井は少し反省した。
だがすぐに気持ちを切り替え、自身が聞きたい事を聞くために、少女の傍に目線を合わせしゃがみ込む。
彼は反省はしても後悔はしないタイプだった。
はむはむと最後の足の指と思われるものを綺鬼が食べきるのを見てから、浅井は少女に声をかける。

「ところで綺鬼ちゃん、どうしてこんな所に居るんだい？　子供がこんな夜中に一人で居たら危ないよ」
危ないのは綺鬼本人か、それとも他者か。真意は言った本人である彼にしかわからないが、一般的な意見としては他者が危険だ。捕食的な意味で。
心底心配している浅井を大きな瞳に映し、綺鬼は呟くように答える。
「……言われた」
「言われた？　誰にだい？」
「……おばちゃん」
「おばちゃん……か」
今度は素直に受け答えしてくれる綺鬼の言葉を反芻する。
綺鬼は別段浅井のことを嫌っているわけではない。ただ先ほどは、親でもない人に注意されたのが気に食わなかっただけなのだ。
まぁ、多少人見知りなので親以外が相手だと口数が少なくはなるのだが。
その事を知っている浅井は不思議に思う事もなく、綺鬼の言葉を元に思考を巡らす。
「何て言われたんだい？」
「……此処邪魔だって」
「それだけ？」
「……此処なくなれば、パパとママとわたしで三人で暮らせる日が早くなるって」
「……そう」
そうならば本当にどれだけ良い事か、と思い浅井は綺鬼の頭を優しく撫でた。
擽ったそうに目を細める綺鬼に彼は暖かい気持ちになりながらも、思考は冷え渡り冷静に冷徹に研ぎ澄まされていく。
浅井は前回から、違和感を感じていた。
今までと比べ、彼の親友が『物語』の中心に近すぎたのだ。

あぁまで中心人物と関わりを持たした理由が浅井にはわからない。聞いたところで彼女は答えてもくれない。
そして何より、この少女の存在。
なぜこの子が生み出される必要があったのか。なぜ、わざわざ『物語』が致命的なまでに歪んでしまう存在を生み出したのか。
これは『物語』が歪んでしまった結果か？　彼女の意思か？　それともう一人の幼馴染――莉香の意思なのだろうか？
わからない。どんなに考えても浅井には予測しかできいないのだ。
それでも、それでも今回は見過ごせないかった。違和感どころではない。
関わりすぎだ。もうすでに『物語』の中心舞台へと片足を入れかかっている。
何の力もない山田には危険すぎる舞台だ。
だからこそ、浅井は少しでも親友の身に降りかかる危険を減らそうと、この場に来たと言うのに、すでに彼女の指示で綺鬼が居た。
中途半端だ。あまりに無駄が多すぎる。
此処が邪魔なのなら、なぜ浅井に頼まない。綺鬼に頼るにしても、なぜもっと早く動かさなかった。
この部屋に辿り着くまでにあった大小様々なカプセル。おそらくは何らかの生物が入っていたと思われる培養層。
確かに壊されていた。綺鬼によって破壊されたのだろう。中に入っていた生物も綺鬼によって殺されている。
だが、だがすでに中の生物が出されていたと思われるカプセルも何個かあったのだ。
それはこの部屋にある、一際大きなカプセルもそうである。
訳が分からない。
以前まではそんな事はなかった。
浅井と彼女は、確固たる一つの目的を持って共に頑張ってきた。
それが今、僅かながら齟齬が発生してきているのかもしれない。
どんなに精密に作った歯車も、いずれは噛みあわなくなってしま

うように。
「これは、一度ちゃんと話し合わないとね」
思わず呟いてしまった浅井の声に、綺鬼が不思議そうに小首を傾げる。
それに彼は「なんでもないよ」と答え「そういえば」と無理に話題を変え誤魔化した。
この少女に、彼は個人的に聞いておきたい事があったのだ。
「綺鬼ちゃんにとって今の大輔は父親かい？」
それに対し綺鬼は首を左右に振る。
「なら、母親かな？」
首を左右に振る。
「そう……それなら、両親？」
少女は――頷いた。
普通なら意味の分からない会話であるが、二人の間では通じ合っているようだ。
綺鬼の答えに、浅井は俯く。
彼にとって、少女の答えはあまり認めたくないものであった。
なぜこのような事態になっている？　こんなこと誰も望んでいないはずなのに。
まして、莉香が自分の意思で望むとはとても思えない。
――なら、やはり。
浅井は俯いたまま小さく、傍に居る綺鬼にも聞こえないほど小さく呟く。
「……いったい何を考えているんだい？　華ちゃん」
彼の問いに答えてくれる存在は、居なかった。

幕間　2（後書き）

寝たー。久しぶりにたくさん寝れたー！
しかも寝過ごしても明日まだ休みだー！
うほほーい！
ヒャッハー！
うぼぁー！

其の三（前書き）

何なんですかね、昨日の私のテンションは。
明日仕事だっていうのに、はしゃいじゃって馬鹿みたいです。

其の三

突如、空から降ってきた幾千もの煌びやかな剣。
それらは俺達を包囲していた粘性生物を一匹残らず串刺しにした。
ついでに俺の覚悟も粉砕した。
そして、結果的に巻き込まれた遊具たち。
砕かれた滑り台。崩れゆくジャングルジム。消し飛んだ砂場。
最近、公園で遊ぶ子供達を見ないのも相まってか、哀愁を感じさせる。
近頃の小さな子は、やはり家でゲームをやっていることが多いのだろうか？
公園で遊んでいる幼女を眺める事が好きな俺としては悲しい限りである。
「結界……いつのまに？　それにこれは――エミリアさん」
プリムラの声に現実へと引き戻された。いつだって『事件』は俺の事を無視して進んでいく。ついでに結界も、いつだって俺の事を無視する。
辛い現実に涙を流すまいと、プリムラの視線を追い空を見上げた。
直後、夏の日差しに瞳を焼かれながらも、目を見開く事となる。
――数人の少女が空に浮いていた。
それぞれ色鮮やかな髪。髪の色に合わせての彩色か、個性的な衣装。
中でも目を引くのは、少女達の中心に位置し、金色の髪をツインテールにした少女だった。
なぜなら、強さを示すかのように、または守るように、少女の周りには数本の剣が浮いていたからだ。
この凄惨な場を作り出したのは、間違いなく彼女だろう。
願わくは、金髪ツインテが件のエミリアではありませんように。
俺が場の流れに全てを委ね、浮いている少女達のパンツを眺める

作業に勤しんでいると、金髪ツインテが降りてきた。
それに合わせ、他の少女達も降りてきてしまう。ガッデム！
俺達の眼前に並び立つ少女達。年は金髪と緑が高校生くらいで、他は良くて中学生といったところか。
それにしても金、赤、緑、紫、ピンク。
正直近くで見ると、プリムラのブルーブラックと金髪以外は厳しいものがある。現実で受け入れられる色ではない。
異世界でもここまで色鮮やかではなかった。
金髪ツインテが俺に抱えられているロリーズを見て、俺を睨み、もう一度プリムラを見て声を発した。なぜ俺を睨んだし。
「勝手な行動は許さないと言ったはずよ。プリムラ」
「あ、あわわわわ」
明らかに怒っている様子の金髪ツインテに、あたふたし始めるプリムラ。
そのまま、あわわわわ言うだけで何も答えられず涙目になっていく。
現状をほとんど理解できていないが、どんな理由があれ知り合いと言ってもいいであろうロリが怒られ泣いてしまうのを見るのは忍びない。
ここは一つ、俺が悪者となって代わりに怒られるとしよう。
とりあえず、金髪ツインテはプリムラが勝手に行動した事を怒っているらしいので、俺がプリムラを連れまわしたという設定でいく事にする。
「会話に割り込んですまないが――」
「うるさい。死ね」
「――生きててすみません」
相手が自身より少しでも強そうだと、すぐに意思に反して口から謝罪の言葉が出撃してしまう。
これは俺が弱虫だからではない。単に俺が典型的な日本人だからだ。俺はそう信じている。

泣きそうだったプリムラが一転、両手を上げ足をピンと張り怒りを全身で表現しながら、がー、と金髪ツインテに反撃した。
「し、死ねは酷いですよ！　エミリアさん！　大輔さんは何も悪くないです！　むしろわたしを守ろうとしてくれたですよ！」
「わかったわ。とりあえずこいつを串刺しにして八つ裂きにすればいいのね」
「何一つわかってないうえに、何一つ話が噛みあってないです！」
今度は手足をじたばたさせながら、もどかしさを全身で表現するプリムラ。
偏見かもしれないが、プリムラが正論を言いツッコミ役となるのは珍しい事なのではないだろうか。
そしてプリムラの発言で確定。予想は最悪の方向で当たってしまったようだ。
この、無数の剣を俺に向けている金髪ツインテはどうやらエミリアらしい。
高感度マイナスどころか、殺意マックスから始まるとかどう考えても無理ゲー。
まるで親の仇を見るかのごとく、俺の事を睨みつけている。まったく、興奮してしまうではないか。
とは言っても、もちろん死にたくはないのでいつでも逃げられるようにしとかなくてはならない。
理由も分からず串刺しの刑はごめんである。いや、やはり理由がわかったところでごめんである。
敵視されているのは俺だけのようだから、ロリーズは置いていっても問題ないはずだ。プリムラの知り合いのようだし、おそらく仲間の魔法少女達であろう。
そう考え、逃げやすいように両脇のロリーズを降ろそうとした瞬間――
「無数の剣……綺麗な金髪……エミリア？　エミ……エ、エリー？」

――萌の言葉に、場の雰囲気が一変した。
俺達の中で、もっとも顕著な反応を見せたのが金髪ツインテ改めエミリアだった。
エミリアは驚愕に染まった表情で萌を見、すぐに複雑な表情へと変わる。
悲しんでいるのか、喜んでいるのか。俺程度では人の表情で内面など見極められるわけもない。
「あ、あれ？　萌何言ってんだろぉ？　えっ、てーかエリーって誰だ？　わけわかんねー」
言った本人も大分混乱しているようだ。頭を抱え込んでしまっているし、中途半端にしか猫を被れていない。
そんな萌に、複雑な表情のままエミリアが手を伸ばそうとし、その手を緑髪の少女につかまれた。
緑髪の少女はエミリアに向かって小さく頭を振り、そっとその手を両手で包み込む。
俺でもわかるぐらい悔しそうに唇を噛み、俯いてしまうエミリア。
その光景を何も言わず、見守る他の少女達。
じたばたの途中で固まり、ぽけーといった表情で俺を見るプリムラ。
補習の宿題どうしようか、と悩む俺。
そして訪れる沈黙。
場を何とも言えない空気が包み込む。
全力で蚊帳の外である俺にはどうしようもないので、一先ず目先の問題について考える事にした。
実は両腕が限界を迎えそうなのだが、俺はどのタイミングでロリーズを降ろせばいいのだろうか？

其の三（後書き）

はぁー。

其の三　2（前書き）

ひっそり連載を続け、ひっそり更新です。

其の三　2

先程から何度となく降ろそうとしているのだが、どうもうまい具合にタイミングが合わないのだ。
タイミングとか意味が分からないと思うかもしれないが、安心してほしい。俺も意味が分からない。
おそらく俺の潜在意識的なものが、何かと理由をつけてロリを離さないようにしているのだろう。
侮りがたし。俺のロリコン魂。
さて、アホな事を考えていないでいいかげん二人を降ろすとしよう。
腕が痺れてきたというのもあるし、何というか、現状を客観視したらあまりよろしくない光景なのだ。
傍から見たら、幼女を誘拐した変態を遂に追い詰めた正義の魔法少女達にしか見えないだろう。
一般人に見られたら俺の世間体は終わりだ。
まぁ、この結界とやらの中に一般人が俺と萌以外に居たとしたらだが。
ドジっ子プリムラが張った結界ではないらしいが、それでも俺は結界シリーズを信用できない。
何度結界と名のつくものに仲間はずれにされた事か。苛め、ダメ絶対。
そもそも俺と萌がこの場に居る時点で、この結界もだいぶアウトのように思える。
昨日プリムラが用いた、隔離系の結界と同じとは限らないが、では他にこの場で意味がありそうな効果がある結界とはどのようなものだろうか？
……。
数秒考えて何も思いつかなかったので思考を放棄する。

考えてもわからない事は考えたところで無駄だ。
そういえばドジっ子プリムラで思い出したが、何故俺に昨日の記憶があるかプリムラに聞いていなかった。
せめて何かしらのちゃんとした理由があれば、昨日の出来事もぎりぎり茶番劇にならずにすむと思われるのだが。
ちょうどいいので、俺と同じで場の雰囲気に着いていけていない様子の本人に聞いてみる事にする。
「ところでプリムラちゃん、ちょっといいかな？」
「あっ、はい！　どうしたですか？」
話し相手ができて嬉しいのか喜色満面のプリムラ。
「昨日の最後の会話からして、俺と君が当たり前のように話しているのは不思議だよね？　俺は何で昨日の事を覚えているのかな？」
「えっ？　あ……あわわわわっ！」
今更、その事に気づいたのか吃驚仰天のプリムラ。
「あれ？　もしかして忘れてた？」
「そ、そんな事ないです！　覚えてたですよ！　えっ、でも何で大輔さん普通に覚えてるですか？」
「わからないから聞いたんだけどなー」
質問を質問で返すのはいけないことだと思います。
どうやら昨日のやり取り事態、プリムラは忘れていたらしい。
表情がころころと変わり見ていて可愛らしいが、この子の脳に異常がないか心配である。
俺の哀れみを含んだ視線にプリムラが気づいたようだ。
「やめてくださいです！　そんな可哀想な子を見るような目で見ないでください！　ちゃんと、最初はいつ話しかけようかとタイミングを見計らっていたです！　でも、この本の印象が強すぎてちょっと忘れていただけですよ！」
プリムラは両手を振り回し必死に弁解した後、スカートの中から薄い本を取り出した。
まさかの再登場。『武の秘密の放課後～僕の大輔～』。

「理解できない」
「あわわわわっ。つい出しちゃったですよ！　違うです！　これはあの本じゃないですよ！」
慌てて「これはあれです！　女性誌です！」今一度スカートの中に暗黒物質を戻してしまうプリムラ。
俺が知っている女性誌は、あれほどの澱みきったオーラを出していない。
そもそも何故アレをプリムラが持っているのか謎だ。確かに俺が回収したはずである。
両手が塞がっていて、ウエストポーチの中を確かめられないので言葉による説得を試みることにする。
「プリムラちゃん。何で君がそれを持っているのかな？」
「な、ななな何の事を言っているか分からないです！」
「今スカートの中から出した本の事だよ」
「な、何を言っているですか大輔さんは！　す、スカートの中に物をしまう事なんて出来るわけないですよ！」
「言われてみればそうだね。じゃぁ、その事も確認してみよう。ちょっとお兄さんにスカートの中を見せ――なくていいよ」
瞬間、プリムラとは逆側から、視界の端に視認できるレベルのオーラを視認。
咄嗟に言葉を途中で変えたが、手遅れ感が半端ない。
これはもう逃げるしかない、と思ったところで、どす黒いオーラを出している人物に、ぎゅっと腕をつかまれた。
命の危険を感じ、全身から冷や汗が吹き出てくる。
警報が脳内に響き渡っているが、俺のレッドアラートは作動するのが遅すぎる。いつもいつも、手遅れになってから騒ぎ出すのだ。
現状唯一ぎりぎり何とか俺の味方と言ってもいいかもしれないプリムラに助けを求め視線を向けるが、さすがのプリムラもこの威圧感に恐怖を感じたのか、俺の服の裾を引っ張り頭から被って隠れていた。

こうなっては敵も味方もない、と考え魔法少女達に視線を向けるが、全員が瞬時に視線を逸らした。
あのエミリアまでもが、吹けもしない口笛を吹こうとしながら空を眺めている。
少なくても俺とプリムラ以外はシリアスな雰囲気だったのに、いつのまにこのような空気になってしまったのだろうか。
こんな事になるのなら、さっさとロリーズを降ろして退散するべきだった。
思い返してみると訳が分からない。数分前、確かにいいかげんロリーズを降ろそうとしていたはずなのに、どういう思考の果てにプリムラのスカートの中を覗くという思考に辿り着いたのだろうか。
自分の思考回路が理解できない。
とりあえず誰も助けてくれないというのは理解できたので、俺一人で特攻するしかないようである。
生唾を飲み込み、おそるおそるオーラの発生源に視線を向けてみた。
笑顔の萌と視線ががっちり合ってしまった。
笑うという行為は（中略）。
何故だろう。萌が俺に向ける笑顔に他意がなかったことがない。
大半が殺意である。

其の三　2（後書き）

終業時間が来たので部署の先輩に私は言いました。
「先輩、定時です」
「あの時計は三時間進んでいる」
なら、私たちは三時間早く出勤している事になりますね。

其の三　3（前書き）

二章のお気に入りキャラはプリムラとエミリアです。
ちなみに一章では犬高橋と中村です。

其の三　3

蛇に睨まれた蛙状態の俺に、萌が「うふふ」と笑いながら声をかけてきた。

「大輔さぁん。今ね、萌結構困ってるんだぁ。なんかぁ、知らない人の名前とかぁ、覚えのない人の顔とか思い浮かんで混乱してるんだぁ」

「そ、そうなんだ。どうしてだろうね？」

「それがわからなくてすごく辛いんだぁ。それなのに……」

そう言って俯いてしまった萌の顔を覗きこむように問いかける。

「それなのに？」

「それなのに――お前は何をしてんだ！　このロリコンヤロー！」

「目が痛い！」

問いかけると同時に怒髪天の萌に目潰しをされた。洒落にならない。

「ぐぁぁぁぁ！　目が！　目に指がぁ！」

感覚では第一関節まで刺さった気がする。

血とか出ていないだろうか？　失明とか怖すぎる。

視界を失った俺の生命線である聴覚に、萌の冷たい声が聞こえてきた。

「自業自得だっつーの。ギャグ補正でなんとかしやがれ」

「なるほど。その手があったか」

「言っといてなんだが、それはないだろ！」

主人公補正はないが脇役の俺にはギャグ補正ならありそうである。それを信じるしかない。

正直、なぜ自業自得なのか理解できないが、ここは紳士サムと生き別れにならなかっただけ良しと思い込もう。

一先ず頬を伝う涙（血とは思いたくない）を拭いたいのだが、変わらず両腕が使えなかった。

左腕は萌にホールドされていて、右腕のプリムラは何を思ったか俺の服を引っ張りぐるぐると体全体に巻き始めている様子。
本当、幼子はどんな物でも遊び道具に変えてしまうからすごい。このTシャツ、伸びきっちゃってもう着れないね。
一度、この子は脳外科に連れて行ったほうがいいかもしれない。
そうして、俺が自身のギャグ補正に祈りを捧げ、萌が恐らくご立腹で黙り込み、プリムラが蓑虫ごっこに熱中する事で一瞬訪れた沈黙を待っていたかのようにその人物は声を発した。
「そろそろ時間ですね」
目が見えないので、誰が喋ったのかわからない。仮に少女Aと呼んでおくことにする。
少女Aの言う時間とは何の時間なのだろうか？　プリムラあたりなら門限があっても不思議ではないが。
「二度と交わらないはずだった運命において、この再会という奇跡に感謝しましょう。二度目となる別れの時間です。皆さん、わかっていますね？」
わかりません。
俺の理解力が足りないのか、喋っている内容が欠片も理解できない。
だが、口を挟むような愚かな真似はしない。何故なら、過去の経験から『皆さん』の中に俺が入っていない事は確定的明らかなのだから。
泣ける。
「今日の再会も、過去の記憶も、今一度すべてなかったことにしなくてはなりません。それが私達、皆で決めた事なのですから」
少女Aが発した不穏な言葉。
その言葉に抱えているプリムラと萌が震えた。この発言に何か彼女達を怯えさせるような内容があったのだろうか？
聞いた覚えのない声なので、魔法少女チームの誰かだとは思うのだが、二人の様子からかなり重要な事を言っていると予想できる。

だが、誰が喋っているかもわからないうえ、内容も理解できないとあっては、俺としてはもう大分どうでもよかった。どうせ仲間はずれだし。
それに、今は自身の未来に直接関わる視力の方が気になって仕様が無いのである。
それでも萌とプリムラというロリが震えているのは見過ごせないので、抱える腕に少し力を込めた。少女達が少しでも安心できるように。
それによって、プリムラの震えは止まり、手を強く握り返してきた。こんな俺でも少女を安心させる事が出来たようだ。
それによって、萌の震えは止まり、手を強く握り返して「指はそっちに曲がらないー！」きた。どうやらドサクサ紛れのセクハラが萌にはばれたようである。
ロリコンという名の紳士は何時だって幼女の味方にして敵なのだ。
「エミリア？」
「わかってるわよ」
先程の少女Aとエミリアの会話が耳に届く。
俺の指があらぬ方向に曲げられている間に、どうやら魔法少女組では話が纏まったようだ。
そして、それを聞いてプリムラが何かに怯えるように慌てだした。
「あ、あわわわわっ。あれです、そうです！　だ、大輔さん！　わたしと一緒に落としてしまった魔道石を捜しに行くですよ！　今すぐに！」
そう言ってプリムラは「さぁ！　さぁ、行くです！」俺の服の裾をやたらと引っ張る。
現状視力が絶望的な俺に探し物を求めるとは、プリムラも可愛い顔してなかなかの鬼畜っぷりである。
そもそも魔道石なるものが俺には何なのかわからなかった。
それに対し、エミリアが訝しげに問いかけた。
「何を言っているのプリムラ？　『女性の大敵（アークエネミー）』も記憶の封印を

――あぁ、そうね。わかったわ」
プリムラの返答を聞く前に、勝手に納得した様子。ちなみに『女性の大敵（アークエネミー）』とは俺の事である。ルビだけを見ればとても強そうだ。
そうして勝手に納得したエミリアは言った。
「『女性の大敵（アークエネミー）』は記憶の封印ではなく、存在の抹消だったわね」
「相変わらず何もわかってないです！」
プリムラのじたばた。反動で俺の腕がダメージをうけた。
「何故俺はそこまで疎まれているのだろうか？」
「しゃべるな。空気が汚染される」
「存在していてすみません」
「また、大輔さんにそんな酷い事言うですか！」
プリムラのほえる。俺は戦闘から逃げ出した。
ぎゃー、ぎゃーと喚き合うプリムラとエミリア。当事者の俺は完全に蚊帳の外である。
見えないので予想でしかないが、他の魔法少女達も口を挿まないところから、二人の様子に呆れているのかもしれない。
それにしても先程から話が進まない。時間がない的な発言があったのだがいいのだろうか？　まぁ、脇役でしかない俺には関係ないことではあるが。
――そうして、俺は後悔する事になる。
無理にでもここで話を進めていれば、また違った結果になったかもしれないのに、と。
後悔という言葉が俺ほど似合う存在は他にいないであろう。
俺はいつだって、事が起きてしまってから過去を悔やむのだ。
「なぁ、大輔。腹減ったから飯食いに行こうぜ」
「萌ちゃん。君は大分重要人物だと思うのだけど、それでいいのかな？」
「何か、いろいろ考えんのがめんどくさくなった」
「それは、主人公がダルイからを理由にヒロインを助けに行かないレベルの問題発言だと思うよ」

ダメだこいつ。早く何とかしないと。

其の三　3（後書き）

最近寒いので風邪にはお気をつけください。

『風炎の退魔士』　※本編ではありません（前書き）

４、１３、４４。
こういったどことなく不吉な数字が、中二病全開だった中学生のとき好きでした。
と、いうわけで４４話は邪気眼さんの設定を公開しちゃいます。

『風炎の退魔士』　※本編ではありません

注意：本編には、ほぼ関係ありません。また以降の記述にはライトノベル『風炎の退魔士』の壮大なネタバレが含まれています。

・ストーリー

世界には人の目には視えない存在と戦う、退魔士と呼ばれる者達が存在する。

主人公の土御門晴真は式神使いとして最強とされる『土御門』一族の本家に生まれるが、修行中に両目の視力を失い、さらに右手にも大火傷をおってしまう。その結果、役に立たないとされ本家から追放をうけた。七年後、晴真は再び『土御門』へと戻ってくると同時に、町の至る所で異界が発生する事件が起き始める。

・登場人物

・主要人物

・土御門　晴真

主人公。幼少時、式神を扱う修行中に幼馴染であるを庇い右手に大火傷をおう。それでも挫けずに頑張って式神を扱う修行に励んでいたが、再び幼馴染を庇い両目の視力を失う。普通の人から見れば不憫すぎる少年だが、一族には『土御門』一族こそ最強と信じている者が多いため周りから見下され、ついには当時当主であった祖父によって十歳の時に本家から追放された。その後、退魔士とはほとんど関係のない分家に身を寄せるが、そこで色々あって符術と炎術、更には風の精霊術の習得にいたる。

十七歳の時に父親から戻ってこないかと言われ了承し、『土御門』へと帰還する。最初、晴美と再会したときはお互い気づいていなかった。

性格は言動や見た目に反して過去の経験からか、大分慎重である。普段から何事も良く考えてから、事を進めるように心がけている。よく他人をからかう様な発言をするが、それも相手とうまくコミュニケーションをとろうとしての発言であって相手を馬鹿にしているわけではない。散々な幼少時を過ごしたためか、見た目に似合わず皆と仲良くしたいとか考えている。また、幼少時の事故が原因で慎重な性格にはなっているが、その事で晴美を恨んではいない。寧ろ、余計な事を背負わしてしまったと悔やんでいる。つまり、基本いい奴。

戦闘は基本、符と風を使った近、中距離戦である。炎術は味方に熱がられたりするかもしれないのであまり使わない。それでも味方が居なく、複数の敵に囲まれたりした場合は辺り一帯を焼け野原にできるなど便利である。

奥の手は右手に封印されている炎鬼の解放と、両目の代わりになっている風の精霊石の力で多くの風の精霊を使役する事である。ぶっちゃけ最強。

・土御門　晴美

晴真の従兄妹。幼馴染。晴真が居なくなった後、一族からは何れは当主候補として期待されていたが、式神に見向きもしなくなる。自身の実力不足が原因だとわかっているが、それでも晴真を傷つけた式神を信用できないため、独学で退魔の方法を学び始める。一族の者から疎ましく思われるが気にせず、やがて五行相生と五行相剋と黒針を用いた独特な退魔術を編み出す。

性格は自身に厳しく、晴真以外の他人に無関心である。過去の経験がトラウマになっており、自信に苦行を強いる事に躊躇いがない。晴真と再会するまでは、自身の所為で不便を強いられているであろ

う晴真の面倒を見るために、とにかくお金を貯めようと考え退魔の仕事を請けまくっていた。そのためか常識に欠ける。晴真と再会し、更に式神葉鬼と仲良くなってからは大分他人にも心を開き始める。しかし晴真第一主義は変わっていない。軽く病デレ。それさえ目を瞑れば、晴真は夢のヒモ生活も夢でないかもしれない。高校の美少女コンテストでぶっちぎり一位を取った事があるらしい。

奥の手は五行相生を使い、自身の身体能力と魔力を大幅に高める技。だが、これは負担も大きいため五分も使い続けていれば自滅してしまう。ただ、使用している間は異形と肉弾戦も可能なほど人を超越できる。

・葉鬼（ようき）

晴真と晴美が再会した高校に居た子鬼。晴真によって晴美の式神となる。『倉橋』一族が仕掛けた儀式魔術『異界想像』によって生まれた異形。人の負の思念から生まれた。そういった存在は普通、人を恨み人を襲うものなのだが、どうやら『寂しい』『怖い』『ぼっち……』などの偏った負の思念から生まれてしまったらしく矢鱈と人懐っこい。そして何より弱い。

・土御門　晴夜

晴真の父親。『土御門』一族の現当主。代々当主が受け継いできた式神前鬼と後鬼を完全に使いこなしており、現在一族最強とされている。大切な息子を追放した自身の父親である前当主が嫌い。毎晩寝る前に早く引退しろと呪詛を唱えていたらしい。

見た目や喋り方に似合わず、性格は温厚。本家も分家もないどころか、出来れば他の退魔士一族とも仲良くしたいと考えている。毎晩呪詛を唱えていたくせに、前当主が病気で倒れた時一番慌てていたのが晴夜。そして前当主が死んでしまった時一番落ち込んでいたのも晴夜。父親の性格は間違いなく息子へも受け継がれている。

・倉橋　泰亜（たいあ）

『土御門』の分家、『倉橋』一族当主の爺。本家である『土御門』を尊敬している。そのため、他の退魔術を身につけ戻ってきた晴真の事を良く思っていない。晴夜よりも『土御門』の将来を心配しているかもしれない。

『土御門』現当主である晴夜の事を認めているが、その甘さが何れ付け込まれる隙になると考えている。その事で何度も晴夜と話し合っていたが、晴夜は変わらないどころか遂には他の意見を必死に押さえつけ息子の晴真を呼び戻してしまう。このままでは他の退魔士一族に付け込まれてしまう考えた泰亜は、決死の覚悟で反乱計画を実行する。最強と名高い『土御門』だが、分家でしかない自分達でも今の『土御門』を追い込むことができるとう事を示し、危機感を抱いてもらうために。

そのため各地の鬼門で異界を発生させ、町全体を擬似的な異界とし、かつて先祖が封印したといわれている邪神を復活させた。

選民思想の塊。

・倉橋　泰真

泰亜の孫。現在『倉橋』最強。復活させた邪神を取り込もうとしたが乗っ取られるというお決まりパターンを見事に成し遂げた人物。一応一巻のラスボス。

巨乳大好き。

・葉月（はづき）

二巻から登場。光明衆（こうめいしゅう）。光明衆が誇る最強の退魔士、暦名（こよみな）１２人の一人、暦名第八『葉月』。光明衆のトップが『土御門』と仲良くしよう的な事を言ったらしく、晴真の高校に編入してきた。常に修行ばかりしてきたため常識に欠ける。遠めに見ている分には可愛い女の子だが、巻き込まれた方としては堪ったものではない。ただ、退魔士としての実力はその名に恥じないもので、晴真をもってして

敵対したくはないと言わしめた。そしてその常識のなさは、晴美をもってして光明衆は仲良くする気がないのではないか、と言わしめた。

戦闘方法は、特殊な素材で作られた五節棍による殴打。それぞれの節に五行説を倣った力が宿っているらしいが、晴美は意味がわからないと言っていた。葉月の戦闘は、葉鬼をもってして鬼だと言わしめた。

・月ノ宮（つきのみや）　上弦（じょうげん）

二巻から登場。『月ノ宮』一族。『月ノ宮』当主に「君は雑鬼にも負ける可能性あって危ないから『土御門』の偵察に行ってきなさい」といわれた悲しい男。『月ノ宮』一族は符術に優れているのだが、上弦が使うとなぜか爆発する。事実、葉鬼にも負けた。だが、他人の生かすことには優れており戦術を組ませるとすごい。かつて晴真に力を授けた人物を知っているらしい。

下弦（かげん）という妹がいるらしい。ロリコン。

・初来（うぶき）　妖花（ようか）

二巻から登場。『初来』一族。初来養成所と言われる殺し屋一族の一人。退魔士や妖と言われる存在にどの程度対抗できるか、という実験のために送り込まれた少女。二巻のラスボス。

・その他の登場人物

・土御門　晴梧（せいご）

個人。晴夜の父。『土御門』前当主。晴真を追放した人物。一族からは厳しく厳格な人物と思われていた。だが、ぞの実体は孫が可愛くて仕様が無い単たる爺様である。まず、修行中に晴真が大火傷を負ったときは周りにばれない様に急いで知り合いの名医を呼び、両目の視力を失った時は何とかして見えるようにしてやりたいと、これまた仕事だと言って周りにばれないように全国の医者をあたっ

ている。この頃から心労が堪り始める。このまま退魔士として生きていったとしても何れは可愛い孫が死んでしまうと考えた晴梧は、周囲には追放だと言って晴真を退魔士とはほとんど関係のない分家の老夫婦に預ける事にした。毎月、晴真の好きな物を買ってくれ、とアホみたいな金額の仕送りをする。晴真が心配で心労がやばいことに。数年後、預けた晴真がとある人物から退魔術を習い始めていると聞き心労がマッハ。

最期まで不器用だった男。

・火ノ宮（ひのみや）　黒炎（こくえん）

『月ノ宮』一族の分家『火ノ宮』一族の人間。今の晴真があるのはこの人物のおかげらしい。

・土御門　晴流（はるる）

故人らしい。

・用語を纏めて説明

・殺魔協会

『土御門』『月ノ宮』『光明衆』『神薙（かんなぎ）』が「お互いの邪魔をしないで仲良く退魔をしよね」的な約定を取り決め、喧嘩しないように互いが互いを監視するための協会。ぶっちゃけ本当に建前のみ。『神薙』とか毎年ある会議にも参加したり参加しなかったり。

・殺人協会

『常磐（ときわ）』『遠野（とおの）』『大神（おおかみ）』『初来』が「お互いの邪魔をしないで仲良く殺人をしようね」的な約定を取り決め、喧嘩しないように互いが互いを監視するための協会。ぶっちゃけなくても建前のみ。毎年ある会議とか誰も参加しない。

・既刊情報
二巻打ち切り。

『風炎の退魔士』　※本編ではありません（後書き）

正直に言いますと、結構無駄に設定とか考えているのですよ、という事を見て貰いたかっただけです。
すみません。

其の三　４（前書き）

此方は本編です。

其の三　4

会話の流れから、重要人物と思われる萌がこのやる気のなさである。この『事件』のグダグダ感が半端ではない。
だが、グダグダで終幕を向かえてくれるほうが俺としては有り難かった。
感動的な結末などいらない。拍手喝采など望まない。
呆れるような終わり方でいい。ブーイングの嵐でも構わない。
誰も泣くことなく、誰も犠牲にならないのなら、それに越した事はないのだから。
一般人に過ぎず、脇役でしかない俺は、そんな結末を願わずにはいられなかった。
そんな結末を願っている一方で俺は、女の子がたくさん居る中、男が俺一人という幸せを噛み締めていた。
結末とかどうでもいいから現状がいつまでも続かないだろうか、と考え始めたとき「はいはい、ちょっと降りようねプリプリ」いつの間にか俺の傍に来ていた人物によって、俺の腕からプリムラが降ろされた。
「あわわわわ。っと、その渾名はやめてっていつも言ってるですよ！　イリーナさん！」
「聞こえなーい。ほら、モエモエも降りて」
「わっ、何ですかもぉ」
次いで萌も降ろされる。
ロリーズが失われてしまった。寂しさと腕が楽になってよかったという、どうでもいい葛藤がせめぎ合う。
何者かわからないが――まぁ魔法少女チームの誰かではあるのだが――俺に気配を悟らせる事なく接近するとは、なかなかに強者である。
気配察知に関しては、世界中を見回しても、俺の右に出るものし

か居ないというのに。
毎度のように展開に着いていけないので、どうでもいい事を考えながら楽になった腕をぷらぷらと振る。
ずっと同じ体制で二人を抱えていた所為か、少し両腕が痺れていた。そして指もありえない方向に曲がった所為か完全に麻痺していた。
目と指が痛みを感じなくなってきている。
本気でギャグ補正を信じずにはいられない。
「よしっと。ほい、それじゃスケっちはちょっと屈むか座って」
俺の腕からロリを奪った少女がスケッチを始めるようだ。この子、自由すぎる。
その言葉に、プリムラが間髪要れず反応した。
「大輔さんに何する気ですか！」
「プリプリが心配してるような事しないから大丈夫だってば。プリプリは大人しくエミエミとじゃれててよ」
「そうよプリムラ。まだ話は終わっていないわ」
「そもそも、話が噛みあってないので始まってすらいないです！」
見えてはいないが、地団駄を踏んでいるプリムラが手に取るようにわかった。
しかし、スケッチと俺がどのように関係しているのだろうか？俺の似顔絵など描いたとしても『この顔を見たら１１０番』くらいにしか使えないであろうに。
あっ、そのためか。
「モエモエも、そんなにこっち睨まないでよ」
「何を言ってるのぉ？　萌は睨んでなんかいないよぉ」
「いやいやいや。モエモエ、またオーラでてるから。それに私はモエモエの尻拭いというか後始末というか、何ていうかそんな感じの事をしてあげるんだからね」
俺がテレビで報道されでもしたら、きっとインタビューを受けた知り合いは口を揃えこうて言うだろう。『あいつなら、いつかやる

と思っていました』と。
その場面が鮮明に想像できすぎて悲しくなってきた。
俺に引導を渡すとしたら後藤さんだろうな、と考えていたら腕を引かれた。
「ほら、もうボーとしてないでスケっちは早く座る」
そう聞こえると同時に、俺は腕を引かれるがまま地面に腰を下ろす。そこで理解した。
スケッチではなく、スケっち。つまり俺の事を指していたようだ。
大輔だからスケっちですね。なるほど、わかりません。
プリプリ、エミエミ、モエモエ、ときて、まさかのスケっち。仲間はずれも大概にして欲しいものである。
目の前に居るであろう少女が、ため息を吐きながら恐ろしい事を言った。
「最初はモエモエも手加減してるだろう、って思ってたんだけどね。まさか血の涙を流し始めるとは思わなかったよ」
「えっ、なにそれこわい」
「怖いのは見てるこっちもだから」
そう言って苦笑したと思われる目の前に居るであろう少女は「だから、私が治してあげるよ。――ヒール」と言った。
直後、両目の辺りを暖かい何かが覆う。
突然襲った得体の知れない感覚に、思わず身動ぎしそうになる俺を同じ声が止めた。
「じっとしててね。この程度ならすぐ治るから。あっ、序でに指もやっとこうか」
「あ、あぁ」
どこか小さな子供を相手にしているかのような態度に釈然としないが、その優しい声色に、つい素直に従ってしまう。
そのまま待つ事数十秒。
両目と指を覆っていた暖かい何かが消え、少女の声が耳に届いた。
「はいおーわり。もう大丈夫だよ」

「……有難う」
その言葉を受け礼を返す。治療が終わると同時に舌打ちが二つほど聞こえたのは幻聴だと信じている。決して萌とエミリアではないと信じている。
というより萌、洒落になってなかったよ。普通に慰謝料もんだったよ。後で真剣に話し合おうね。
そっと開いた視界に、初めぼんやりとした赤色が映った。
霞んでいた視界が鮮明となるにつれ、徐々に輪郭がはっきりしていく。
そうして視界に映し出されたのは、にこにこと笑う赤髪セミロングの少女だった。
少女が笑顔のまま口を開く。
「どう？　ちゃんと見えてる？」
「あぁ、ばっちりだ」
「そう、よかったねスケっち」
俺の事をスケっちと呼ぶ少女が立ち上がる。
少女を追い視線を上げると、少女の全身が目に入ってきた。
赤を基調としたその衣装は、活発そうなこの少女にとても良く似合っている。
先程はないと言ったが、うん、赤髪も全然ありだ。
そして俺は視線を上げた事で、全員が此方を見ていた事を知る。
だから、俺だけが気づけた。
俺の前方に、赤髪の少女を含め全員が居て、全員が俺達の方を向いていてしまったが為に、もっとも役に立たないであろう俺が最初に気がついた。
咄嗟に俺が出来た行動といえば、其方を指差し大声を上げるだけ。
「逃げろ！」
俺の指差す方向。俺からもっとも離れた位置に居る紫色をした髪の少女の背後に、うねうねと蠢く触手が見えた。

其の三　４（後書き）

はーやくこいこいお正月休みー。

其の三　5（前書き）

山田覚醒とか絶対にないです。

其の三　5

その場に居た全員が反応する。
それには勿論、紫色をした髪の少女も含まれていて、
「ふぇっ？」
俺の言葉に、きょとんとした表情をうかべ緩慢に後ろを振り向いた紫髪の少女は、
「ひ――」
悲鳴を上げる間も無く――触手に胸を貫かれた。
その瞬間、確かに時が止まったように感じた。
ゲル状に見えた触手は、少女が振り向いた瞬間、先端を槍のように変化させ、俺の反射神経などでは残像しか視認できないスピードで少女の胸を貫通し、地面にまで刺さっていた。
自分では確認できないが、俺は叫んだ状態で固まっていて大分間抜けな表情をしているだろう。
眼前の光景。
胸を貫かれた紫髪の少女は、掲げるようにそのまま宙に上げられ、手足をぶらぶらと力なく投げ出している。
理解できない。何が起こったのか判断できない。少女が、どう考えても即死である事を認めたくない。
現状は俺の秤など余裕で超えていた。
それは戦闘経験があるであろう、エミリア達魔法少女も同じだったようだ。
俺ほどではないにしても、唐突な少女の死には、一瞬の混乱を招くだけの衝撃が充分すぎるほどあったのだろう。
そしてその混乱は、思考を鈍らせ判断を遅らせる。
「あ、あれ？　なに？　なんで？　どうしたのアミナ？」
紫髪の少女の近くに居た、ピンクの髪をした少女が、宙にぶら提げられた仲間に震える手を伸ばしながら、ふらふらと歩み寄る。

自分から、死地へと向かう。
少女の四方を囲うように、地面から四本の触手が現れた。
「――っ！　ノエルー！」
それを見て、エミリアが悲鳴にも似た叫びを上げ、周囲に展開していた剣を銃器のように射出し、自身もピンク髪の少女に駆ける。
「っ？」
エミリアの声に体を震わせたピンク髪の少女――ノエルは、名を呼ばれた方に振り向き――
瞬間、少女の周囲を囲んでいた触手を飛んできた剣群が切り裂き貫いた。
元々、お互いの距離はほぼ離れていない。僅か遅れて、その場に辿り着いたエミリアはノエルを抱き寄せ、
「あぁぁぁぁ！」
次いで十を超える剣群を出現させると、それらを地面に向け射出した。
爆発。
そうとしか表現のしようがない衝撃が、剣群が地面に刺さると同時に起きた。
先程居た位置から大分離れた場所に居た俺だが、それでも押し寄せる爆風に腕で顔を覆ったほどである。
あの場所から動いていなかったら、俺程度は余波だけで消し飛んできたかもしれない。
罅割れる大地。舞い上がる砂埃。
その中心地から、ノエルを抱えたエミリアが、以前周囲に剣群を展開したまま、俺達が居る場所まで飛んできた。
ちなみに何故、俺が元居た位置から移動しているかと言うと、エミリアが叫び飛び出した直後、俺は赤髪の少女に抱えられ大幅に後退させられていたのである。
それは萌とプリムラも同様で、緑髪の少女にこの場まで運ばれていた。

「あ、あぁぁぁぁ！　アミナっ！　アミナー！」
「っ！　ノエル！　お願い！　しっかりして！」
少女二人の悲痛な叫びを耳にしながら、舞い上がる砂埃を見ながら、僅かばかりに残った思考能力で考える。考え後悔する。
あの瞬間。紫髪の少女に迫る脅威を目にした瞬間。俺は何をした？
何故座り込んでいた？　何故駆け出さなかった？
俺だけが助けだせる可能性があったのではなかったのか？
あの場面で、指を指し、大声を上げる。それに反応してゆっくりと少女が後ろを振り向く。
それだけの猶予があったのなら、さほど離れてもいない距離だ。
俺が気づいた瞬間駆け寄っていれば彼女を助ける事が出来たのではないか？
何だこの体たらくは。
一般人だからか？　脇役だからか？　人一人の命が失われた言い訳にそんな理由がまかり通るとでも思っているのか？
――また、繰り返すのか？
そもそもが、俺が居たせいで意味もない会話に時間を取られていたのだ。少女達だけならば、すぐに話も纏まり既にこの場に居なかっただろう。
紫髪の少女が、死んでしまう事もなかったかもしれない。
考えれば考えるほど、自分という存在が疎ましい。
「……！」
何かが懐に飛び込んできて、思考の海から意識が引き戻される。
驚いてみてみれば、ブルーブラックの綺麗な髪が広がっていた。
プリムラだ。
此方の胸に顔を埋め、小さな体を大きく震わせている。
先程の光景は、幼い彼女には衝撃的過ぎたのだろう。ましてや、今の彼女には自身を守る術すらないのだ。恐怖しない方がおかしい。
いや、逆にこの程度で済んでいる方がおかしいのか。
俺がプリムラほどの年齢で、今と同じ状況に陥ったとしたら、す

ぐに失神した自信がある。今でさえ思考に没頭する事で、何とか精神を保っているのだ。当時の俺など確実に、二秒も現実を見ていられない。
プリムラも、エミリア達と同じ魔法少女なのだ。
きっと、この年で俺では想像もできない人生を歩んできたに違いない。
「プリムらぐえっ」
何が出来るわけでもないが、ただ彼女の名前を呼ぼうとした瞬間、首が絞まって場にそぐわない声が出た。
Tシャツの襟首をおもいっきり引っ張られる。
「大輔！　やべーって！　わけわかんねーよ！　早く、早く逃げるぞ！　早くファミレス！　なんだよあのうねうね！　パフェ食べたい！」
「ぐっ、萌ぐぇ、ちゃん、落ち着いぇ、て」
俺のTシャツを引っ張りながら、逃げようと急かす萌。
だいぶ混乱しているようだ。言っている事も支離滅裂で、本人が言うとおり訳が分からない。
「落ち着いてなんていられるかよ！　だって、だってあの紫のガキ死んだんだぞ！　いいから早く逃げるぞ！　ファミレスだ！」
「いや、ぐっ、ちょっマジ、タンマぐぇ……そぉい！」
「――うわっ！　いてっ！」
「――きゃぅ！」
一向に話を聞かない萌の体に腕を回し、無理矢理抱き寄せ黙らせる。
その際、抱きついていたプリムラと頭をぶつけてしまったようだが、今の俺にはそこまで気を回している余裕が残念ながらなかった。
ついさっきまでとは違う理由で後頭部を押さえながら震えているプリムラと、殺気のようなものを放ちながら額を押さえぷるぷるしている萌を意図的に視界から除外し、薄れてきた砂埃を見つめる。
まだ、この場を動くわけにはいかない。

あの触手の化け物が倒されたかどうか、確認するまで迂闊に動けない。
突然現れた触手。どこから出てくるかわからないうえ、有効範囲もわからない。
いつもながら情けない話だが、俺では萌もプリムラも守れない。彼女達を連れて逃げ切る自信もない。
だから、本当に情けないが、今はまだ戦えるエミリア達の側を離れる事ができないのだ。
砂埃が薄れていく。
其方を凝視する。
砂埃が薄れる。
エミリア達も其方を凝視しているようだ。
砂埃が薄れた。
抉れた地面。罅割れた大地。
其処に触手の影は見えない。
「……やった……のか？　――てっ、しまった」
言ってしまった後に気がついた。
これは脇役が絶対に言ってはいけない言葉であったことに。
直後、ソレは抉れた地面から湧き出るように現れた。

其の三　5（後書き）

先輩が言っていました。
「いいか。絶望とか不幸ってのはな、こっちが気づいたときにはもう既に手遅れなんだよ」
休み前に、納期を今一度確認した先輩の台詞です。
なるほど、と私は思い絶望しました。

其の三　6（前書き）

私のイメージでは戦闘中のエミリアはとてもかっこいいです。
私のイメージの中では……。

其の三　6

ソレの見た目は、ブルースライムと呼ばれたアメーバー状の粘性生物とさほど変わらない。
半透明の青色で、中心には球体らしきものが浮いている。
違いといえば口と思われる器官があることと、その体長くらいだろう。
十メートルは余裕であるであろう。ソレの大きさは、近くの民家を軽く超えていた。
「な、なんだよあれ」
「う、あぁ……エ、エンペラー……スライム」
萌とプリムラの絶望に満ちた呟きに答えるかのように、ソレは耳障りな咆哮を上げる。
「Ｏｇｙａａａａａａａ！」
大気が震えていると錯覚するほどの咆哮。
同時に叫ぶような、エミリアの指示が飛ぶ。
「イリーナは萌達の護衛と避難を！　ノエルの事もお願い！　萌の事はうまく伏せて応援も呼んで！　ローズとプリムラは私と一緒に時間稼ぎをするわよ！」
「了解！」
「わかったわ！」
「あ、あわわわわっ！　わたしもですか？」
エミリアは赤髪の少女――イリーナにノエルを託すと、薙刀に似た武器を構えた緑髪の少女――ローズと共に化け物へと向かって行った。
「貴様ぁぁぁぁ！」
「はぁぁぁぁ！」
十を超える剣群が本体を貫き、薙刀の鋭い一閃が触手を切り裂く。
それに対し粘性生物は、一撃必殺の威力があるであろう触手を振

り回し応戦する。
激しい戦闘が幕を開けた。
イリーナは、先程の取り乱しっぷりが嘘のように光を宿さない瞳で虚空を見つめるノエルを優しく抱きとめ、先端が三日月の形をした杖を出現させる。
それを地面に突き立て少女が何事かを呟くと、俺達の周囲を円状に何かが包み込んだ。
「結界を張ったから、このまま安全な場所まで逃げるよ」
そう言ってイリーナは、空中ににＳＦ映画でしか見たことがないようなウインドウを出し何処かと連絡を取り始める。
少女の顔に、もはや笑顔はない。
そして、まさかの戦闘要員として数えられていたプリムラはわたわたと、ただただ慌てていた。
「あわわわわっ。わたしもですか！　わたしも戦うですか？」
どうすればいいかわからず混乱している様子のプリムラは「えいっ！　です！」近くに落ちていた石を粘性生物に向け放る。
「はい、そうです。現在ローウェン魔道騎士団はエンペラースライムと交戦、痛い。いえ、なんでもありません。はい、至急応援をお願いします」
何かと連絡を取っていた様子のイリーナの頭に、こつんと当たった。
それを見て混乱の極みに達したのか、ぐるぐる眼となって手当たり次第に石を放り始めるプリムラ。
とりあえず、取り乱してエミリア指示通りに特攻されても困るので抱き寄せておく。
イリーナが此方を振り返らずに言った。
「プリプリ、怖いのはわかるよ。私も、痛い、すごく怖いもん。でもお願、痛い、い。いくらエミエミとロズロズでもエンペラー、痛い、スライムの相手は厳しいから、痛い、手伝って、痛い、あげ、すごく痛い！　……ちょっと頭冷やそうかプリプリ」

プリムラが投げる石は、すべて狙ったかのようにイリーナの後頭部に吸い込まれていった。なんというコントロール。
おもしろがって萌が投げた最後の一際大きい石が直撃した後、笑顔で振り返るイリーナ。だがその目はまったく笑っていなかった。ついでに涙目でもあった。
萌に勝るとも劣らずの迫力に圧され正気を取り戻したのか、プリムラはすぐさま俺の胸に顔を埋めイリーナの視線から隠れてしまう。萌は俺の腕に抱きつきニヤついた顔を隠している。
俺は「今シリアスだから！」と萌を嗜め、プリムラの頭を優しく撫でながら、プリムラの様子を見て一転、悲しそうな表情をしているイリーナに説明した。
「無理言わないであげてくれ。聞いていただろう？　今のプリムラは何とか石が無くて戦えないんだ。それでも、それでも戦力が必要と言うのなら――」
まだ、誰か死んでしまう可能性があるというのなら――。
「俺も戦――」
「まって、プリプリが魔道石を持ってないって本当だったの？」
「――おうかなとか思い上がっていた時期が俺にもありました。あ、はい、そうみたいです。そうでしょ、プリムラちゃん？」
「……はい、そうです。どこかに落としちゃったみたいで……」
恐る恐るといったプリムラの答えに、表情を驚愕に染め上げるイリーナ。
よほど驚いたのだろう。ノエルを支えていた腕から力が抜けたようで、ピンクの少女は力なく地面へと転がった。
それでもピクリとも動かないノエル。酷い話だが、その姿を見て改めて現状を思い知らされた。
そして状況は刻一刻と悪化していく。
落としてしまったノエルを「ごめんね」と再び支え上げたイリーナが驚愕の表情のまま、呟くようにプリムラに問いかける。
「なんで？　おかしいよそんなの。プリプリ魔道石もってないん

でしょ？　なら、なんで三人は空間複製結界の中に居るの？」
「えっ、だってそれは松本さんが居るから……」
「モエモエはもう私達とは一切繋がりがないよ。だから魔道石を持ってるわけがない」
「そうなんですか？」
イリーナとプリムラが何やら真剣に話し合いを始めてしまった。
どうやら何か問題が起きているようだが、俺にはまったくわからない。
個人的には萌とプリムラという非戦闘員が居るので早々にこの場を離れる事を提案したいのだが、果たして俺程度が発言してもいいものか悩みどころだ。
どうしても紫髪の少女の死が、俺に何か行動を起こさせる事を躊躇わせる。
いつもそうなのだ。過去の経験からも、俺の行動と発言は大抵場の空気を乱すか、相手を不快にさせる事が殆どだ。どうしても卑屈になってしまう。
一先ず様子見と言う事で自身を納得させ、意味はないと思うがそれでも周囲を警戒し始めた俺の耳元に口を寄せ、萌が小声で話しかけてきた。
「大輔、あいつらが言ってる魔道石って何だ？」
「ん？　いや、俺も知らないよ萌ちゃん」
「そうか」
そう言って難しい顔をした萌は、イリーナとプリムラの視界から隠れるように俺の後ろに回りこむ。
そして自身の胸元からペンダントを取り出し更に声を潜め言った。
「これ、怪しくね？」
「……そうだね。怪しくない要素が無いね」
俺は軽く眩暈を覚えながら答える。
萌が取り出したペンダントは、中心に不思議な光を宿した黒い宝石のようなモノ。

地球上に存在するとは思えない、どこか不気味な神秘が感じられる石。
だが俺には見覚えがある。微かだが、確かに最近見た覚えがあった。
それは、この公園。それは、この『事件』の始まり。それは、この淡い青色の少女との出会い。
あぁ、そうだ。確か、プリムラもこれと似たペンダントを持っていた。
「萌ちゃん？　どこでそれを？」
「なんかさー、知らねー白衣着たおっさんがくれた」
絶望した。

其の三　6（後書き）

なんとか休み中にもう一話投稿しようとしたらこんな時間に……。
遅筆すぎですね……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8409u/

山田大輔は主人公ではない

2012年1月4日02時51分発行